女子文壇

花圃

明治三十八年二月一日發行（每月一回）
明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可



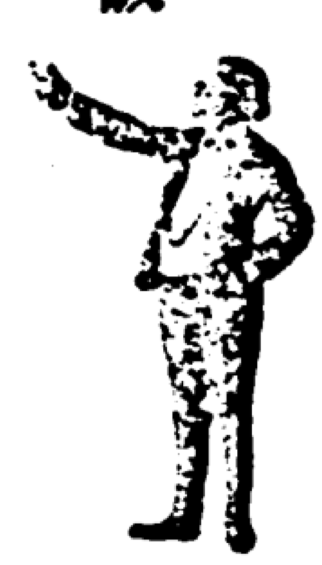
第壹卷
第貳號

三宅花圃女史題字　山中古洞畫

東京
女子文壇社發兌


東京 平尾賛平製
日本美人あらひ粉
聖路易萬國大博覧會名譽銀牌
ダイヤモンドハミガキ
元祖
小町水

一巻第二號　女子文壇　目次



本號より大刷新

名譽賛成員

（イロハ順次第不同）

文藝俱樂部記者　巖谷小波君
石橋思案君
石井研堂君
醫學士　石原喜久太郎君
二六新聞記者　江見水蔭君
東京府女子師範學校教諭　岩本ふく子君
東京府師範學校訓導　今村武男君
帝國大學、高等師範、日本女子大學教授　文學博士　萩野由之君
慶應義塾教授　林毅陸君
太陽記者　長谷川天溪君
女子教育奬勵會　東京女學館幹事　西田敬止君
島根縣女子師範學校教諭　錦織竹香君
衆議院速記者　新井田次郎君
太陽記者　鳥谷部春汀君
東儀鐵笛君
獨逸學協會　早稻田大學講師　文學士　長連恒君
東京女子高等師範學校講師　文學士　尾上柴舟君
文學士　大町桂月君
獨逸學協會學校長　大村仁太郎君
大和田建樹君
大塚楠緒子君
仙臺第一中學校教諭　大宮宗司君
東京府女子師範學校教諭　大塚治六君
東京府女子師範學校教諭　岡田ふみ子君
女子圖案會理事　岡不崩君
東洋女藝學校講師　岡みち子君
醫學士　岡本武次君
博文館發行戰爭實記記者　押川春浪君

新潟縣女子師範學校長　川面松衛君
市立下關商業學校教諭　川崎又次郎君
萬朝報記者　茅原華山君
川崎默堂君
河合英忠君
醫學士　樫田龜一郎君
福岡縣東筑中學校長　金澤來藏君
鏑木清方君
女學世界記者　勝間恒彦君
春日廓悟君
吉田晩稼君
武内桂舟君
文藝俱樂部記者　武田櫻桃君
攻玉社教師　竹貫登代多君
少年世界記者　竹貫直人君
東京心性學館主　高橋邦三君
大阪新報社總務部長　高橋雄峰君
萬朝報記者　高橋鬼川君
田邊太一君
醫學士　田村光顯君
太陽記者　田山錄彌君
市立甲府商業學校長　田崎要君
中學世界記者　鷹野止水君
博文館編輯局主幹　坪谷善四郎君
津田梅子君
早稻田大學講師　東京中學校教師　土谷詮教君
文學士　中内蝶二君
醫學博士　中濱東一郎君
中村千代松君

名譽贊成員

（イロハ順次第不同）

中里峻峰君
三井同族會書記長 成瀬隆藏君
日本女子大學校長 成瀬仁藏君
東京府女子師範學校教諭 永田とめ子君
學習院教授 南日恒太郎君
農科大學講師文學士 村上辰午郎君
村岡良弼君
中學世界記者 上村左川君
博文館出版部長 内山正如君
文學士 久保天随君
熊本私立尚絅高等女學校教諭 栗田正治君
文學士 栗林己巳藏君
法學士 熊倉操君
學習院教授 山口弘一君
博文館副支配人 山田靜三君
高等師範學校教授 山田萬太郎君
山中古洞君
在農科大學 矢田鶴之助君
東京府共立女學校監督子爵 松井康義君
萬朝報記者 松井柏軒君
女學世界記者 松原廿三階堂君
前田曙山君
福井學圃君
東京女學館教授 國分操子君
太陽記者 國府犀東君
東京府女子師範學校教諭 小寺あや子君
加持世界記者 小林雨峰君
文學士 幸田成友君
農學士 近藤仙吉郎君

文學博士 姉崎正治君
東京女子高等師範學校教授 東基吉君
竹柏園主幹 佐々木信綱君
東京女子高等師範學校教授 佐藤球君
醫學士 佐々倉永三郎君
獨逸學協會學校講師 佐藤吉次君
横濱商業學校教諭 坂本盛一君
市立下關商業學校長 齋藤軍八郎君
學習院教授 北里闌君
太陽記者 岸上質軒君
少年世界記者 木村小舟君
日本女子大學校教授 三宅花圃君
三宅克巳君
部新聞記者 宮川鉄次郎君
博文館出版部 宮川大壽君
日本女子大學校教授 文學士 鹽井雨江君
獨逸學協會學校講師 文學士 芝葛盛君
獨逸學協會學校講師 文學士 志田義秀君
愛國女學校講師 京華中學校教諭 鹿田熊八君
東京府女子師範學校教諭 神通せき子君
從二位伯爵 東久世通禧君
廣津柳浪君
獨逸學協會學校講師 守屋荒美雄君
本居直臣君
籾山衣洲君
雪中庵雀志君
學習院教授 杉田義雄君
慶應義塾教授 菅緑蔭君

（以上は本號〆切迄に快諾を得たる芳名なり）

本誌の評判

▲女學世界評

江湖の名流、知名文士の賛成を以て起りたる「女子文壇」は新春の一月元旦を以て新たに其第一卷を發行せり、其内容は妙齡なる才媛の織手に成りたる玉の如き美文、和歌、俳句、小説、新體詩、消息文等にして、いつれも錦心繡腸の佳什多く、猶名家文壇には歌界の泰斗東久世伯の春の歌を始めとして鹽井文學士、佐々木竹柏園主、尾上文學士、中內文學士、小川直子刀自、長谷川天溪、大和田建樹其他文界先進の短篇十數章を掲載せり、口繪其他の裝飾淸楚にして青年婦女の伴侶として尤も其撰を得たるものなり。

▲大坂朝日新聞評

本年の文壇は彌增しに女子の勢力の分布を認め得べきなり、而して「女子文壇」は劈頭第一に新刊せらる、今の婦人教育、女子文辭に關れる人士は、大抵名譽賛成員として其名を列し、記事の配置まことに手際なり

早稲田の雪



皇次孫淳宮殿下





棚橋絢子女史



奥村五百子女史



下田歌子女史



跡見花蹊女史



鳩山春子女史



三宅花圃女史

文學士 大町桂月先生序文
天溪 長谷川誠也君校閲
立野天風君編

立志訓 全一册

二月上旬出來

洋裝袖珍美本 正價貳拾錢 郵税四錢

大町先生の序に曰く「われ德育上學校の倫理談のみにては不可なるとを知り、學生の爲に、學生訓、處世訓、青年訓などの書をひきつゞき、世に公にしけるが、淺學菲才なる身の言ふ所、もとよりオーソリチーとなすに足らず。閑あらば、古今東西の先哲の至言を集めて、一部國民の經典とするに足るべきものをつくらむと思ひしが、今立野君の此書を見るに、余の作らむと思ふものをつくられたり。余は日本國民の爲に一部簡便なる經典を得たることを祝せざるを得ず」以て本書の價値を知り賜へ。

發兌元 東京市小石川區指ヶ谷町百卅三 **文光堂**

大賣捌所 東京堂、東海堂、北隆館、良明堂外書店

皇后陛下へ賜はりし華族女學校令旨を同校若林常猛先生謹書し毎號習字手本とし並に繪畫に圖案の懸賞授與法は貳號より掲載 ◎其他各女學校入學試驗問題解答◎會員募集◎

毎月壹回 第四號 二月一日發行 全學期一年半完結

通信女子教授 學術講義

會長 東京府教育會長 子爵岡部長職君

▲教育科	東教授
▲修身科	篠田教授
▲國語科	佐方教授
▲地理科	伊藤教授
▲歷史科	高木教授
▲理科	林校長
▲家事科	下田學監
▲英語科	原講師
▲裁縫科	喜多見舍監
▲作法	小笠原講師
▲女子衛生	鷲山校長
▲兒童心理	松本教授
▲傷病手當法	三好醫學士
▲習字	若林教官
▲習畫圖案	渡邊香涯
▲割烹科	赤堀講師
▲茶道講話	井城抱齋
▲挿花	秋香庵一英

入會金廿錢 會費三ヶ月七十五錢 六ヶ月一圓五十錢 全學期四圓五十錢 ◎見本廿五錢◎規則進呈

發行所 東京神田橋際 東京府教育會附屬 **女子講學會**

女子文壇

第壹巻第貳號

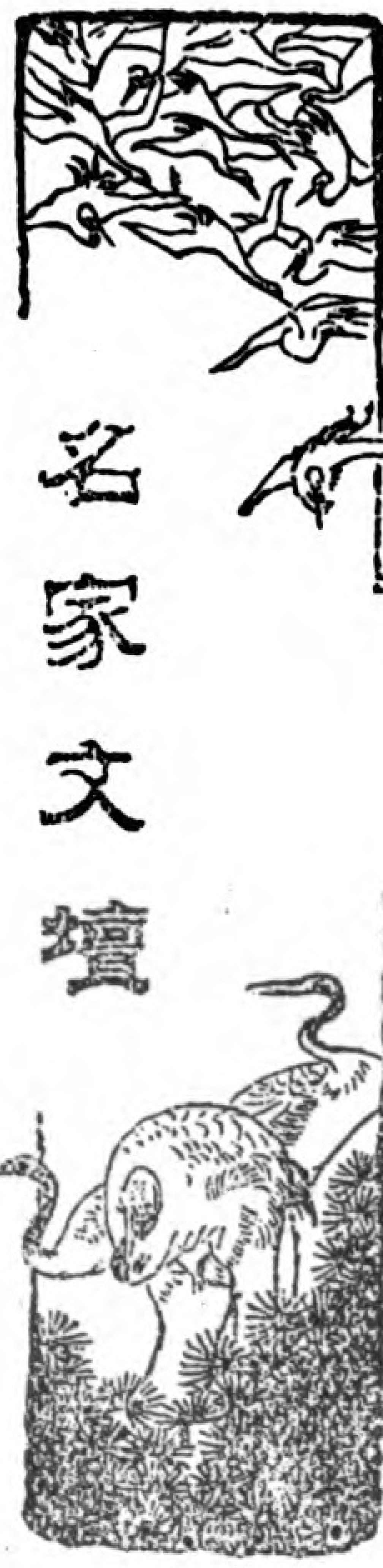
二月一日發兌



第二聲

明治三十八年一月一日は、我日本國民の永久に紀念すべき一大祝日也、國民十年の怨府たる旅順口は、此日を以て全く陷落し、世界史上に無比の光輝を放ちたるの日なれば也、而して此祝福すべき好箇の紀念日に於て、多幸にも我女子文壇は、其發刊の第一聲を擧げたるなりき、女子文壇は洵に光榮なる哉。

女子文壇の第一聲が非常の同情を以て歡迎せられ、今猶止まざる其歡聲の裡に、又た此希望に滿てる第二聲を擧ぐるを得、一社同人の慶悦何ものか之に如かんや、願くは我敬愛する幾萬の讀者諸姉よ、向後益す奮ひ來りて吾等の志を援け、此好紀念日の產物をして長へに榮あらしめんことを。



女子の文藝

文學博士　萩野由之

物事は世と共に進みゆく習ひなれば「後世畏るべし」といふことは、確に一つの格言なり。「安ぞ來者の今に如かざるを知らん」は餘地を遺したる言ひ樣のみ。維新の前の有樣と、後の有樣とは、別の世界の心地すれば、遙に溯りて足利時代鎌倉時代とたどりゆかんには、なほ一層の差異を感ずべし。

生活の一事についても、此の感じは明白なり。奈良朝の衣食住よりも、平安朝のは勝れ、平安朝のよりも鎌倉足利を經て、徳川時代のは大に進歩したるを見る。まして明治の今に至りては、古來未曾有の進歩を表はしたるは著明なることなり。

古人が物事を學ぶに「古を師とす」といへることは、今を蔑にするやうにきこゆれども、そは古人の善き所を學ぶことにて、一も二もことごとく古人を摸倣するといふの意にはあらず、物事は後世ほどよく發達もし進歩もするは道理なれども、その發達進歩は、古人の善き所長じたる所を取りて、足らぬ所整はぬ所を補ひてゆけばこそかくなるなれ。

然れども、中にはまゝ古代よりも退歩せしやうに思はるゝものなきにあらず。美術の方面において然り、殊に女子の文藝において然り。

試に王朝時代に見よ、南都の古寺に存する天平時代の彫刻物は、藤原時代の彫刻に勝り、鎌倉時代のは又藤原時代のに劣れり。世に名高き大佛についても見よ、奈良の大佛は天平の建立といへども、今の大佛の面部は徳川時代の作なるが故に、鎌倉の大佛に比ぶれば甚拙し、上野公園のも徳川時代の作にして又下れり、神戸なる明治の作の大佛は又一層の下劣なるにあらず

や。

國文殊に女子の文藝においても、これと同樣の趨勢なるを見るは如何。平安朝時代においては、國文は殆ど莟を破れるばかりの初期なりしなり。而るに源氏の物語は古今に立ち超えての大作たり、上流社會の正面側面を遺憾なく描き出し、男女の情意を精細に寫し取れる所、當時は固よりその後の男子の漢文にもこれに匹敵するものあるか、この外淸少納言の枕草子の奇警なる批評的眼力は驚くばかりなるあり。又蜻蛉日記を讀まば良家の夫人が夫に對する情好、夫の遠ざかれる恨みつゝも、なほ夫の心を失はずして、その子を養育し、其の子生長しては仕官の上の注意何くれと後見し、心盡くしの程の筆端にほとばしれるあたり、實に賢妻良母の鑑と厥に堪へたるものあり。時の鬚眉男兒の記にかゝるものなりや。この外當時の女流には、何の局彼の命婦をいふ中に、名に傳はらず著作も知られぬ人にて、なほ多くの文人はありしなるべし。

さればこそ國文界は全く女子の占領にて、男子に指をも染むること能はず、希に國文にて物書かんとすれば、名を女子に假りて書く、紀貫之の能文なるさへ、尙女になりて土佐日記はかきたり。女文字を以て國文の一名となしたるは、女子に取りての大名譽なりしなり。

此の名譽ある女文學といふ語は、幾許の命脈を保ちたるか、あはれ藤原氏の榮華は源平武士の旗風に散り初めてより、文學は抹香臭き僧侶の手に落つると同時に消滅して、女界の文華は一時の狂花にて止めり。德川時代各種の文藝の進歩著しかりし時にも、女流の文人を求めば、五本の指を屈して餘あるばかりなりき。明治の大御代はた如何。

明治の大御代は、古今に冠絶せる聖代なり。まして歐洲に最强を誇れる露國と對戰して、偉大の克捷をつゞけたる以上は、文學もまた武力の發展に伴はざるべからず。

勿論文學は近年非常の發達を致せり、然れども國運の發展に伴ふほどの結果は尙遙かなり。ましてや女流文壇の光景に至りては甚だ寂寞を感ぜざるを得ず、淸

紫の倫は俄に望むべからざるにもせよ、夫以下の二流三流と肩を並ぶべきほどのものさへ尠きが如し。

彼の時代における女子教育は完全なりしか、上流の女子といへども、學問すれば人に嘲らるゝが故に、紫式部の才學にてさへ、一といふ字をも知らぬふりせしよし、彼れが日記には見えたり。學問の困難なる固より同日の話にあらず。今は學問の便利一方ならぬ上に、學問するをば世の賞賛する所なるに、などかくは人材の少きにや。

余はおもふ女子の心の小きなり。今の女子は怜悧なり、故に器用に筆を執るものはあり、機警の想を表はすものはあり、然れども皆規摸の小なるを如何せん、根柢の淺薄なるを如何せん。故に一たび他の批評非難に遭ふときは、脆くも我を折るなり、氣を挫くなり。

清少納言は曰く、「人には一に思はれなば更に何かせん、二三にては死ぬともあらじ、一にてをあらん」といへり。此意は人に愛せらるゝならば、第一等におもはれん、然らば本望なれど、二流三流に下ることは死でものぞまずといへるなり。此の語には多少の弊なきにあらずといへども、この氣慨ありてこそ、少納言なる文章も千載に傳はれるなれ。今の女流にこの氣魄あるもの幾許ありや。清少納言の第一流は、京都を中心とせる小日本の第一流なりしなり、今は世界と伍列せる大日本の第一流たるべし、又進みては世界の第一流たるべき希望もなくてやは。

（完）



國文評釋

文學士　中内蝶二

竹取物語（二）

○龍の首の珠の條

大伴の御行の大納言は、我家にありとある人を召し集めて、のたまはく、龍の首に五色の光りある玉あなり。それを取りて奉りたらむ人には、ねがはむことをかなへむとのたまふ。

〔釋義〕我家にありとある人　我家に仕へたる殘らずの家來。ありとあるとは、ある限りの、殘らずの凡ての、などの義あり○ねがはむことを云々　龍の首の玉を取りて献じたる人には、何事にても、願ひ望むことを聽き屆け得させむとなり。

をのこども、仰せのことをうけたまはりて申さく、仰せのことは、いとも尊し。たゞし、此玉はたやすく得とらじを、いはむや、龍の首の玉は、いかゞ取らむと申しあへり。

〔釋義〕をのこども云々　大納言の家臣等、その命令を聞きて、申上げゝるやうとなり○いとも尊し　甚だ尊き御言葉、そむき難しとなり○たゞし此玉云々　併しながら、凡そこの玉と云ふものは、容易に手に入れ難きものであるのに、まして、龍の首にある五色の玉は猶更のこと、如何にしてか取り得べきと、申し上げたるなり。たゞしとは、たゞ、または、併しながら、などの意味ありて、こゝには、併しながらの意に用ひられたるなり。たはやすくは、たやすくと同義なり。

大納言のたまふ、君のつかひといはむものは、命をすてゝも、おのが君の仰せごとをば、かなへむとこそ思ふべけれ。此國になき天竺もろこしのものにもあらず、この國の海山より、龍はおりのぼるものなり。いかに思ひてか、汝等かたきものと申すべき。

〔釋義〕大納言のたまふ　こは、のたまふやう。または、のたまはくなどあるべきところなり○君のつかひと云はむものは　君の家來と云はれるほどのものはの義。つかひとは、仕へたる人といふことなり○かなへむとこそ思ふべけれ　君の命令に應じて、その通り成就しやうと心がくべき筈のものであるとなり○此國になき云々　龍の首の玉といふものは、この日本の國になくして、唐土、天竺へまで探ねに行かざれば、手に入らずと云ふほどのものにあらずとなり○この國の海山より云々　龍はこの日本の國にも棲めるものにて、山より下り、海よりのぼる所を見たるもの多しとなり○いかに思ひて

か云々　其方どもは、何と思うて、この玉を得難しなぞと申すぞとなり。

をのこども申すやう、さらばいかゞはせむ。かたきものなりとも、仰せ事にしたがひて、もとめにまからむと申す。

〔釋義〕さらばいかゞはせむ　左樣に仰せらるれば、いかやうとも致し方なし、仰に從ひ申すべしとなり○かたきものなりとも云々　たとひ龍の首の玉は取るに難からうとも、君命なれば、背くことも出來ざるゆゑ、取りに參り申すべしとなり。まかるは、普通には、退く、退出すなどの意に用うれども、また其反對に、往く、參るなどの意に用ひらるゝこともあり。こゝには、後者の意に用ひたり。

大納言見わらひて、なむぢ等、君のつかひと名をながしつ、君の仰せ事をば、いかゞはそむくべき。とのたまひて、龍の首の玉取りにとて、出だし立てたまふ。

〔釋義〕見わらひて　大納言、家來等のふしようぶしように命令に從ひたるさまを見て、嘲り笑ひてとなり○君のつかひと名を流しつ　其方ども、我家の仕へ人といふ名を、普く世間に流して知られたりとなり。名を流すとは、評判の博く傳はることなれど、後には、浮名を流すなどいひて、惡名の立つことに用ひらるゝに至れり○いかゞはそむくべき　何うして背くことの出來やうぞとなり○出だし立て　出立せしむることとなり。

この人々の道のかて食ひものに、殿の內の絹綿錢などある限り取り出でゝ、そへてつかはす。この人々かへるまで、いもゐをして我は居らむ。この玉取りえでは、家にかへりくなとのたまはせけり。おの／＼仰せうけたまはりて、まかり出でぬ。

〔釋義〕この人々　玉を取りに出立する人々なり○道のかて食ひものに　道中の糧食の料としての意○殿の內の絹綿錢など云々　殿中に有るかぎりの絹、綿、錢を、殘らず與へたりとなり。昔は、錢のみに限らず、絹、綿なども、貨幣として用ひられたり○いもゐ　神佛に願ひを立て、精進潔齋して

ゐることをいふ○まかり出でぬ　皆々旅立ちしたりとなり。

龍の首の玉とりえずば、かへり來なとのたまへば、いづちも〳〵、足のむきたらむ方へいなむとす。かゝるすきごとをしたまふことゝ、そしりあへり。賜はせたるものは、おの〳〵分けつゝ取り、或はおのが家にこもりぬ。あるひは、おのが行かまほしきところへいぬ。親きみと申すとも、かくつきなき事を、仰せたまふことゝ、ことゆかぬものゆゑ、大納言をそしりあひたり。

〔釋義〕龍の首の玉云々　これよりすきごとしたまふことまでは、家來等のひそかに、大納言を誹りあひたる言葉なり。上に大納言の命じたる言葉を、そのまゝ受けて、龍の首云々と繰りかへせど、取り得ではとありし言葉を、取り得ずばと改めたるは、うけたまはる方より云ふが故なり○いづちも〳〵云々　龍の居る所は、何處とも目あてなければ、何方へなりとも、自分の足の向きたる方角へ、氣まゝに行かむと思ふなりとの意。いづちも〳〵とは、何方へなりとものの義にて、いなむとすとは、行かむとす。といふに同じ○すきごと　好色のことなり。大納言が赫映姫の色香に迷ひて、かゝる無謀の企てをなせることを誹れるにて、なほ委しきことは、評論の條に說くべし○賜はせたるものは　大納言より下し賜ひたるものはの義○或はおのが家にこもりぬ云々　もとより龍の首の玉を取り得むことなど思ひもよらねば、家來等、君の前は出立したるやうに、つくろひて、ひそかに、己の家に閉ぢ籠りて遊び居るものもあり。或はまた、龍をたづぬることよせて、自分に行きたしと思ふところへ遊びにゆくもありとなり。いぬとは、行きぬの義○親きみと申すとも云々　これより、仰せたまふことまでは、家臣等が、大納言をそしり合ひたる言葉なり。その大意は、親には孝行をつくし、君には忠義をつくすべきものにて、親や君の命令には、そむくべからざるものとは云ひながら、このやうな、龍の首の玉を取りて來れなどと、なすべき方便もなき、無法の事は、

か云々　其方どもは、何と思うて、この玉を得難しなぞと申すぞとなり。

をのこども申すやう、さらばいかゞはせむ。かたきものなりとも、仰せ事にしたがひて、もとめにまからむと申す。

〔釋義〕さらばいかゞはせむ　左様に仰せらるれば、いかやうとも致し方なし、　仰に從ひ申すべしとなり○かたきものなりとも云々　たとひ龍の首の玉は取るに難からうとも、君命なれば、背くことも出來ざるゆゑ、取りに參り申すべしとなり。まかるは、普通には、退く、退出すなどの意に用られども、また其反對に、往く、參るなどの意に用ひらるゝこともあり。こゝには、後者の意に用ひたり。

大納言見わらひて、なむぢ等、君のつかひと名をながしつ、君の仰せ事をば、いかゞはそむくべき。とのたまひて、龍の首の玉取りにとて、出だし立てたまふ。

〔釋義〕見わらひて　大納言、家來等のふしようぶしように命令に從ひたるさまを見て、嘲り笑ひてとなり○君のつかひと名を流しつ　其方ども、我家の仕へ人といふ名を、普く世間に流して知られたりとなり。名を流すとは、評判の博く傳はることなれど、後には、浮名を流すなどいひて、惡名の立つことに用ひらるゝに至れり○いかゞはそむくべき　何うして背くことの出來やうぞとなり○出だし立て　出立せしむることとなり。

この人々の道のかて食ひものに、殿の内の絹綿錢などある限り取り出でゝ、そへてつかはす。この人々かへるまで、いもゐをして我は居らむ。この玉取りえでは、家にかへりくなとのたまはせけり。おの／＼仰せうけたまはりて、まかり出でぬ。

〔釋義〕この人々　玉を取りに出立する人々なり○道のかて食ひものに　道中の糧食の料としての意○殿の内の絹綿錢など云々　殿中に有るかぎりの絹、綿、錢を、殘らず與へたりとなり。昔は、錢のみに限らず、絹、綿なども、貨幣として用ひられたり○いもゐ　神佛に願ひを立て、精進潔齋して

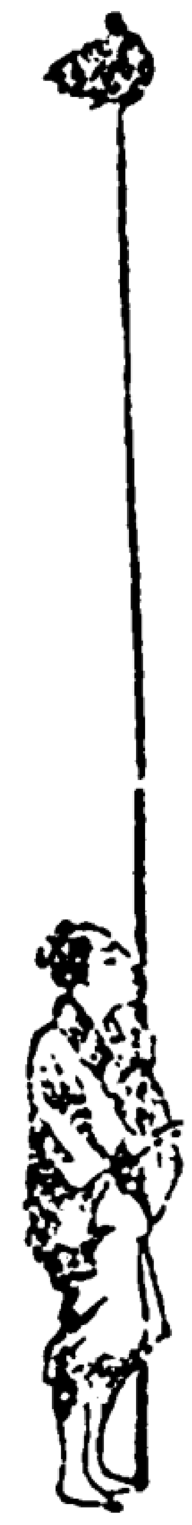
ゐることをいふ○まかり出でぬ　皆々旅立ちしたりとなり。

龍の首の玉とりえずば、かへり來なとのたまへば、いづちも〱、足のむきたらむ方へいなむとす。かゝるすきごとをしたまふことゝ、そしりあへり。賜はせたるものは、おの〱分けつゝ取り、或はおのが家にこもりぬ。あるひは、おのが行かまほしきところへいぬ。親きみと申すとも、かくつきなき事を、仰せたまふことゝ、ことゆかぬものゆゑ、大納言をそしりあひたり。

〔釋義〕龍の首の玉云々　これよりすきごとしたまふことまでは、家來等のひそかに、大納言を誹りあひたる言葉なり。上に大納言の命じたる言葉を、そのまゝ受けて、龍の首云々と繰りかへせど、取り得ではとありし言葉を、取り得ずばと改めたるは、うけたまはる方より云ふが故なり○いづちも〱云々　龍の居る所は、何處とも目あてなければ、何方へなりとも、自分の足の向きたる方角へ、氣まゝに行かむと思ふなりとの意。いづちも〱とは、何方へなりともの義にて、いなむとすとは、行かむとすといふに同じ○すきごと　好色のことなり。大納言が赫映姫の色香に迷ひて、かゝる無謀の企てをなせることを誹れるにて、なほ委しきことは、評論の條に說くべし○賜はせたるものは　大納言より下し賜ひたるものはの義○或はおのが家にこもりぬ云々　もとより龍の首の玉を取り得むことなど思ひもよらねば、家來等、君の前は出立したるやうに、つくろひて、ひそかに、己の家に閉ぢ籠りて遊び居るものもあり。或はまた、龍をたづぬるにことよせて、自分に行きたしと思ふところへ遊びにゆくもありとなり。いぬとは、行きぬの義○親きみと申すとも云々　これより、仰せたまふことまでは、家臣等が、大納言をそしり合ひたる言葉なり。その大意は、親には孝行をつくし、君には忠義をつくすべきものにて、親や君の命令には、そむくべからざるものとは云ひながら、このやうな、龍の首の玉を取りて來れなどと、なすべき方便もなき、無法の事は、

何としても、為とげがたしとなり。つきなきことゝは、為べき方便なきことゝことゆかぬものゆゑとても調ひがなき事ゆゑとなり。（つゞく）

《評論は、この項完結の上、其最後に加ふべし》



月香（今古奇觀より）

文學士　久保天隨

風水人間不レ可レ無、也須陰隲雨相扶
時人不レ解蒼天意、枉使ニ身心一著ニ意圖

近き世の事と聞きしが、浙江州府に王春といへる人あり、其兄を王奉といひける。おの〳〵一女を生みけるが、王奉の女を瓊英、王春の女を瓊眞と呼び做しけり。瓊英は本郡に名だゝる富家潘百萬の子潘華といふに妻はせ、瓊眞は本郡の蕭別駕の子蕭雅といへるに妻はさむと、振分髮の稚き頃より、行末を思ひわづらふ親々の間に堅き約束をぞ結びける。かくて、瓊英十歳になりしとき、母なる人、先づ身まかり、父なるも繼いて亡せたりしが、かの王春臨終の折、其弟を枕邊に近く招ぎ寄せ、冥路の迷の種ともなりぬべき一人娘の瓊英をしかと托していひけるは、知らるゝ如く、我には跡を嗣ぐべき男子とてはなく、唯だ此娘一人のみなれば、我が無からむ後には、汝が長女とも見て、やがて人となりたらむには、兼ねて約せしが如く、必ず潘家に妻はし、汝が嫂たりし人の形見なる衣裳調度の類、その數を揃へて與へらるべく、その上、さきに潘家より結納のしるしにもとて送り越したる田莊もあるなるが、これも一生の化粧料として、身に付けさせ呉れよと、拜むばかりに賴み聞こえて、さむる由なき長き眠に入りぬ。送葬の事など、成しはてし後、王奉は瓊英を我が家に呼び迎へ、おのが娘の瓊眞と一つに住はせて、こよなき遊び敵とはなしたりける。ある歳の元旦、潘華、蕭雅の二人、ゆくりなくも、同じ折に、王奉の家に來りて、年頭の禮を述べたりしが、かの潘華の人と爲り、天の成せる美貌、顏の色あくまで

白く、臥蠶の眉、丹花の唇、さながら畫けるが如く、女にして見まほしきばかり、人呼んで玉孩童といひしも理や、それに引きかへて、蕭雅は、滿面の痘痕、いとも醜きが上に、眼は凹み、齒は反り出でゝ、飛天夜叉とも言ひたげなるが、一美一醜、相並びて、標致よき方は美しき玉の光を增せしが如く、惡しき方は泥上愈よ色なきが如し。それさへあるに、潘華は、衣裳など殊にきらびやかに、すべて家富めるを誇れるが如く、蕭雅は浮きたる心、露もなき人なりければ、さばかり着飾ることはせで、常にいへりけるやう、佛は是れ金裝、人は是れ衣裳とは、如何なる者の言ひふらせしにやあらむ、悲むべきは、世の人、眼孔いとも淺く、皮相のみを見て、骨相を窺ひ得ぬことなりとて、打ち澄まし居たりけるが、この日、王家のありとあるもの、男といはず、女といはず、いづれも潘家の若殿、名にしおふ潘安仁の生れ換りと見ゆるばかりなるを賞めたゝへ、又同じ唇を反へしつゝ、聞こえぬながら、かの飛天夜叉の怖ろしきばかりなるを誚らぬはなかりける。主の王奉も亦た、行く末おのが婿ともなるべき男の、かばかりなるを見て、さすがに快からず、覺えしが、この事ありし後、蕭別駕任地にて逝りしといふ報知來りければ、蕭雅は取るものも取りあへず、その地に馳せ、やがて柩を扶けて歸りけるより、累代淸官を以て聞こえし家の、もとより餘財とても無ければ、その後、よろづ足らぬがちなるに引きかへ、潘家はいよ〳〵富み榮え、勢猛の者といひ囃されければ、王奉は我が子のいとほしさにつけて、不圖良からぬ心を起し、ひとりつく〳〵と思ひ廻らしけるは、蕭家は今甚だ貧しく、婿となるべき男もあまりといへば醜きに、潘家は富めるが上に、婿も世の常ならず姿形すぐれたれば、雙方の婿は言ふにも及ばず、娘や姪のまだ互に顏を見知らぬこそ、願ふてもなき幸なれ、とてもの事に、雙方を代へて呉れむ、誰とて我が生みの娘を明日をだに知らぬ貧しき家に嫁がしむるものやはあると、分別すでに定まりければ、いよ〳〵婚姻の日となりし折、瓊眞を率て行き、これこそおのが姪なれとい

ひ、その昔、兄なりけるが殘し置きつる衣裳をはじめ、田莊をも付けて與へ、又瓊英を親身の娘といひふらし、かの飛天夜叉の許に送りて、其妻となし、前にくらべては九牛の一毛ばかりなるものを、おのが手よりぞ添へたりたる。もとより愚ならぬ瓊英なれば、薄々この事を察したれども、何事も、むすぶの神の定め故、今さら詮なしと、思ひあきらめて、その儘にしたりけるとかや。さても、その後、月日に關守なく、花の春、紅葉の秋、いく度か廻り來ぬるが、かの潘華は、自ら家の富めるを恃み、生來詩書を習はず、生理を務めず、賭博など、良からぬ遊に耽り入り、父親日ごとに諫めけれども、馬耳東風のそれにも增して、露ばかりも用ひざりければ、つく〳〵と味氣なき日を送りつゝ、浮世の秋に先ちて、つひに身まかりけるを、不孝の子は悲しとも思はで、結局邪魔物を拂ひ出したる如く心得、今は誰憚るとしもなく、日々に無賴の小人を友に酒食遊戲しければ、まだ十年とももならぬ中に、さしもの財寳、殘りなく使ひ盡し、我がものとては、竈の下の灰もなく、岳翁なりける王奉、さすがに見兼ねて、心づけして貢ぎたれども、たとへば、燃ゆるばかりなる炭の中に、雪の一塊、置きたらむが如く、聊かも其效なく、はては着るに衣なく、食ふに穀なき苦に責められ、岳翁を瞞して妻を其家に追ひ還へし、おのれは人の家に住み込みて下部となりければ、王奉も今は運命の拙きをあきらめて、瓊眞のみを迎へ取り、一生乏しからず、養ひ過ぐすことゝなし、婿をば、喪家の野良犬、忌はしきものにしつ。かくて、潘華は、零落して如何に成り行きしか知る由なきに引きかへて、蕭雅は、勤苦して、書を讀み、その後、一擧して名を成し、直に尙書の高位に上り、瓊英は一品夫人に封ぜられけるとかや。詩あり、證となすべし。

目前貧富非レ爲レ誰、人後窮通未レ可レ知、
顚倒任レ君瞞昧做、鬼神昭鑒定無レ私、

これを讀まむ人、王奉女を嫁せしを、如何なれば、かくは山鳥の尾の長々しく說き出でつらむと怪み玉ふべけれど、そは世人只だ眼前のみを見て、日後を顧みず、

人は損しても己さへ德づけば善きものとなしつらむを、思ひきや、人に百算あるも天は只だ一算あるのみならむとは。汝等が得知らぬところに、一條の路ありて、天は思ふがまゝならず、されば平日善を行ふを旨とすべきよし、說き知らさむが爲なり。次に語り出づる話は、王奉とは全く相反せるものにして、兩縣令、義を競うて孤女を嫁せしめしことなり。この故事は、梁唐晉漢周、五代の季に起りしことにして、その時、周の太祖郭威、九五の御位に在まし、廣順と改元しつ。もとより正統の尊きにおはしけるが、天下未だ混一の勢に就かず、四方に割據して、雄を稱するもの、幾處もありて、五國三鎭と呼びける。その五國といふは、周の郭威・南漢の劉晟・北漢の劉旻・南唐の李昇・蜀の孟知祥にして、三鎭といへるは、吳越の錢鏐・湖南の周行逢・荊南の高季昌なり。その中、南唐の李氏は、江州地方一帶を領しけるが、德化縣といへるに一人の知縣あり、姓は石、名は璧といひ、もとは撫州臨川縣の人なりしが、建康に流落し、年四十の折、妻を喪ひ、その形見は、八歲になりし月香といへる娘ばかりなりければ、これに一人の腰元を添へて、任地に伴ひける。この人職を治むること極めて淸正にして、縣中の事、殘るくまなく處理し、訟を聞き、決を明かにし、寃を雪ぎ、滯れるを理めしかば、いく程もなく、政簡にして刑淸く、民安んじ、盜息みける。日ごとの任務を終りて家に還りし後は、一人娘の月香を膝の上にかき載せ、文字を敎へ、又腰元を呼びて、ともに圍碁・雙六さては蹴鞠など、品よき遊をなさしめ、心を用ふること、大方ならず、蝶よ花よと、いつくしみける。ある日、腰元は、月香を誘ひ、庭上にて鞠を蹴つて遊びけるが、如何なる機にやありけむ、かの腰元の脚先にて蹴り上げし鞠、勢强かりしと見えて、地に落ち來りし後、いくたびか轉げて、二三尺の深さある穴の中に落ち入りぬ。そも此穴は、もと水を貯へむが爲に掘り下ろせしなるが、腰元の手短くして屆かず、詮方なければ、穴の中に飛び入りて、拾ひ取らむとしけるを、石璧は月香に向ひ、汝かの鞠をして自然に上がり來ら

しむる工夫はなきかといひしに、月香しばし思に沈みしが、やがて、腰元に命じて、一桶の水を持ち來れよといひ、これを穴の内に傾け盡しければ、かの鞠は水面に浮びつ、再び一桶の水を加ふれば、地面に浮び上りける。こは石璧が娘の才慧を試みむが爲にせしなるが、その水を呼びて鞠を取り出して見て、智意人にすぐれしこと、喜に堪へざりしとなむ。あだしごと、扨て置き、かの官人、任に上りて、未だ二年ならず、如何なる星の廻り合はせにやありけむ、思ひがけぬ禍に罹りしぞ、世にもうたてき事なりける。ある夜のことゝか、倉中火を失し、急に救ふ暇もあらせず、官穀千餘石を燒き失ひぬ。その頃、兵亂の世なれば、米の價、頗る貴く、一石は一貫五百といひ、まして割據の折から、軍糧最も重しとて、南唐の法度、官府にて軍糧を失ひしもの、三百石を過ぐれば、斬罪に處せらるゝことなりしが、石璧はもとより清官の聞こえ高かりし上に、火災は天數にして本官の所業にも非ず、宜しく罪を輕くせらるべしとて、上官の輩、連署して上奏したれども、唐王の怒、なか〳〵に止まむ由なく、やがて本官の職を削り、その上、穀價千五百兩を贖へと申し渡されければ、やむなく、家財を變賣したれど、得しところは其半にも及ばず、兎角する中、石璧は官府の追逼に堪へかね、欝々として暮らしけるが、不圖重き病にかゝり、數日ならずして、身まかりける。殘るは娘と腰元とのみなるを、これも、牙婆の手に渡り、身を賣りし金を以て、官に贖ふことゝはなれりける。正に是れ、

屋漏更遭連夜雨、　船遲又打遇頭風

こゝに又、同じ縣の中に賈昌といへる農夫ありけるが、先の年腹惡しき人々の爲に陷られ、あはや死罪に處せられむとしける折、かの石知縣、任に到りければ、その無罪なるを明かにし、赦して放ち還しぬ。賈昌は、再び天日の明を見るを得し恩を感じ、折もあらば、必ず其德に報ゐむと心がけ居たりしが、商賈に暇なき身の、日ごろ遠き方に在りければ、取り分けて爲すこともなくて打ち過ぎて居たりしに、二たび、偶ま還り來

りて聞けば、石知縣、思ひもかけぬ災禍の爲に身まかりぬるよし、其驚きいはむ方なく、直に馳せ行き、其屍を撫して慟哭し、やがて、衣裳棺木をとゝのへ、之を葬り、全家その喪に服し、また新に地を買うて、耻かしからぬ塚をさへ築きたりしに、なほ心に飽かずや思ひけむ、贖ひ得ざりし官糧の價何程なるかを問ひ正して、悉く贖ひ終りつ。知縣の忘れ形見の姫腰元ともに牙婆の手に渡りしを聞きければ、あはたゞしく、銀子を懐にして、牙婆の家に至り、身の代を尋ぬれば、李牙婆は官府の檢印すわりし帳簿を取り出し、腰元は十六歳にて三十兩、月香は十歳にて五十兩なるよし告げたりける。そは何故といふに、月香は、年なほ幼けれども、標致ことに勝ぐれたるに引きかへて、腰元は、世の常の婢女なりければ、かばかり身代の差ありとぞ聞こえし。賈昌は、いさゝかも財を惜む色なく、銀子を取り出でゝ、合せて八十兩を牙婆に渡しゝ外、謝禮として五兩を與へ、二人を引き連れて其家に還りければ、李牙婆は受取りし錢財を官府に納め、石知縣が家財人口變賣の事は、全く落着したりける、こゝに、月香は、父親に別れしより、一刻も啼哭せざることなく、今日また賈昌の爲に購はれしも、元と如何なる筋の人なるかを知らず、賤しき家に迎へ取られ、一しほの苦を受くることもやあらむと、年若き女の狹き胸におもひ煩ひ、路すがら泣きつゞけけるが、腰元は、竊かに諫めて、姫君こたびは他人の家に赴くなれば、その昔、殿の御傍に在りしとは、事かはりて、かばかり泣きて居玉はむには、なか〳〵にむごき目に遇はせ玉はむといひければ、月香げにもとて、心の中に、愈よ嘆き悲みけるが、おもひきや、こは全く賈昌が一片仁義の心に出でしものならむとは。かくて、賈昌は、二人を連れて家に歸り、其妻に向つて言ひけるやう、こは恩人石相公の御娘にして、外の一人はその腰元なり。その昔、かの恩人おはさゞりけむには、この身、やがて縲絏の中に死すべかりしを、されば、今日この姫を見ること、恩人の面を見るが如くにし、物しづかなる一間をしつらひ、その中に籠り居させ、食事のもうけ、ゆめ〳〵怠ることなかれ、他日もし御親戚の人にても尋ねさせ玉はむには、即坐に送り還し申すべし、こは我が一點報恩の心にこそ、もし然らざる時には、人と

なり玉ひし後、本縣に於て、門地然るべく、似つかはしき家の人を選びて嫁入せさせ申すべく、かくすれば、恩人の御墓も、幸に無緣とならで、幾久しく香花を手向けられておはすべし。かの腰元とても、本の如くに姫君にかしづき、とも〳〵に女の學ぶべき程の諸藝を習はせ申すべく、決して、我が家の事に御心かけさせ申すまじきなりと言ひけるを、月香生れつき、すぐれて怜悧なりければ、これを聞くや否や、夫婦の者に、初めての禮をなし、妾が身は賣られて、かく成り果てしなれば、奴婢となるこそ、理の當然なれ。さるを、情ある人の爲に救はれて、再生の恩を荷ふは、思ひもかけぬ事なるを、あはれ、願はくは、妾が拜を受けて、養女とも見做させ玉へかしとて、地に跪きければ、かの賈昌、あはたゞしく又跪き、妻なるをして、姫を扶け起さしめていふやう、小人は亡き殿配下の名もなき民にして、蟲けらよりも劣りし此身、本はといへば殿の賜ひしものなり。されば、この腰元だに、おさ〳〵、おろかには思はぬを、まして、姫の御身に對し、いかて、かばかり尊大に命がの程を忘れ申すべき、たゞしばしが間、客分になりしとおぼして、よろづに、物足らぬを責めさせ玉はずば、小人夫婦の幸にこそ候へ

と申しければ、月香は再三その辱なきを謝しつ。やがて、賈昌は家中の男女に申し付け、姫を石小姐と呼ばしめ、かの小姐は、賈昌夫妻を賈公賈婆と呼びて、なづき親みける。こゝに、賈昌は、かばかり忠實の者なるが、其妻は性賢慧からず、その初、月香の來れりしとき、花はづかしき顏ばせの美しく品高きを見、一人も子持たぬ身の、いかで之を養女にしてしがなと、心ひそかに喜び居たりけるが、客分として養ふことに定まりし後は、なか〳〵に煩はしく覺えけれども、石知縣の恩に報ゆる爲とおもへば、今さら詮方なく、厭々ながら、夫の命を奉せしなりける。その後、賈昌は常に外に在りて商をなしけるが、善き絹紬の類を、便あるにつけて、送り越し、石小姐の安否を問ひければ、かの妻は不平に堪へず、いつとはなしに、馬脚を露はし來りしこそ是非なけれ。それも、賈昌が家に在りける程は、朝夕の設けも、おろそかにせず、追從口たら〳〵と言ひ廻はせども、賈昌居らずなりぬれば、三度の食事に備ふもの、茶も茶ならず、飯も飯ならず、打つて變りし待遇ぶりなるが上に、常に腰元をも使ひまはし、しばしの暇だにあらせず、又石小姐には日ごと必ず成し果つべき程の裁縫を割り當てゝ、少しにても後

るゝときは、口ぎたなくも罵り散らしける。正に是れ人無千日好、花無百日紅、（未完）



湘南の春

竹貫直人

濱

湘南の勝地、片瀬に居て不用のものは高足駄であらう、一帶の砂地であるから、歯の低い下駄で更に差支を見ない、世が奢つて來て、誰やらの蒔繪の駒下駄は一分が何圓につくと詮議したものがあつたが、さういふ下駄はこの片瀬の濱で穿くが第一、恐らく鼻緒が痛むまで臺の減ることはあるまい。

江島の濱ではかじめを燒く烟が夥だしく登る、晴天だと棒の如く眞直に立つが、曇天で空氣の濃密の日は横になぐれる、濱邊一躰の霞となつて、その中に島の影が明滅する有樣は、南畫によく見る煙雨の圖の活きたものだ。

海

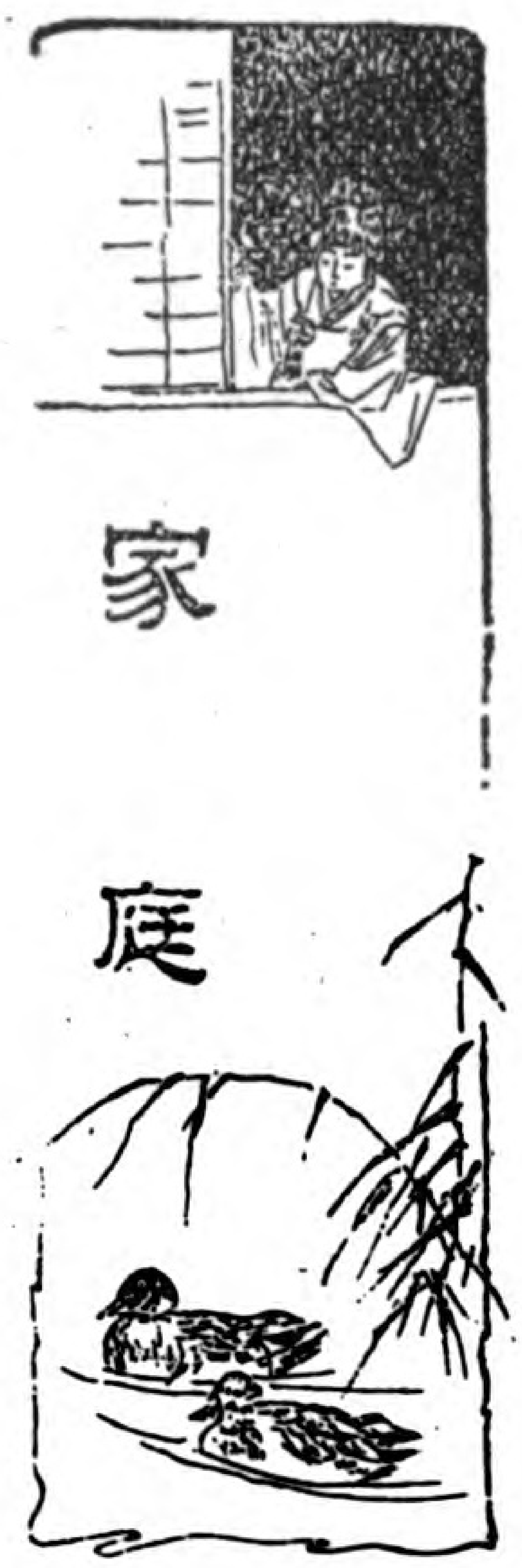
蘆の生へた中には吉原雀といふのが、喧ましく啼いて居る、夜になつても廢めない、

浪の音は夜になると克く聞える、僕は水の音が好きて、箱根木曾の旅寢にも、瀬音の淙々たるは、子守歌の代用になると喜ぶ方である、故に此處の浪の音も、熱海、伊豆山のそれに比して最も嬉しく感ずる、どうかすると雷の樣な音が時々交ざることがある、土地の人に聞くと海が鳴るのだといふ。

山

湘南の地は富士を見るには最も好い、いや富士そのものが形狀が好いので、松に配合しても、海に配合しても、沼にしても、川にしても、梅にしても、櫻にしても、およそこの山位何に配合しても其美を損ぜぬものはない、

片瀬、鵠沼、辻堂、南郷、平塚、大磯、小田原、遠くは伊豆一躰の海の上に、或は雲を纒ひ、或は雲を冠り、あるときは赤裸々あるときは肩袒、げにながめよきはこの山である、既にこの山を見得ることのみで既にその地を美はしいと云つて差支へがない、ましてや更に幾多の美を加へる點があるに於ては、充分賞賛する價値がある！



婦人の正義

松井柏軒

今の世に殊に必要なるは紳士と淑女と也。然り眞正なる紳士と淑女と也。

紳士と淑女とは善き家庭を成し。善き家庭はまた新たなる紳士と淑女とを造る、故に國に善き家庭多きは幸ひ也。其の國必らずや榮へん。

而して今の世に何故に善き家庭少きか。何故に眞正なる紳士と淑女が少きか。是れ一般婦人の頭上に懸れる嚴格なる問題也。男子は其の品性野卑にして眞正の紳士らしからざるも。而して其の家庭の淸き紀律と溫かき和氣なきも。多くは。否。少くも其の一半は。正さしく婦人の責任に歸すべきものなれば也。

男子が待合に出入して醜業婦に巫戲。或は蓄妾し姦通するは何のためなりや。多くは婦人が正義に由りて之を諷諫し苦諫し規正せざるが故ならずや。此の場合に於て婦人若し死を以て男子を諫むる大決心あり。溫かなる愛と同情とを以て懇ろに男子の敗倫を諫めば人木石に非ず。如何ぞ感動し悛改せざらんや。多くの婦人は則ち然らず。漫りに嫉妬し怨嗟して不平を訴ふるに止まり。曾て決死の大覺悟なく。又春風の如き愛と同情と無し。甚だしきは則ち男子の爲すがまゝに任すを以て婦人の美德とし。男子に折花攀柳の資を供し或は其の醜業婦や妾に産ます所の子女を執て我が子と爲し。更に甚だしきは則ち妾と同棲して强ひて諧和するに至る。茲に於てか男子公然として醜行敗倫を恣に、し。一家の異腹の子女多くして自然に風波を起し。竟に家庭を破滅するに至る。今の世の紳士たるものゝ家庭には實に斯の如くするもの多し。

男子が黄金のために節を屈し。威武利祿のために義を曲げ。收賄し詐欺取財を爲すは何のためなりや。多くは婦人が正義に由りて之を諷止し苦諫し規正せざるが故ならずや。露骨にいへば。今の婦人は唯だ男子の財を得ると多きを貴びて。其の財の淸濁の如き毫も問

ふ所あらず。男子が燦爛たる珠玉の指輪。玳瑁の簪を與ふれば則ち目を細くして悦び。曾て之を買へる錢の穢れたるものならざるや。正しきものなるやを問ふ所なき也。此の場合に於て婦人若し男子の不正不義を諫むるに死を以てするの大精神を持し。一厘一分だも不正汚穢の財を入るを容れずんば。男子亦生れながらにして盜ならざる以上。如何そ感激し悛改せざらんや。

夫れ一家に私生兒あり。庶子あり。妾あり。雜然として混居し。而して其の主人屢々外に眠りて醜行を恣にし。而して其の生計多くは不正不義の財にして。此の不義の錢を以て驕奢浮華の生活を爲さば。一家の風紀なるもの那邊に在りや。此の間に在る子女をして果して如何の影響感化を享けしむべきや。曰く一家は正義なく道德なき獸類の巢窟と異ならざるのみ。曰く其の子女はまた第二の男子たり。第二の妾たるべき亂倫。財德。不正。不貞。幾んど羞惡廉耻なき男女と爲るを免かれざるのみ。嗚呼是れ豈忍ぶべけんや。

夫れ君に爭臣あれば其の國亡びずといへり。世に敗德不正の男子多く。而して醜怪不倫の家庭多きは其の一半實に婦人の責任也。婦人は其の心溫和にして春風の如く。男子及び一切に對して多くの同情を持つべきと論なしと雖も。多くも正義を維持するがためには。一身を犧牲とするも亦辭せざるの大精神あるを要す。是れ之を眞正なる淑女とは謂ふ也。此の淑女ありて始めて眞正に善き家庭を得らる。今の女子敎育に志あるもの、能く此の意義を解せざるべからず

儒敎的倫理の一節

岸上質軒

『忠臣は二君に仕へず、貞婦は二夫に見えずと』言ふことは、古來支那流の道德の、標準的理想語となつて居て日本の儒敎流行時代には、隨分やかましい問題になつて居り、中には此の原則を遵奉せんがために、非常の苦慘を嘗めた人々も少なくない。ところが本家本元の支那では、左程窮屈に解釋して居ないやうである。元來二君に仕へる抔といふ事は、日本の國躰では有り樣のない事で、思ひも寄らない事であるが、支那では春秋戰國以來、英雄の割據、豪傑の崛起といふ樣な事は少しも珍らしくない。ソコで德義を重んじない者は景氣の好さゝうな方に味方する。爲に紛亂も起れば、革命も出來る。加之一時に一國內に數君が並立して居

るために、二君にも、三四君にも仕へる事は容易で、蘇秦張儀か六國の相印を佩びて居たなどは、取も直さず六君に仕へた者である。二君に仕へずとは、之を戒しめた者であらう。二君に仕へずとは、ツマリ一時に二ヶ國以上の利害を計らぬといふので、其爲に利害の衝突も起れば、國家の存亡にも關するに至るからである。豊臣が亡びてから、其浪人が徳川氏に仕へると言ふのなら、少しも差支がない。寧ろ一家を養ふ上から仕へねばならぬ義務があると思ふ。

女子が二夫に見ゆると言ふのも、之と同一理であらう。露骨に言へば、有夫姦をするなと言ふのである。一時に二人の夫をもち、或は現在の夫を捨てゝ他に走るといふのは、如何にも倫理上、社會の秩序を保つ上から戒めねばならぬ。併し、夫に捨てられ、或は死別した時には、女子自身の品位を墜さぬ爲に、再縁する必要もあらうと思ふ。衣食に窮して墮落したり、養育院に送られたりするよりは、相應の男兒に嫁するが、自身の爲にも、社會の爲にも、得策ではないか。

但し今日戰死した人の寡婦は、再縁するが好いとか惡いとか言ふ議論があるが、之は全然別問題である。再嫁を欲する者を拒む理窟がないと同時に、再嫁を勸める理由も勿論ないので、是は猶或は學者の研究を要する問題であらう。但歷史的に發達して居る支那流倫理としては、夫を失つた婦人が再嫁するのは、少しも差支がないと言ふのである。

支那流倫理の標準、儒學の元祖といへば、孔子である。孔子を手本にすれば儒學的倫理は間違ないのである。その孔子が、我が子の伯魚か若くして歿した時、その婦を醮したとある。醮は即ち再嫁の事で、若後家となつた息子の娵を、更に外に嫁いらせたのであるが、古來の儒者も敢て之を非議した者はない。さうして『貞婦二夫に見えず』の格言も亦取消されて居ない處を見ると、略ぼ思ひ半ばに過ぐるであらう。

予は此語の質問を受ける毎に、右の通り答へて居るが今聊か感ずる所があつて、本誌讀者諸君の敎を乞ふ事とした。

和樂なる家庭

菅　綠　蔭

人の住む所之を家と云ひ、家の中、父母妻子兄弟姉妹共に語り、互に助けて、其間一點の隔意なきもの、之

を稱して和樂なる家庭と云ふ。

和樂なる家庭、嗚呼何ぞ其言の善きや、吾人は何は扨置き先づ此和樂なる家庭を得ざる可からず、何となれば和樂なる家庭は、實に是れ子女に取ては、第一の學校、父母に取ては、亦取りもなほさず人生無上の樂園なればなり。

眞の紳士は和樂なる家庭は亦眞の紳士を造る。故に吾人若し社會の花たる眞の紳士を得んと欲せば、先づ家庭の改善に就て大に注意する所なかる可からず。

學校教育固より大切なり、然れども現時の學校教育は重に智的教育に偏し、一方の德育、體育等に關しては遺憾ながら、尙甚だ不完全なりと云はざる可からず、否學校に於ける此不完全は、單に學校其物の不完全なるに由るに非ずして、寧ろ其大部分は家庭教育の不完全に歸せざる可からず。然り而して其所謂家庭教育なるものも、單に子女に向て讀書又は習字を敎ふるの謂に非ずして、寧ろ善良なる父母の言行、以て知らず識らずの間に、子女をして宜しく其の子女たるの道を得せしむるに在るのみ。

例へば父母たる者にして、若し日夜其家業に精勤ならんには、子女も亦自ら之が感化を受けて、學事に勉强す可く、父母たる者にして、若し其朝夕の起臥、三度の食事は勿論、其他一切萬事一定の規律に據て進退するあらんか、子女も亦自ら人生に規律の必要を知ると共に、自分も亦之を守らんとの心を起す可く、或は又父母たる者にして、若し親愛和樂、絶えて風波の其間に起るなからんには、子女も亦自ら友愛の眞味を解し世間に出づるも輕々しく人と相爭ふが如きことなき即ち是なり。

之に反して、不幸にも怠惰業を勉めず、言行一定の法度なきのみか、甚だしきは父母共に爭ひ、兄弟墻に鬩ぐが如き不良なる家庭に生長したりとせんか、恰も瓜の種には亦必ず瓜の成る外なきが如く、假令如何なる教育を施すも、之をして淑女紳士たらしむるは、殆ど不可能の事と斷念せざる可からず。

果して然らば現今及び將來に於ける、我國家庭の改善に任ずる人は、果して誰ぞ、吾人は今日教育を受けつゝある姉妹諸氏を措て、他に其人なきを信ずると共に諸氏に於ても亦能く此意を躰し、熱心勉强自ら婦德を涵養すると同時に、他年一日家庭の主婦として、大に力を此點に致されんこと希望の至りに堪へざるなり。

るために、二君にも、三四君にも仕へる事は容易で、蘇秦張儀か六國の相印を佩びて居たなどは、取も直さず六君に仕へた者である。二君に仕へずとは、之を戒しめた者であらう。二君に仕へずとは、ツマリ一時に二ケ國以上の利害を計らぬといふので、其爲に利害の衝突も起れば、國家の存亡にも關するに至るからである。豊臣が亡びてから、其浪人が徳川氏に仕へると言ふのなら、少しも差支がない。寧ろ一家を養ふ上から仕へねばならぬ義務があると思ふ。

女子が二夫に見ゆると言ふのも、之と同一理であらう。露骨に言へば、有夫姦をするなと言ふのである。一時に二人の夫をもち、或は現在の夫を捨てゝ他に走るといふのは、如何にも倫理上、社會の秩序を保つ上から戒めねばならぬ。併し、夫に捨てられ、或は死別した時には、女子自身の品位を墜さぬ爲に、再縁する必要もあらうと思ふ。衣食に窮して墮落したり、養育院に送られたりするよりは、相應の男兒に嫁するが、自身の爲にも、社會の爲にも、得策ではないか。

但し今日戰死した人の寡婦は、再縁するが好いとか惡いとか言ふ議論があるが、之は全然別問題である。再嫁を欲する者を拒む理窟がないと同時に、再嫁を勸める理由も勿論ないので、是は猶或は學者の研究を要する問題であらう。但歷史的に發達して居る支那流倫理としては、夫を失つた婦人が再嫁するのは、少しも差支がないと言ふのである。

支那流倫理の標準、儒學の元祖といへば、孔子である。孔子を手本にすれば儒學的倫理は間違ないのである。その孔子が、我が子の伯魚か若くして歿した時、その婦を醮したとある。醮は即ち再嫁の事で、若後家となつた息子の嫁を、更に外に嫁いらせたのであるが、古來の儒者も敢て之を非議した者はない。さうして『貞婦二夫に見えず』の格言も亦取消されて居ない處を見ると、略ぼ思ひ半ばに過ぐるであらう。

予は此語の質問を受ける毎に、右の通り答へて居るが今聊か感ずる所があつて、本誌讀者諸君の敎を乞ふ事とした。

和樂なる家庭

菅　綠　蔭

人の住む所之を家と云ひ、家の中、父母妻子兄弟姉妹共に語り、互に助けて、其間一點の隔意なきもの、之

を稱して和樂なる定庭と云ふ。和樂なる家庭、嗚呼何ぞ其言の善きや、吾人は何は扨置き先づ此和樂なる家庭を得ざる可からず、何となれば和樂なる家庭は、實に是れ子女に取ては、第一の學校、父母に取ては、亦取りもなほさず人生無上の樂園なればなり。

眞の紳士は和樂なる家庭を造り、和樂なる家庭は亦眞の紳士を造る。故に吾人若し社會の花たる眞の紳士を得んと欲せば、先づ家庭の改善に就て大に注意する所なかる可からず。

學校教育固より大切なり、然れども現時の學校教育は重に智的教育に偏し、一方の德育、體育等に關しては遺憾ながら、尚甚だ不完全なりと云はざる可からず、否學校に於ける此不完全は、單に學校其物の不完全なるに由るに非ずして、寧ろ其大部分は家庭教育の不完全に歸せざる可からず。然り而して其所謂家庭教育なるものも、單に子女に向て讀書又は習字を敎ふるの謂に非ずして、寧ろ善良なる父母の言行、以て知らず識らずの間に、子女をして宜しく其の子女たるの道を得せしむるに在るのみ。

例へば父母たる者にして、若し日夜其家業に精勤ならんには、子女も亦自ら之が感化を受けて、學事に勉强す可く、父母たる者にして、若し其朝夕の起臥、三度の食事は勿論、其他一切萬事一定の規律に據て進退するあらんか、子女も亦自ら人生に規律の必要を知ると共に、自分も亦之を守らんとの心を起す可く、或は又父母たる者にして、若し親愛和樂、絕えて風波の其間に起るなからんには、子女も亦自ら友愛の眞味を解し世間に出づるも輕々しく人と相爭ふが如きことなき即ち是なり。

之に反して、不幸にも怠惰業を勉めず、言行、一定の法度なきのみか、甚だしきは父母共に爭ひ、兄弟墻に鬩ぐが如き不良なる家庭に生長したりとせんか、恰も瓜の種には亦必ず瓜の成る外なきが如く、假令如何なる教育を施すも、之をして淑女紳士たらしむるは、殆ど不可能の事と斷念せざる可からず。

果して然らば現今及び將來に於ける、我國家庭の改善に任ずる人は、果して誰ぞ、吾人は今日教育を受けつゝある姉妹諸氏を措て、他に其人なきを信ずると共に諸氏に於ても亦能く此意を躰し、熱心勉强自ら婦德を涵養すると同時に、他年一日家庭の主婦として、大に力を此點に致されんこと希望の至りに堪へざるなり。



女流短評

棚橋絢子

棚橋絢子は今の女教育家中最も名聲高き人也、女史の名聲抑も何に依つて斯の如くなるを得たる?、想ふに女史が有せる思想學識よりすれば、固より當今洋行歸りの、新智識新思想家に比して、稍や古風の所はあるべし、然乍ら子弟に對する品性陶冶家として、實踐躬行自ら疚しきを知らざる人は、現代女流教育家多しと雖も、恐らくは女史の右に立つて、誇り得る者なからん、女史が教育家として斯の如き名聲を得たるもの、一に其資性の淸く美はしき光の反映に外ならざる也、女史の生涯は奮鬪の歷史也、堅忍の織物也、其若き時代に於て、盲目の學者棚橋松村に嫁して克く夫に冊き、豐ならざる家政を治むるの間、猶愛兒をして學業を終らしめ、後東都に出でゝ教界の人となり、實踐躬行を唯一の主義として、老躰今猶倦まざる精神行爲に至つては、實に子弟鞠育者の摸範として永く後世に傳ふ可き人たる也。

跡見花蹊

花蹊盡る無し生花の筆、歸後何ぞ堪ん才忱に惱むをとは、其の昔、韓國の使節金綺秀が一日女史と相見へて其才能の凡ならざるに感嘆した語である、女史は性來書が上手で畫が巧みである、女史生涯の前半は、寧ろ教育家としてよりは、書畫家として名聲を博して居つた、けれども女史が堪能の書や畫は、共に女史の本領ではないのである、女史の期する所は多くの淑女を養成して、他日の良妻賢母たらしめんが爲めにある、彼の跡見女學校は其理想の一端を實現しやうと試みたので、女史の生命は乃ち此學校である、女史が教育界の重鎭たること、必ずしも偶然ではないのである。

奥村五百子

十年一日の如く、今日は東明日は西と、正義の爲め、人道の爲めに、涙を揮ひ聲を嗄らし、六十餘歲の老軀を物ともせずに、遊說又遊說、殆んど席の暖まる暇もなき女史は、如何に壯の人なるよ、女史滿身の細胞は渾て是れ愛國、女史は誠に武士的性格を有せる婦人也、

婦女子の風氣甚しく頽廢したるの今日、女史の如きの士亦一人も無くては、畢竟日本國の不幸たるべし、健在なれかし老女傑!

下田歌子

今日本に於て最も適當に政治家的手腕を有せるものは、恐らくは下田歌子女史其人なるべし、女史は歌を作り、文章に巧に、演説は其特得の長技にして、一度び演壇に立てば、滔々暢々恰も立板に水を流すが如く、聽く者をして感嘆恍然たらしむるの妙手腕を有す、而して其天稟の才能は、至る所發揮せられ、洵に當代得難きの才媛たり、女史が曩に英國より歸り來るや、實驗修得せる英國敎育法を以て世に臨み、東洋的女性の陋慣を破るに勉め、天下をして其風貌を想望せしめたりき、女史いまや擧げられて、華族女學校學監となり、往年の活潑なる政治家的手腕を餘り振はずと雖も、機至るあれば、將に起つて何事をか試みんとするものゝ如し、知らず女史の胸懷抑も今何をか藏せる、聞まほしきことにこそ。

鳩山夫人

鳩山春子の君は、信州舊松本の藩士渡邊某の末女で、今は鳩山和夫氏の夫人として、誰れ知らぬ者はない、夫人が夫たる和夫氏の選擧に際して、自ら俥を驅つて有權者を訪ひ、紅唇滔々夫を選擧せんとを薦むるのを見て、兎角の評をなす人があるが、其等の人は夫人の性質を知らず、又た眞實夫に對する愛情の、いかに切實なるものであるかを知らぬ人々である、夫人は家庭敎育を以て最上の快樂となし、夫に盡すの任務としては、如何なる困苦をも厭はぬてふ、崇高な優美な心を以て居らるゝのである、夫人は實に文明的婦人の典型ではあるまいか。

安井哲子

女史は今千里を隔てし、暹羅國の宮廷に敎鞭を執らるゝ也、我國の婦人にして、遠く海外に出でゝ敎鞭を執らるゝ者、唯だ曩に蒙古の荒域に赴かれし、河原操子と女史との二人のみ、斯くの如き勇氣ある――天職を重んじて敢て難易を顧みざる女史は、眞個の敎育家とや申すべき、あゝ女史も亦人傑なるかな。





塩井雨江先生選

天

さゝ舟

千葉縣我孫子町　中村由

はかなき身を、さゝ舟にのせて、蘆間をめぐる、十六とせ。その間、あるときは、風あらくして、波いたくさわぎ、如何はせんと思ひ忍びて、波間にあやしき雫をおとししこともありし。あるときは、水かわき、舟とゞまりて、暫しの間、つめたき風に泣きしこともありし。今年この春、蕾の花の旭の光りをうけて咲かんとする里の、若草もえ出でしところまで漕ぎ來たりつ、舟は破れ、身はつかれぬ。あはれ、この美しき里にうつりて、永く住まはんか。されど、悲しや〳〵、波はます〳〵はげしうなりまさりつ。舟をすてゝうつらんとして、うつる能はず、あゝいかにせん、舟は冲へと出でつ。あゝ波よ波よ、暫し起るな、われかの里にうつらん程。あゝ風よ風よ。汝も暫し吹くをやめよ。汝吹かずば、波も起るまじ。

われはちりの世の子なり、はかなき身なり。風の神よ、波の神よ、このさゝ舟にあるわれをたすけしめよ、あな。

風はやまじ、波もやまじ、あゝむしろ、舟をすてゝ身を波間に投げんか。されど、行く末を思へば、命をすつるは口惜しや。

とやかくの思ひ胸にわく中、一つのみ舟さかのぼり來たりぬ。われ舟とめて、この水の流れゆく末をとひけるに、かれいへるやう「ほど行けば、水の中に一つの林あり。その右を行けば、紅の梅花今を盛りと咲き匂ひ出でゝ、心もすが〳〵しく、げに身はちりの世をのがれて、天の國へ來りたる心地す。その左を行けば、日の光りも見ることを得ざる暗き谷間に入り、そこを出づれば、瀧となりて、十丈も下へ落ちざるべからず。心してゆきたまへや」と。

暫しを經て、林に近づきぬ。見やれば、水は左へ多

く流れゆくやうなり。花片も、乙女のはなし若菜も、わが舟も、遂に左へと打ちながれ行く。

あゝ人の命の五十年。われは、十六年のちりの世の子、かのくらき谷間を出でゝ、瀧となるところに行けば、この命、花の三日のその命、波間の露とやなりぬべき。

あはれ、この世を。（完）

（雨評）趣向に新しきところあり。おぼろなる筆に一種の詩趣あり。

地

野あそび

長野市田町二九　飯塚ぎを子

底の小石も讀まるゝほどに澄みきつた、淸らかなるいさゝ小川、ちよろちよろと流るゝ水の音、珠でも轉す樣な、また天女の囁きの樣な、ゆかしい其音、丁度牧場の夕暮に響き渡る小羊の首についてる鈴の音のそれのやうに、節面白い一つの音樂を奏しつゝ流れてゆくのである。其の汀には、むすびては解け、とけてはむすぶ、色もみどりの佐保姫の髮が吹き來る長閑な春風に、なよなよと搖いで、吹いてくる風につれて、水面には、金波銀波の漣の花を書いてゐる、ものゝ一尺もないほどの危げな橋が、岸に架けられてあつて、渡ると、みわたすかぎりのない野原、菫よ蒲英公よと、色々の春の草花が、綠の若草にうちまじつて、咲きみだれてゐる姿を、ほがらかな日の光をうけて、色をきそうてゐるかと思



へば、水の傍には、土筆も萌え出てゝ、わらびの人まちがほに手まねぎしてゐる其風情、我々の拙ない筆には、なかなかに記すことができないのである。其の緑の草に包まれて、さきの小川が、黄金の帶のやうになつて、野中を繞つて流れてゐる。「なんと美しい景よ」と、我れしらず叫んで、やはらかな草のしとねに座してしばらく空をみつめてゐると、不圖雲間で、淸らかなひばりの聲を耳にした。其のこゑは、まるで天の女神のかなづる小琴のひゞきではあるまいかと思はるゝやう。ぼかぼかとなま暖かい風に送られて、樣々の小鳥のさえづるのがきこえて、もう自分はちりの浮世をぬけいてゝ、天上の花園にでもきた樣な心地。不知不識瞑目してあつたが、やがてあたりをみると、何處から飛んで來たのか、黃色の蝶々が、翩翻としてとび廻つてゐたが、遙かむかうの方に、二三の群れとなりて摘草をしてゐる小兒の花籠の柄にとまつた。すると、年の頃は十一二の、如何にも腕白らしい小兒が、どこてみとめたか、やにはにはせきたと思ふまに、はいてゐた下駄を、そうつとぬぎすてゝ、そくそくと近寄る、其の腰付が如何にも可笑しくつて、吹きだしさうてあつた。此處と狙い定めつと、手をさしのばした、其の刹那、蝶々は羽を揚げてとび去つた。「ヤッ」といふやいなや、逃げた蝶々を、彼方へ走り、此方に馳せて、追ふに餘念ない、實に無邪氣に見ゆるものである。足のむく方、どことなく歩むで、そうこうするうちに、日は西に沒んで、黃昏を告ぐる鐘の音が、遠くかすかに響いて、夕やけの雲はオレンヂ色をして、大な白い雲は北の方へのびて、段々紫色に輝きはじめた、丁度大空を、あらゆる麗しい繪具で彩色どられたやう、自然の美妙さは、心ゆくばかりである。恍惚として麗しく移り行く空を眺めてゐると、時にかへる群鳥の、空をかすめて、後になり先になつて飛てゆく、恰も一幅の畫の樣で、あまり景色のよいのに、暫しみとれてゐたが、聽て此の美しい平和な夕景につゝまれて、足を我が家の方へはこんだ。

(雨評) 雖未だしきところはあれど、多小の詩趣あり。

人

春ぐさ

遠江笠井　大石よし子

鶯なきぬ。
のどかなる春日晴れわたりて、風もあたゝかく吹き。
庭の紅梅、白梅、時をえ顔に今が花ざかり。
詩にも歌にも、水茎のあとおもしろからむ。
さてもてよなう、うれしきは朝の梅、月の梅。

○

曲。一曲、またおもしろき。ヴワイオリンの音、妹うたひ、吾かたり、共に打ち笑ふ築山の亭。ながむれば、あはれ、はづかしや、春の月。空はおぼろなり。遠くにかすむは花の山か。

○

藪下を流るゝ春の水、土手をかざれる春の花。色香うつろひて、共にうつくしや。
浮び來るは木の一葉舟。黄の蝴蝶はそれに眠むれり。舟は橋下に至りぬ。
水が無情か、蝴蝶のさだめか、あはれ、荒き瀬浪に、舟蝴蝶もろともに沈み果てぬ。
思へかし、人の浮世もさならむに。

(両評) 筆づかひに、一種の詩韻のきこゆるものあり。

秀逸

○鶯を放つ

紀伊東牟婁郡新宮町 みどり女

淡く暖かき餘光を、咲き衰へし庭の櫻の花片に投げかけて、春の夕日は、今し虞淵に沈まんとすなり。
讀みも了へぬ詩の卷々を打ちすてゝ、廂破れし書齋の窓に身をよせつ、日頃めで飼ひにし鶯を放たむとすれば、流石に別れ惜みてか、愛らしき双の翅を震はせて、籠のしきみに、しほらしう止るよ。
あはれ、鶯、汝が優しの姿よ、妙なる其の音よ。あゝ汝は自然の御園に、神の祕曲を調べては、世に棄てられし憂の子等を慰めむの御使かも。
さるを、幸なるも、情知らぬえせ歌戸自の手に捕はれて、埴生の宿よ荒れにし窓の朝夕を、はかなき運命に過ごしけむ其の恨み、あゝ蕭さざらまし。
されど、汝がやさしの聲は、愛らしの姿は、魔の神の征矢深う傷手に惱む吾が友の小さき御胸に、限りなき慰籍を與へてき。
あゝ、そは、さながら今日に似し夕暮なりしよ。彼の

君が臨終の枕邊、汝が音に姿に、神園の樂をみ悟りて、御神の賜ふ送夫の曲ぞと讃へ給ひしは。

＊　＊　＊　＊　＊

愛で培ひにし櫻の花瓣は、夜毎の雨に色褪せて、せまき庭の春のいよゝ淋しうなりまさりつ、吾が慕はしき友の君は、永久に歸らぬ黄泉の客となり終り給ひぬ。かくて、汝が音のやう／＼老いゆくまゝに、吾が小さき詩の袋は、空しくなり果てぬ。あはれ、鶯、われは、限りなき悲哀の情に胸迫りて、送りの歌の詠みも得ぬなり。あな、吾に遺す別れの曲とや、さても、其の音の低う曇りたることよ。

さらば、鶯、樂み少なきわが庭の窓を飛び行きて、神の御園の花薫るあたりに、汝が餘生を送れや。

かくて、また來ん春は、悲しの運命を生れ替りて、やんごとなき姬君が花の臺に、御歌の友とさもらひつ、極みなきその樂みを歌へかし。

せきあへぬ涙とゞめて、窓を閉ぢんとすれば、翠も鈍う、咲き殘る櫻の枝を飛びかひて、なほも名殘惜しげに遺す其音のかなしきことよ、さらばよ、鶯、行けや……疾く……。身動きもせで見つむれば、いたはしや、またも花片吹き散らして、亂れし髮を掠め行く夕風一陣、いみじう身に染み渡りぬ。

（評）文は整ひたり。されど、さして情の動かざるものあるを惜しむ

○雪の朝の感

岩代國伊達郡小島村　菅野和子

夜は明けぬれど、早かりし雀も啼かで、唯靜けき朝ぼらけにもあるかなと思ひつゝ、柴戸押開けば、思ひきや、窓に立ち塞かれる竹叢も、綿の容なる白雪に埋れて、心に障る物もなく一郷、一眸の裡に見渡さる。いぶせき萱葺は、白銀の臺とかはり、塵に穢れし路も、練絹を敷きたらむやう、向ひの山は、楢も椚も玉の幹玉の枝と飾り、枯れたりし野原の草も、うつくしき花と咲き亂れて、暫し寤覺の眼を喜ばしめたりき。まして、庭の松が樹は、白綸子の衣裳かずぎ給ひし天女が、賓の山あさらむ風情に見ゆるなど、其の景色言はん方なく、俗境の我れとも覺えず、氣も心も空になりてぞ佇みぬる。いでや、友垣の君にも頒ちて眺め歌はむには、いかに日頃の憂さも晴れやらんと喜び文認めぬ。折しも、彼處に驅けまはる犬の、雪を蹴立てゝ進む態は、敵の行爲探る一騎武者の如く、うたゝ、思ひは遼東の野に走りて、勇まし。

隣の「正雄チャン」のほゝ笑みて立てるは、晝時の雪軍を想ひつゝくるにかあらん。弟の君、雪つり遊べば、文子さんは、やさしき聲はりあげて、鶏に餌與ふ、いと〳〵睦まし。内には酒や温むらん、立ち昇る烟り豊かなり。

アヽ、いたましや、蓑笠脚絆の大男、泥れたる足跡印して通り行きぬ。とばかりありて、また一人、荷車曳きつゝ、あはれの節、高らかに唄ひ行くは、衣食にいそがはしきなるべし。身に襤褸纏ふ乞食や、いづこに昨夜を明しつらむ、またきより人の門邊に彳みて物乞ふあはれさ。かゝる眼には、いかに今朝の雪を恨みつらんよ、

とかくする間に、朝暾は東の山の端に昇りて、彩光まばゆく下れば、あはや白銀の乾坤、花はちり玉は砕けて、きのふに替はる所も見えずなりぬ。アヽ、春の淡雪、アヽ、うつし世のさま。



（評）難ずべきかどもなけれど、取り立てゝ稱すべきふしもなし。

○雪の朝

近江國彦根町　宇多花子

あさまだきより降り初めし雪は、野となく山となく、一面に積りて、をちの木も、こちの家も、彼方の岳も此方の森も、さてはいぶせき賤が伏屋まで、皆白妙の布もて蔽はれ、いまはしき塵の世も、夢のまに、白銀の世界、花の天國と變り、汚れし人の世も、まばゆき龍宮の玉居、銀の高殿と化りぬ。

庭のながめも、ゆかしくかはりて、苔むす燈籠も、けふに限りて白く、白かりし壁も、灰色に見ゆるも面白

し。枯木に時ならぬ花さき、常盤木の化粧せる、こよなう趣あり。青松針のま綿もてつゝまれ、池の水面のねむれるが如き、いと妙なり。竹の雪をれもせてたわめるに、雀のつどひ來りて、さわがしく、折々雪など落すも、物うし。小犬のよろこびまはるに、美はしき雪かきちらすは、日頃の愛にも似て、にくらしく、弟の日の丸のはた、かざして犬を追ひ行く跡に、二の字と落梅のゑがゝるも興あり。築山の杭に雪の圓く積れる、あるは、水に臨みし石の冠着たるこそよけれ。隣りの家の南天、いと高く生ひ立ちて、つらなれる實のいと赤き、一きは目に立つに、目白となんよべる小鳥の、隣りの下女の水汲む音におどろかされて、こちの庭の木にとまるもうれし。

あゝ、さても、此の美はしき野山の景色を、戸やぶれ、壁落ちて、見るかげなき荒破ら屋に、薪木くすべつ、米か綿かさては砂糖のかくまで降りしならんにはと、親子寂しく物がたるもあらん。あるは、雲つく高殿に、琴三味線ひきならし、あやしき女どもよびて、酒よ、肴よと立ちさわぎ、え知らぬ歌ども狂ひ歌ふ人もあるらん。げに降りし雪は、賤きも尊きも、とめるも、まづしきも、おしなべて平等なるに、不公平なるは人の世や。

さるにても、風凄き滿洲の野、雪深き遼東の原に劍とる益良猛夫の困苦やいかに、……あゝ……。

折りしも、えならぬ薰の、風に送られて、鼻をつきければ、ふと庭の面をみあぐれば、早や、寒梅の一輪二輪さき初めて、梢に微笑せり、それや勇士の心情をかたるがごと……。

不意にドンと一發砲聲の震ひし彼方、烏さわぎて、茅屋より立ち昇る炊煙細く、征露の軍歌高くきこえたり。今しも怪雲はやゝに晴れて、やさしき日の神は、東の山の端より笑ふが如く出でたまひ、美き惠の金線、尊き光を放ちたまひつ。

世は依然銀世界、神の世、花の國にて、塵の世、罪の世のさまは、夢あらざりき

うれしや妾が心も、自らいと淸くすみて。

（評）言ひまはし方に、變化の妙を欠くを惜しむ。

○花かご

長野市田町二九　飯塚ぎを子

はなかごのうちにある春の花の姿のうるはしさ、艶なるあるべし、淸なるあるべし、種々とりまぜて錦をか

ざるおもしろさ。我がなつかしきこのふみぞのにも、これなくてや。

まちこがれたるいちのまきも、あたらしき年のはつひに、はなやかなるうぶこゑあげて、うまれいでぬ。このまき手にしたる妾のこゝろは、いつしかたのしきふみぞのにさまよひいでぬ。

さきそろふ文の花の色香のうるはしく、げにたのもしきふみぞのなるよ。妾はゆくすゑながく、この文園に蝶と化して、えんなる花にやどりて、まどかなる夢をむすばゞや。

とりのねいろはなけれど、わけゆくまゝに、心ものどかに、身はいつしか、たのしきそのにいたりつ、とこしへに色香うせぬこのふみぞのゝぞたのもしき。つたなきふみの花籠たづさへて、咲きにほふふみぞのゝやちぐさをつみてやあそばむ。

（評）趣向はおもしろけれど、言ひまはしかれたるを惜しむ。

○春の野べ

埼玉縣浦和の里　關　香毅子

一

タイムは流れに流れて、既に春色めぐり、空いとうららかに晴れたる今日の日曜、遊心勃々禁ずる能はず。浮ける心の駒に、一鞭加はへて、風清き田島の原！櫻草の名所！へ向ひぬ。親しき友垣二人とともに……。

二

若草萌え出てたる道のべの農家、そが垣のあたりには、勇める駒をひき出したるわらんべ。涓々たる前の流れにて鎌研げる父。

菜の花一里咲きつゞく處、桃の花片のチラリ／＼と散りこむ窓に、梭打つ乙女。日當りよき南(みんなみ)の庭の葉の上に、糸車くる老婆、尺餘にのびたる傍の麥畑に、餌をあさる鶏數羽、炎陽(かげろう)上る畑に天に歌ふ雲雀と、己れが唄とを競ひつゝ、鍬振ふ田子など。

進むにつれて、千變萬化する田舎の景をば、眺めつゝ、われらは歩を運びぬ。げに田園生活ほど天眞のゆかしく見ゆるものはあらじよ。

三

ゆる／＼吹く風に髮くしけづらるゝ、青柳並ぶ里川の土橋を渡りて、青紫の草花數町に咲きみち、處々緑草の點綴したる、譬へば、模様衣裳の如き原につきぬ。是や名にし負ふ田島の原なる。洋服の人、袴の女、歩

む人、馳する子、あちらこちら逍遙ふ人なと、げに一大パノラマにも似たらんかし。われらも、あちらこちらと、遊び歩きぬ。

四

菅の根の長き春の月も、早やわれらが影坊子をば、長く尺餘となす比になりぬ。落日にはえて櫻色帶びたる雲は、北方步甲山の峯あたりより起りて、悠々南方に流れて、榴柘色と化しぬ。葡萄色なる雲は、彼方山の上に現はれて、南方に流れゆく雲を襲はんとす。

われは、悠大なる蒼穹を仰ぎて、自然の景をば、恍として眺め居たりしが、友にうながされて家路を急ぎぬ。天つ神が、射玉ふ金線銀線の矢をば脊にうけつゝ。

（評）才氣の多少見ゆれど、まだ筆のたど〳〵しきを惜しむ。

○琴の音

名古屋市西魚町淺野方　戸空せいう

長閑なる春の日、うらゝかな、そして、どんよりとした花曇り、

庭の木立は鬱蒼として、ソヨ吹く風に其綠葉を漂はして、そして其綠を競ふかのやう。

折々餌をあさる雀の一羽、二羽が。

それも、今は最う塒に、其疲れた翼を疊んで、そして恰度哀れなる人の子が、其愛兒を勞はるそれのやうに。

晃々と今迄金色に染め拔いて居た夕榮は、次第に灰色に變じ、そして、今はもう黑暗が四方を襲うて、恰度、黑幕を掩ふたかのやう。

無數の星は、黑暗々たるみ空に、煌々と瞬いて、晝の巷の渾沌として、燃える焰のやうであつたのを、平和なそして靜寂なる神の御手に托し、浮世の浪に漂ふ捨小舟の如き、哀れなる人の子を、樂しき、快き仙境に導くかのやうに輝いて。

肌寒き夜風は、戸のすき間をもれて、終日終夜床と親んで居る哀れの佳人……そはわが友なる……其やつれた面容に、亂れし後れ毛を、意味ありげに、拂ふのである。

……何思ひてか、不意に起ち上つて、其亂るゝ足下もおぼつかなげに、久しく手にだに觸れず、秘め置きし小琴を取りだして、臥床近かく引き寄せつ、天女の美しきみ手の、それの如き腕を伸べて、あはれに調べ出だしぬ。

……曲、一曲……幾月……想夫戀……。あゝいかに聽くものをそして、恍惚たらしめたでありませう、

いかに心耳を澄ましめたであろう……？。

絃を渡る指、そが指先は、恰度電光のそれの如、そして、朗々響き出る音色は、珠の盤上を走るとばかり：……。

其妙へなる調べには、かしこき神も舞ひ、風も梢を渡り、雁もみ空を行き、軒端を雨は過ぎ、岸にも波は、よせ來るのであらう。其いとも目でたき手ぶりには、ひそめる龍もをどるであろう。

其聲、其音、其響、眞に悲想に堪へぬ。

細く、高く、……幽かに、静かに……。

折柄庭の方に、戀猫の聲、……。

（評）才氣はほの見ゆれど、殊更に氣取りたる如き疵あるを惜しむ。殊に、結末の戀猫の聲の小細工、俗氣文趣を害したり。

○亡き妹

神戸市　神山園子

かつらのはな影、一朶の浮雲に蔽はれて、雁がね二聲三聲、大空に鳴き渡り、露しげき草叢にすだく蟲のこゑ〳〵實に哀れなり、さらぬだに、あたりさびしき秋の夜頃を、年頃最愛の妹を失ひて、いたく浮世のはかなさを感ぜる此の身には、たゞ云ひしらぬ悲みの、むらく〳〵と胸に起りて、われ知らず袖のうるほふぞ、是非なき。往日を追懐すれば、已に二年の昔とはなりぬ。一日、妹は假初めの病とて床に臥せり。初めはたゞ風邪なりしが、次第〳〵に病勢は重り行くばかり、臥褥幾十日、ゆたかなりし頬も、肉落色青ざめ、嬌姿またいづくにか見む、蒼白なる纎手、梳らざる黒髮、見るだにいたはしの風情かな。あはれ、死の神は早や、わがいとしき妹を、そが黒き翼もて、蔽はんとはせるなりき。

斯くて、蕭々の雨、軒をめぐるの夜半なりき。

妹は力なくも、靜かに眼を見開きて、枕邊にみとりせる一族の顔を眺めつゝ、今を名殘の死出の山、泣きわめくわれ〳〵を、後に見すてゝ、やがて不歸の客となれりける。

老少不定の世の中とは云ひながら、あたら蕾の姫櫻、夜半の嵐に散らされたる、天道果して、是か、非か。

咄、死の神、汝そも、何等の力ありて、斯くも人の運命をつかさどる。

嗚呼、悲しいかも、悼ましいかも、わが心の奥に深くもきざまれたる悲哀の痕、何物かよく之を拭ひさるものぞ。よし、拭ひさればとて、われは現世を永久に悲觀せざるべからざるかな。

淚をはろうて、空うち仰げば、月は雲間より出てゝ、雨の如き虫聲、一段の哀れをそへぬ。われはなほ、月に對して泣けり。



塩井雨江先生選

天

さゝ舟

千葉縣我孫子町　中村由

はかなき身を、さゝ舟にのせて、蘆間をめぐる、十六とせ。その間、あるときは、風あらくして、波いたくさわぎ、如何はせんと思ひ忍びて、波間にあやしき雫をおとしことありし。あるときは、水かわき、舟とゞまりて、暫しの間、つめたき風に泣きしこともありし。今年この春、蕾の花の旭の光りをうけて咲かんとする里の、若草もえ出でしところまで漕ぎ來たりつ、舟は破れ、身はつかれぬ。あはれ、この美しき里にうつりて、永く住まはんか。されど、悲しや〳〵、波はます〳〵はげしうなりまさりつ。舟をすてゝうつらんとして、うつる能はず、あゝいかにせん、舟は沖へと出でつ。あゝ波よ波よ、暫し起るな、われかの里にうつらん程。あゝ風よ風よ。汝も暫し吹くをやめよ。汝吹かずば、波も起るまじ。

　われはちりの世の子なり、はかなき身なり。風の神よ、波の神よ、このさゝ舟にあるわれをたすけしめよ、あな。

　風はやまじ、波もやまじ、あゝむしろ、舟をすてゝ身を波間に投げんか。されど、行く末を思へば、命をすつるは口惜しや。

　とやかくの思ひ胸にわく中、一つのみ舟さかのぼり來たりぬ。われ舟とめて、この水の流れゆく末をとひけるに、かれいへるやう「ほど行けば、水の中に一つの林あり。その右を行けば、紅の梅花今を盛りと咲き匂ひ出でゝ、心もすが〳〵しく、げに身はちりの世をのがれて、天の國へ來りたる心地す。その左を行けば、日の光りも見ることを得ざる暗き谷間に入り、そこを出づれば、瀧となりて、十丈も下へ落ちざるべからず。心してゆきたまへや」と。

　暫しを經て、林に近づきぬ。見やれば、水は左へ多

く流れゆくやうなり。花片も、乙女のはなし若菜も、わが舟も、遂に左へと打ちながれ行く。

あゝ人の命の五十年。われは、十六年のちりの世の子、かのくらき谷間を出でゝ、瀧となるところに行けば、この命、花の三日のその命、波間の露とやなりぬべき。

あはれ、この世を。（完）

（両評）趣向に新しきところあり。おぼろなる筆に一種の詩趣あり。

地

野あそび

長野市田町二九　飯塚ぎを子

底の小石も讀まるゝほどに澄みきつた、清らかなるい



さゝ小川、ちよろちよろと流るゝ水の音、球でも轉す様な、また天女の囁きの様な、ゆかしい其音、丁度牧場の夕暮に響き渡る小羊の首についてる鈴の音のそれのやうに、節面白い一つの音樂を奏しつゝ流れてゆくのである。其の汀には、むすびては解け、とけてはむすぶ、色もみどりの佐保姫の髪が吹き來る長閑な春風に、なよなよと揺いで、吹いてくる風につれて、水面には、金波銀波の漣の花を畫いてゐる、ものゝ一尺もないほどの危げな橋が、岸に架けられてあつて、渡ると、みわたすかぎりのない野原、菫よ蒲英公よと、色々の春の草花が、緑の若草にうちまじつて、咲きみだれてゐる姿を、ほがらかな日の光をうけて、色をきそうてゐるかと思

なり玉ひし後、本縣に於て、門地然るべく、似つかはしき家の人を選びて嫁入せさせ申すべく、かくすれば、恩人の御墓も、幸に無縁とならで、幾久しく香花を手向けられておはすべし。かの腰元とても、本の如くに姫君にかしづき、とも〳〵に女の學ぶべき程の諸藝を習はせ申すべく、決して、我が家の事に御心かけさせ申すまじきなりと言ひけるを、月香生れつき、すぐれて怜悧なりければ、これを聞くや否や、夫婦の者に、初めての禮をなし、妾が身は賣られて、かく成り果てしなれば、奴婢となるこそ、理の當然なれ。さるを、情ある人の爲に救はれて、再生の恩を荷ふは、思ひもかけぬ事なるを、あはれ、願はくは、妾が拜を受けて、養女とも見做させ玉へかしとて、地に跪きければ、かの賈昌、あはたゞしく又跪き、妻なるをして、姫を扶け起さしめていふやう、小人は亡き殿配下の名もなき民にして、蟲けらよりも劣りし此身、本はといへば殿の賜ひしものなり。されば、この腰元だに、おさ〳〵、おろかには思はぬを、まして、姫の御身に對し、いかて、かばかり尊大に命がの程を忘れ申すべき、たゞしばしが間、客分になりしとおぼして、よろづに、物足らぬを責めさせ玉はずば、小人夫婦の幸にこそ候へと申しければ、月香は再三その辱なきを謝しつ。やがて、賈昌は家中の男女に申し付け、姫を石小姐と呼ばしめ、かの小姐は、賈昌夫妻を賈公賈婆と呼びて、なづき親みける。こゝに、賈昌は、かばかり忠實の者なるが、其妻は性賢慧からず、その初、月香の來れりしとき、花はづかしき顔ばせの美しく品高きを見、一人も子持たぬ身の、いかで之を養女にしてしがなと、心ひそかに喜び居たりけるが、客分として養ふことに定まりし後は、なか〳〵に煩はしく覺えけれども、石知縣の恩に報ゆる爲とおもへば、今さら詮方なく、厭々ながら、夫の命を奉せしなりける。その後、賈昌は常に外に在りて商をなしけるが、善き絹紬の類を、便あるにつけて、送り越し、石小姐の安否を問ひければ、かの妻は不平に堪へず、いつとはなしに、馬脚を露はし來りしこそ是非なけれ。それも、賈昌が家に在りける程は、朝夕の設けも、おろそかにせず、追從口たら〳〵と言ひ廻はせども、賈昌居らずなりぬれば、三度の食事に備ふもの、茶も茶ならず、飯も飯ならず、打つて變りし待遇ぶりなるが上に、常に腰元をも使ひまはし、しばしの暇だにあらせず、又石小姐には日ごと必ず成し果つべき程の裁縫を割り當てゝ、少しにても後

るゝときは、口ぎたなくも罵り散らしける。正に是れ
人無㆓千日好㆒、花無㆓百日紅㆒（未完）



湘南の春

竹貫直人

濱

湘南の勝地、片瀨に居て不用のものは高足駄であらう、一帶の砂地であるから、齒の低い下駄で更に差支を見ない、世が奢つて來て、誰やらの蒔繪の駒下駄は一分が何圓につくと詮議したものがあつたが、さういふ下駄はこの片瀨の濱で穿くが第一、恐らく鼻緒が痛むまで臺の減ることはあるまい。

江島の濱ではかいじめを燒く烟が夥だしく登る、晴天だと棒の如く眞直に立つが、曇天で空氣の濃密の日は横になぐれる、濱邊一躰の霞となつて、その中に島の影が明滅する有様は、南畵によく見る煙雨の圖の活きたものだ。

海

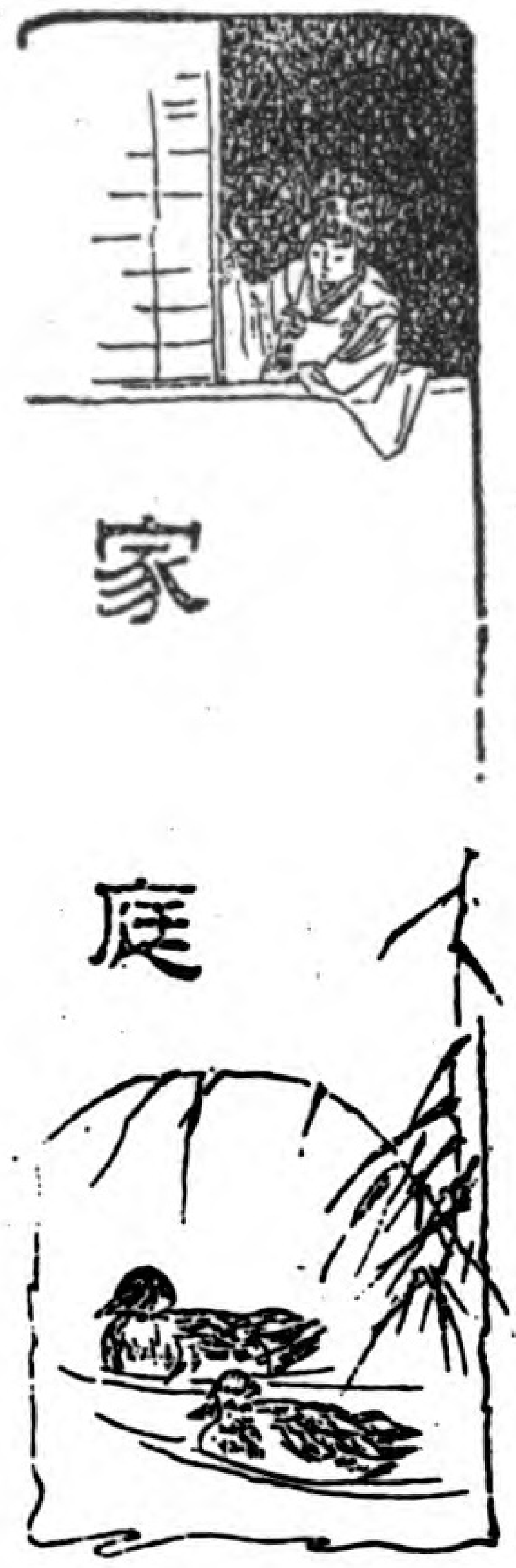
蘆の生へた中には吉原雀といふのが、喧ましく啼いて居る、夜になつても廢めない、

浪の音は夜になると克く聞える、僕は水の音が好きて、箱根木曾の旅寢にも、瀨音の淙々たるは、子守歌の代用になると喜ぶ方である、故に此處の浪の音も、熱海、伊豆山のそれに比して最も嬉しく感ずる、どうかすると雷の樣な音が時々交ざることがある、土地の人に聞くと海が鳴るのだといふ。

山

湘南の地は富士を見るには最も好い、いや富士そのものが形狀が好いので、松に配合しても、海に配合しても、沼にしても、川にしても、梅にしても、櫻にしても、およそこの山位何に配合しても其美を損ぜぬものはない、

片瀨、鵠沼、辻堂、南鄕、平塚、大磯、小田原、遠くは伊豆一躰の海の上に、或は雲を纏ひ、或は雲を冠り、あるときは赤裸々あるときは肩姐、げにながめよきはこの山である、既にこの山を見得ることのみで既にその地を美はしいと云つて差支へがない、ましてや更に幾多の美を加へる點があるに於ては、充分賞賛する價値がある！



婦人の正義

松井柏軒

今の世に殊に必要なるは紳士と淑女と也。然り眞正なる紳士と淑女と也。

紳士と淑女とは善き家庭を成し。善き家庭はまた新たなる紳士と淑女とを造る、故に國に善き家庭多きは幸ひ也。其の國必らずや榮へん。

而して今の世に何故に善き家庭少きか。何故に眞正なる紳士と淑女が少きか。是れ一般婦人の頭上に懸れる嚴格なる問題也。男子は其の品性野卑にして眞正の紳士らしからざるも。而して其の家庭の清き紀律と溫かき和氣なきも。多くは。否。少くも其の一半は。正さしく婦人の責任に歸すべきものなれば也。

男子が待合に出入して醜業婦に巫山戲。或は蓄妾し姦通するは何のためなりや。多くは婦人が正義に由りて之を諷諫し苦諫し規正せざるが故ならずや。此の場合に於て婦人若し死を以て男子を諫むる大決心あり。溫かなる愛と同情とを以て懇ろに男子の敗倫を諫めば人木石に非ず。如何ぞ感動し悛改せざらんや。多くの婦人は則ち然らず。漫りに嫉妬し怨嗟して不平を訴ふるに止まり。曾て決死の大覺悟なく。又春風の如き愛と同情と無し。甚だしきは則ち男子の爲すがまゝに任すを以て婦人の美德とし。男子に折花攀柳の資を供し或は其の醜業婦や妾に產ます所の子女を執て我が子と爲し。更に甚だしきは則ち妾と同棲して强ひて諧和するに至る。玆に於てか男子公然として醜行敗倫を恣に、し。一家の異腹の子女多くして自然に風波を起し。竟に家庭を破滅するに至る。今の世の紳士たるもの、家庭には實に斯の如くするもの多し。

男子が黃金のために節を屈し。威武利祿のために義を曲げ。收賄し詐欺取財を爲すは何のためなりや。多くは婦人が正義に由りて之を諷止し苦諫し規正せざるが故ならずや。露骨にいへば。今の婦人は唯だ男子の財を得ると多きを貴びて。其の財の清濁の如き毫も問

ふ所あらず。男子が燦爛たる珠玉の指輪。玳瑁の簪を與ふれば則ち目を細くして悦び。曾て之を買へる錢の穢れたるものならざるや。正しきものなるやを問ふ所なき也。此の場合に於て婦人若し男子の不正不義を諫むるに死を以てするの大精神を持し。一厘一分だも不正汚穢の財を入るゝを容れずんば。男子亦生れながらにして盗ならざる以上。如何ぞ感激し悛改せざらんや。

夫れ一家に私生兒あり。庶子あり。妾あり。雜然として混居し。而して其の主人屢々外に眠りて醜行を恣にし。而して其の生計多くは不正不義の財にして。此の不義の錢を以て驕奢浮華の生活を爲さば。一家の風紀なるもの那邊に在りや。此の間に在る子女をして果して如何の影響感化を享けしむべきや。曰く一家は正義なく道德なき獸類の巣窟と異ならざるのみ。曰く其の子女はまた第二の男子たり。第二の妾たるべき亂倫。財德。不正。不貞。幾んど羞惡廉耻なき男女と爲るを免かれさるのみ。嗚呼是れ豈忍ぶべけんや。

夫れ君に爭臣あれば其の國亡びずといへり。世に敗德不正の男子多く。而して醜怪不倫の家庭多きは其の一半實に婦人の責任也。婦人は其の心溫和にして春風の如く。男子及び一切に對して多くの同情を持つべきと論なしと雖も。多くも正義を維持するがためには。一身を犧牲とするも亦辭せざるの大精神あるを要す。是れ之を眞正なる淑女とは謂ふ也。此の淑女ありて始めて眞正に善き家庭を得らる。今の女子教育に志あるもの、能く此の意義を解せざるべからず

儒教的倫理の一節

岸上質軒

『忠臣は二君に仕へず、貞婦は二夫に見えず』と言ふことは、古來支那流の道德の、標準的理想語となつて居て日本の儒教流行時代には、隨分やかましい問題になつて居り、中には此の原則を遵奉せんがために、非常の苦慘を嘗めた人々も少なくない。ところが本家本元の支那では、左程窮屈に解釋して居ないやうである。元來二君に仕へる抔といふ事は、日本の國躰では有り樣のない事で、思ひも寄らない事であるが、支那では春秋戰國以來、英雄の割據、豪傑の崛起といふ樣な事は少しも珍らしくない。ソコで德義を重んじない者は景氣の好さゝうな方に味方する。爲に紛亂も起れば、革命も出來る。加之一時に一國內に數君が並立して居

るために、二君にも、三四君にも仕へる事は容易で、蘇秦張儀か六國の相印を佩びて居たなどは、取も直さず六君に仕へた者である。二君に仕へずとは、之を戒しめた者であらう。二君に仕へずとは、ツマリ一時に二ヶ國以上の利害を計らぬといふので、其爲に利害の衝突も起れば、國家の存亡にも關するに至るからである。豊臣が亡びてから、其浪人が德川氏に仕へると言ふのなら、少しも差支がない。寧ろ一家を養ふ上から仕へねばならぬ義務があると思ふ。

女子が二夫に見ゆると言ふのも、之と同一理であらう。露骨に言へば、有夫姦をするなと言ふのである。一時に二人の夫をもち、或は現在の夫を捨てゝ他に走るといふのは、如何にも倫理上、社會の秩序を保つ上から戒めねばならぬ。併し、夫に捨てられ、或は死別した時には、女子自身の品位を墜さぬ爲に、再縁する必要もあらうと思ふ。衣食に窮して墮落したり、養育院に送られたりするよりは、相應の男兒に嫁するが、自身の爲にも、社會の爲にも、得策ではないか。

但し今日戰死した人の寡婦は、再縁するが好いとか惡いとか言ふ議論があるが、之は全然別問題である。再嫁を欲する者を拒む理窟がないと同時に、再嫁を勸める理由も勿論ないので、是は猶或は學者の研究を要する問題であらう。但歴史的に發達して居る支那流倫理としては、夫を失つた婦人が再嫁するのは、少しも差支がないと言ふのである。

支那流倫理の標準、儒學の元祖といへば、孔子である。孔子を手本にすれば儒學的倫理は間違ないのである。その孔子が、我が子の伯魚か若くして歿した時、その婦を醮したとある。醮は即ち再嫁の事で、若後家となつた息子の娵を、更に外に嫁いらせたのであるが、古來の儒者も敢て之を非議した者はない。さうして『貞婦二夫に見えず』の格言も亦取消されて居ない處を見ると、略ぼ思ひ半ばに過ぐるであらう。

予は此語の質問を受ける毎に、右の通り答へて居るが今聊か感ずる所があつて、本誌讀者諸君の敎を乞ふ事とした。

和樂なる家庭

菅　綠蔭

人の住む所之を家と云ひ、家の中、父母妻子兄弟姉妹共に語り、互に助けて、其間一點の隔意なきもの、之

を稱して和樂なる家庭と云ふ。

和樂なる家庭、嗚呼何ぞ其言の善きや、吾人は何は扨置き先づ此和樂なる家庭を得ざる可からず、何となればば和樂なる家庭は、實に是れ子女に取ては、第一の學校、父母に取ては、亦取りもなほさず人生無上の樂園なればなり。

眞の紳士は和樂なる家庭を造り、和樂なる家庭は亦眞の紳士を造る。故に吾人若し社會の花たる眞の紳士を得んと欲せば、先づ家庭の改善に就て大に注意する所なかる可からず。

學校教育固より大切なり、然れども現時の學校教育は重に智的教育に偏し、一方の德育、體育等に關しては遺憾ながら、尚甚だ不完全なりと云はざる可からず、否學校に於ける此不完全は、單に學校其物の不完全なるに由るに非ずして、寧ろ其大部分は家庭教育の不完全に歸せざる可からず。然り而して其所謂家庭教育なるものも、單に子女に向て讀書又は習字を敎ふるの謂に非ずして、寧ろ善良なる父母の言行、以て知らず識らずの間に、子女をして宜しく其の子女たるの道を得せしむるに在るのみ。

例へば父母たる者にして、若し日夜其家業に精勤ならんには、子女も亦自ら之が感化を受けて、學事に勉强すべく、父母たる者にして、若し其朝夕の起臥、三度の食事は勿論、其他一切萬事一定の規律に據て進退するあらんか、子女も亦自ら人生に規律の必要を知ると共に、自分も亦之を守らんとの心を起す可く、或は又父母たる者にして、若し親愛和樂、絶えて風波の其間に起るなからんには、子女も亦自ら友愛の眞味を解し世間に出づるも輕々しく人と相爭ふが如きことなき即ち是なり。

之に反して、不幸にも怠惰業を勉めず、言行一定の法度なきのみか、甚だしきは父母共に爭ひ、兄弟墻に鬩ぐが如き不良なる家庭に生長したりとせんか、恰も瓜の種には亦必ず瓜の成る外なきが如く、假令如何なる敎育を施すも、之をして淑女紳士たらしむるは、殆ど不可能の事と斷念せざる可からず。

果して然らば現今及び將來に於ける、我國家庭の改善に任ずる人は、果して誰ぞ、吾人は今日敎育を受けつゝある姉妹諸氏を措て、他に其人なきを信ずると共に諸氏に於ても亦能く此意を躰し、熱心勉强自ら婦德を涵養すると同時に、他年一日家庭の主婦として、大に力を此點に致されんこと希望の至りに堪へざるなり。



女流短評

棚橋絢子

棚橋絢子は今の女教育家中最も名聲高き人也、女史の名聲抑も何に依つて斯の如くなるを得たる?、想ふに女史が有せる思想學識よりすれば、固より當今洋行歸りの、新智識新思想家に比して、稍や古風の所はあるべし、然乍ら子弟に對する品性陶冶家として、實踐躬行自ら疚しきを知らざる人は、現代女流教育家多しと雖も、恐らくは女史の右に立つて、誇り得る者なからん、女史が教育家として斯の如き名聲を得たるもの、一に其資性の淸く美はしき光の反映に外ならざる也、女史の生涯は奮鬪の歴史也、堅忍の織物也、其若き時代に於て、盲目の學者棚橋松村に嫁して克く夫に冊き、豐ならざる家政を治むるの間、猶愛兒をして學業を終らしめ、後東都に出でゝ教界の人となり、實踐躬行を唯一の主義として、老躰今猶倦まざる精神行爲に至つては、實に子弟鞠育者の摸範として永く後世に傳ふ可き人たる也。

跡見花蹊

花蹊盡る無し生花の筆、歸後何ぞ堪ん才忱に惱むをとは、その昔、韓國の使節金綺秀が一日女史と相見へて其才能の凡ならざるに感嘆した語である、女史は性來書が上手で畫が巧みである、女史生[illegible]、寧ろ教育家としてよりは、書畫家として[illegible]た、けれども女史が堪能の書や畫は、其[illegible]ではないのである、女史の期する所は多くの淑女[illegible]成して、他日の良妻賢母たらしめんが爲めにある、彼の跡見女學校は其理想の一端を實現しやうと試みたので、女史の生命は乃ち此學校である、女史が[illegible]重鎭たること、必ずしも偶然ではないの[illegible]

奥村五百子

十年一日の如く、今日は東明日は西と、正義[illegible]人道の爲めに、涙を揮ひ聲を嗄らし、六十餘歳の老軀を物ともせずに、遊說又遊說、殆んど席の暖まる暇もなき女史は、如何に壯の人なるよ、女史滿身の[illegible]渾て是れ愛國、女史は誠に武士的性格を有せる婦人[illegible]

婦女子の風氣甚しく頽廢したるの今日、女史の如きの士亦一人も無くては、畢竟日本國の不幸たるべし、健在なれかし老女傑！

下田歌子

今日本に於て最も適當に政治家的手腕を有せるものは、恐らくは下田歌子女史其人なるべし、女史は歌を作り、文章に巧に、演説は其特得の長技にして、一度び演壇に立てば、滔々暢々恰も立板に水を流すが如く、聽く者をして感嘆恍然たらしむるの妙手腕を有す、而して其天稟の才能は、至る所發揮せられ、洵に當代得難きの才媛たり、女史が曩に英國より歸り來るや、實驗修得せる英國教育法を以て世に臨み、東洋的女性の陋慣を破るに勉め、天下をして其風貌を想望せしめたりき、女史いまや擧げられて、華族女學校學監となり、往年の活潑なる政治家的手腕を餘り振はずと雖も、機至るあれば、將に起つて何事をか試みんとするものゝ如し、知らず女史の胸懷抑も今何をか藏せる、聞まほしきことにこそ。

鳩山夫人

鳩山春子の君は、信州舊松本の藩士渡邊某の[illegible]今は鳩山和夫氏の夫人として、誰れ知らぬ者はな[illegible]夫人が夫たる和夫氏の選擧に際して、自ら俥を驅[illegible]有權者を訪ひ、紅唇滔々夫を選擧せんと薦むるのを見て、兎角の評をなす人があるが、其等の人は夫人の性質を知らず、又た眞實夫に對する愛情の、いかに切實なるものあるかを知らぬ人々である、夫人は家庭教育を以て最上の快樂となし、夫に盡すの任務としては、如何なる困苦をも厭はぬてふ、崇高な優美な心を以て居らるゝのである、夫人は實に文明的婦人の典型ではあるまいか。

安井哲子

女史は今千里を隔てし、暹羅國の宮廷に教鞭を執らるゝ也、我國の婦人にして、遠く海外に出でゝ教鞭を執らるゝ者、唯だ曩に蒙古の荒域に赴かれし、河原操子と女史との二人のみ、斯くの如き勇氣ある——天職を重んじて敢て難易を顧みざる女史は、眞個の教育家とや申すべき、あゝ女史も亦人傑なるかな。

！





塩井雨江先生選

天

さゝ舟

千葉縣我孫子町　中村由

はかなき身を、さゝ舟にのせて、蘆間をめぐる、十六とせ。その間、あるときは、風あらくして、波いたくさわぎ、如何はせんと思ひ忍びて、波間にあやしき雫をおとししことありし。あるときは、水かわき、舟とゞまりて、暫しの間、つめたき風に泣きしこともありし。今年この春、蕾の花の旭の光りをうけて咲かんとする里の、若草もえ出でしところまで漕ぎ來たりつ、舟は破れ、身はつかれぬ。あはれ、この美しき里にうつりて、永く住まはんか。されど、悲しや〳〵、波はます〳〵はげしうなりまさりつ。舟をすてゝうつらんとして、うつる能はず、あゝいかにせん、舟は沖へと出でつ。あゝ波よ波よ、暫し起るな、われかの里にうつらん程。あゝ風よ風よ。汝も暫し吹くをやめよ。汝吹かずば、波も起るまじ。

われはちりの世の子なり、はかなき身なり。風の神よ、波の神よ、このさゝ舟にあるわれをたすけしめよ、あな。

風はやまじ、波もやまじ、あゝむしろ、舟をすてゝ身を波間に投げんか。されど、行く末を思へば、命をすつるは口惜しや。

とやかくの思ひ胸にわく中、一つのみ舟さかのぼり來たりぬ。われ舟とめて、この水の流れゆく末をとひけるに、かれいへるやう「ほど行けば、水の中に一つの林あり。その右を行けば、紅の梅花今を盛りと咲き匂ひ出でゝ、心もすが〳〵しく、げに身はちりの世をのがれて、天の國へ來りたる心地す。その左を行けば、日の光りも見ることを得ざる暗き谷間に入り、そこを出づれば、瀧となりて、十丈も下へ落ちざるべからず。心してゆきたまへや」と。

暫しを經て、林に近づきぬ。見やれば、水は左へ多

く流れゆくやうなり。花片も、乙女のはなしし若菜も、わが舟も、遂に左へと打ちながれ行く。

あゝ人の命の五十年。われは、十六年のちりの世の子、かのくらき谷間を出でゝ、瀧となるところに行けば、この命、花の三日のその命、波間の露とやなりぬべき。

あはれ、この世を。（完）

（兩評）趣向に新しきところあり。おぼろなる筆に一種の詩趣あり。

地

野あそび

長野市田町二九　飯塚ぎを子

底の小石も讀まるゝほどに澄みきつた、淸らかなるいさゝ小川、ちよろちよろと流るゝ水の音、球でも轉す樣な、また天女の囁きの樣な、ゆかしい其音、丁度牧場の夕暮に響き渡る小羊の首についてる鈴の音のそれのやうに、節面白い一つの音樂を奏しつゝ流れてゆくのである。其の汀には、むすびては解け、とけてはむすぶ、色もみどりの佐保姫の髮が吹き來る長閑な春風に、なよなよと搖いで、吹いてくる風につれて、水面には、金波銀波の漣の花を畫いてゐる、ものゝ一尺もないほどの危げな橋が、岸に架けられてあつて、渡ると、みわたすかぎりのない野原、菫よ蒲英公よと、色々の春の草花が、綠の若草にうちまじつて、咲きみだれてゐる姿を、ほがらかな日の光をうけて、色をきそうてゐるかと思



へば、水の傍には、土筆も萌え出でゝ、わらびの人まちがほに手まねぎしてゐる其風情、我々の拙ない筆には、なかなかに記すことができないのである。其の緑の草に包まれて、さきの小川が、黄金の帶のやうになつて、野中を繞つて流れてゐる。「なんと美しい景よ」と、我れしらず叫んで、やはらかな草のしとねに座してしばらく空をみつめてゐると、不圖雲間で、清らかなひばりの聲を耳にした。其のこゑは、まるで天の女神のかなづる小琴のひゞきではあるまいかと思はるゝやう。ぽかぽかとなま暖かい風に送られて、樣々の小鳥のさえづるのがきこえて、もう自分はちりの浮世をぬけいでゝ、天上の花園にでもきた樣な心地。不知不識瞑目してあつたが、やがてあたりをみると、何處から飛んで來たのか、黄色の蝶々が、翩翻としてとび廻つてゐたが、遙かむかうの方に、二三の群れとなりて摘草をしてゐる小兒の花籠の柄にとまつた。すると、年の頃は十一二の、如何にも腕白らしい小兒が、どこでみとめたか、やにはにはせきたと思ふまに、はいてゐた下駄を、そうつとぬぎすてゝ、そくそくと近寄る、其の腰付が如何にも可笑しくつて、吹きだしさうであつた。此處と狙ひ定めつと、手をさしのばした、其の剎那、蝶々は羽を揚げてとび去つた。「ヤッ」といふやいなや、逃げた蝶々を、彼方へ走り、此方に馳せて、追ふに餘念ない、實に無邪氣に見ゆるものである。足のむく方、どことなく歩むで、そうこうするうちに、日は西に沒んで、黄昏を告ぐる鐘の音が、遠くかすかに響いて、夕やけの雲はオレンヂ色をして、大な白い雲は北の方へのびて、段々紫色に輝きはじめた、丁度大空を、あらゆる麗しい繪具で彩色どられたやう、自然の美妙さは、心ゆくばかりである。恍惚として麗しく移り行く空を眺めてゐると、塒にかへる群鳥の、空をかすめて、後になり先になつて飛でゆく、恰も一幅の畫の樣で、あまり景色のよいのに、暫しみとれてゐたが、軈て此の美しい平和な夕景につゝまれて、足を我が家の方へはこんだ。

（雨評）鍊未だしきところはあれど、多少の詩趣あり。

人

春ぐさ

遠江笠井　大石よし子

鶯なきぬ。
のどかなる春日晴れわたりて、風もあたゝかく吹き。
庭の紅梅、白梅、時をえ顔に今が花ざかり。
詩にも歌にも、水茎のあとおもしろからむ。
さてもこよなう、うれしきは朝の梅、月の梅。

○

曲。一曲、またおもしろき。ヴアイオリンの音、妹うたひ、吾かたり、共に打ち笑ふ築山の亭。ながむれば、あはれ、はづかしや、春の月。空はおぼろなり。遠くにかすむは花の山か。

○

藪下を流るゝ春の水、土手をかざれる春の花。色香うつろひて、共にうつくしや。
浮び來るは木の一葉舟。黄の蝴蝶はそれに眠むれり。舟は橋下に至りぬ。
水が無情か、蝴蝶のさだめか、あはれ、荒き瀬浪に、舟蝴蝶もろともに沈み果てぬ。
思へかし、人の浮世もさならむに。

（両評）筆づかひに、一種の詩韻のきこゆるものあり。

秀逸

○鶯を放つ

紀伊東牟婁郡新宮町　みどり女

淡く暖かき餘光を、咲き衰へし庭の櫻の花片に投げかけて、春の夕日は、今し虞淵に沈まんとすなり。讀みも了へぬ詩の巻々を打ちすてゝ、廂破れし書齋の窓に身をよせつ、日頃めで飼ひにし鶯を放たむとすれば、流石に別れ惜みてか、愛らしき双の翅を震はせて、籠のしきみに、しほらしう止るよ。
あはれ、鶯、汝が優しの姿よ、妙なる其の音よ。あゝ汝は自然の御園に、神の祕曲を調べては、世に棄てられし愛の子等を慰めむの御使かも。
さるを、幸なるも、情知らぬえせ歌戸自の手に捕はれて、埴生の宿よ荒れにし窓の朝夕を、はかなき運命に過ごしけむ其の恨み、あゝ盡きざらまし。
されど、汝がやさしの聲は、愛らしの姿は、魔の神の征矢深う傷手に悩む吾が友の小さき御胸に、限りなき慰籍を與へてき。
あゝ、そは、さながら今日に似し夕暮なりしよ。彼の

君が臨終の枕邊、汝が音に姿に、神園の樂をみ悟りて、御神の賜ふ送夫の曲ぞと讃へ給ひしは。

＊　＊　＊　＊　＊

愛で培ひにし櫻の花瓣は、夜毎の雨に色褪せて、せまき庭の春のいよ〳〵淋しうなりまさりつ、吾が慕はしき友の君は、永久に歸らぬ黃泉の客となり終り給ひぬ。かくて、汝が音のやう〳〵老いゆくまゝに、吾が小さき詩の袋は、空しくなり果てぬ。あはれ、鶯、われは、限りなき悲哀の情に胸迫りて、送りの歌の詠みも得ぬなり。あな、吾に遺す別れの曲とや、さても、其の音の低う曇りたることよ。

さらば、鶯、樂み少なきわが庭の窓を飛び行きて、神の御園の花薫るあたりに、汝が餘生を送れや。

かくて、また來ん春は、悲しの運命を生れ替りて、やんごとなき姫君が花の臺に、御歌の友とさもらひつ、極みなきその樂みを歌へかし。

せきあへぬ淚をとゞめて、窓を閉ぢんとすれば、翼も鈍う、咲き殘る櫻の枝を飛びかひて、なほも名殘惜しげに遺す其音のかなしきことよ、さらばよ、鶯、行けや……疾く……。身動きもせて見つむれば、いたはしや、またも花片吹き散らして、亂れし髮を掠め行く夕風一陣、いみじう身に染み渡りぬ。

（評）　文は整ひたり。されど、さして情の動かざるものあるを惜しむ

○雪の朝の感

岩代國伊達郡小島村　菅野和子

夜は明けぬれど、早かりし雀も啼かで、唯靜けき朝ぼらけにもあるかなと思ひつゝ、柴戸押開けば、思ひきや、窓に立ち塞かれる竹叢も、綿の容なる白雪に埋れて、心に障る物もなく一鄕、一眸の裡に見渡さる。いぶせき萱葺は、白銀の臺とかはり、塵に穢れし路も、練絹を敷きたらむやう、向ひの山は、楢も椚も玉の幹玉の枝と飾り、枯れたりし野原の草も、うつくしき花と咲き亂れて、暫し寤覺の眼を喜ばしめたりき。まして、庭の松が樹は、白綸子の衣裳かずき給ひし天女が、賓の山あさらむ風情に見ゆるなど、其の景色言はん方なく、俗境の我れとも覺えず、氣も心も空になりてぞ佇みぬる。いでや、友垣の君にも頒ちて眺め歌はむには、いかに日頃の憂さも晴れやらんと喜び文認めぬ。折しも、彼處に驅けまはる犬の、雪を蹴立てゝ進む態は、敵の行爲探る一騎武者の如く、うたゝ、思ひは遼東の野に走りて、勇まし。

隣の「正雄チャン」のほゝ笑みて立てるは、昔時の雪軍を想ひつゝくるにかあらん。弟の君、雪つり遊べば、文子さんは、やさしき聲はりあげて、鷄に餌與ふ、いとく〳〵睦まし。内には酒や溫むらん、立ち昇る烟り豐かなり。

アヽ、いたましや、簑笠脚胖の大男、泥れたる足跡印して通り行きぬ。とばかりありて、また一人、荷車曳きつゝ、あはれの節、高らかに唄ひ行くは、衣食にいそがはしきなるべし。

身に襤褸纏ふ乞食や、いづこに昨夜を明しつらむ、またきより人の門邊に彳みて物乞ふあはれさ。かゝる眼には、いかに今朝の雪を恨みつらんよ、

とかくする間に、朝暾は東の山の端に昇りて、彩光まばゆく下れば、あはや白銀の乾坤、花はちり玉は砕けて、きのふに替はる所も見えずなりぬ。アヽ、春の淡雪、アヽ、うつし世のさま。

（評）難すべきかどもなけれど、取り立てゝ稱すべきふしもなし。



○雪の朝

近江國彦根町
宇多花子

あさまだきより降り初めし雪は、野となく山となく、一面に積りて、をちの木も、こちの家も、彼方の岳も此方の森も、さてはいぶせき賤が伏屋まで、皆白妙の布もて蔽はれ、いまはしき塵の世も、夢のまに、白銀の世界、花の天國と變り、汚れし人の世も、まばゆき龍宮の玉居、銀の高殿と化りぬ。

庭のながめも、ゆかしくかはりて、苔むす燈籠も、けふに限りて白く、白かりし壁も、灰色に見ゆるも面白

し。枯木に時ならぬ花さき、常盤木の化粧せる、こよなう趣あり。青松針のまゝ綿もてつゝまれ、池の水面のねむれるが如き、いと妙なり。竹の雪をれもせてたわめるに、雀のつどひ來りて、さわがしく、折々雪など落すも、物うし。小犬のよろこびまはるに、美はしき雪かきちらすは、日頃の愛にも似で、にくらしく、弟の日の丸のはた、かざして犬を追ひ行く跡に、二の字と落梅のゑがゝるも興あり。築山の杭に雪の圓く積れる、あるは、水に臨みし石の冠着たるこそよけれ。隣りの家の南天、いと高く生ひ立ちて、つらなれる實のいと赤き、一きは目に立つに、目白となんよべる小鳥の、隣りの下女の水汲む音におどろかされて、こちの庭の木にとまるもうれし。

あゝ、さても、此の美はしき野山の景色を、戸やぶれ、壁落ちて、見るかげなき荒破ら屋に、薪木くすべつ、米か綿かさては砂糖のかくまで降りしならんにはと、親子寂しく物がたるもあらん。あるは、雲つく高殿に、琴三味線ひきならし、あやしき女どもよびて、酒よ、肴よと立ちさわぎ、え知らぬ歌ども狂ひ歌ふ人もあるらん。げに降りし雪は、賤きも尊きも、とめるも、まづしきも、おしなべて平等なるに、不公平なるは人の世や。

さるにても、風凄き滿洲の野、雪深き遼東の原に劍とる益良猛夫の困苦やいかに、……あゝ……。

折りしも、えならぬ薫の、風に送られて、鼻をつきければ、ふと庭の面をみあぐれば、早や、寒梅の一輪二輪さき初めて、梢に微笑せり、それや勇士の心情をかたるがごと……………。

不意にドンと一發砲聲の震ひし彼方、烏さわぎて、茅屋より立ち昇る炊煙細く、征露の軍歌高くきこえたり。今しも怪雲はやゝに晴れて、やさしき日の神は、東の山の端より笑ふが如く出でたまひ、美き恵の金線、尊きみ光を放ちたまひつ。

世は依然銀世界、神の世、花の國にて、塵の世、罪の世のさまは、夢あらざりき

うれしや妾が心も、自らいと清くすみて。

（評）言ひまはし方に、變化の妙を欠くを惜しむ。

○花かご

長野市田町二九　飯塚ぎを子

はなかごのうちにある春の花の姿のうるはしさ、艶なるあるべし、清なるあるべし、種々とりまぜて錦をか

ざるおもしろさ。我がなつかしきこのふみぞのにも、これなくてや。

まちこがれたるいちのまきも、あたらしき年のはつひに、はなやかなるうぶこゑあげて、うまれいでぬ。このまき手にしたる妾のこゝろは、いつしかたのしきふみぞのにさまよひいでぬ。

さきそろふ文の花の色香のうるはしく、げにたのもしきふみぞのなるよ。妾はゆくすゑながく、この文園に蝶と化して、えんなる花にやどりて、まどかなる夢をむすばゞや。

とりのねいろはなけれど、わけゆくまゝに、心ものどかに、身はいつしか、たのしきそのにいたりつ、とこしへに色香うせぬこのふみぞのぞたのもしき。つたなきふみの花籠たづさへて、咲きにほふふみぞのゝやちぐさをつみてやあそばむ。

(評) 趣向はおもしろけれど、言ひまはしかれたるを惜しむ。

○春の野べ

埼玉縣浦和の里　關　香毅子

一

タイムは流れに流れて、既に春色めぐり、空いとうららかに晴れたる今日の日曜、遊心勃々禁ずる能はず。浮ける心の駒に、一鞭加はへて、風清き田島の原―櫻草の名所―へ向ひぬ。

親しき友垣二人とともに……。

二

若草萠え出てたる道のべの農家、そが垣のあたりには、勇める駒をひき出したるわらんべ。涓々たる前の流れにて鎌研げる父。

菜の花一里咲きつゞく處、桃の花片のチラリ〳〵と散りこむ窓に、梭打つ乙女。日當りよき南(みんなみ)の庭の藁の上に、糸車くる老婆、尺餘にのびたる傍の麥畑に、餌をあさる鷄數羽、炎陽(かげろう)上る畑に天に歌ふ雲雀と、己れが唄とを競ひつゝ、鍬振ふ田子など。

進むにつれて、千變萬化する田舍の景をば、眺めつゝわれらは歩を運びぬ。げに田園生活ほど天眞のゆかしく見ゆるものはあらじよ。

三

ゆる〳〵吹く風に髮くしけづらるゝ、青柳並ぶ里川の土橋を渡りて、青紫の草花數町に咲きみち、處々綠草の點綴したる、譬へば、模樣衣裳の如き原につきぬ。是や名にし負ふ田島の原なる。洋服の人、袴の女、歩

し。枯木に時ならぬ花さき、常盤木の化粧せる、こよなう趣あり。青松針のまゝ綿もてつゝまれ、池の水面のねむれるが如き、いと妙なり。竹の雪をれもせてたわめるに、雀のつどひ來りて、さわがしく、折々雪など落すも、物うし。小犬のよろこびまはるに、美はしき雪かきちらすは、日頃の愛にも似て、にくらしく、弟の日の丸のはた、かざして犬を追ひ行く跡に、二の字と落梅のゑがゝるも興あり。築山の杭に雪の圓く積れる、あるは、水に臨みし石の冠着たるこそよけれ。隣りの家の南天、いと高く生ひ立ちて、つらなれる實のいと赤き、一きは目に立つに、目白となんよべる小鳥の、隣りの下女の水汲む音におどろかされて、こちの庭の木にとまるもうれし。

あゝ、さても、此の美はしき野山の景色を、戸やぶれ、壁落ちて、見るかげなき荒破ら屋に、薪木くすべつゝ、米か綿かさては砂糖のかくまで降りしならんにはと、親子寂しく物がたるもあらん。あるは、雲つく高殿に、琴三味線ひきならし、あやしき女どもよびて、酒よ、肴よと立ちさわぎ、え知らぬ歌ども狂ひ歌ふ人もあるらん。げに降りし雪は、賤きも尊きも、とめるも、まづしきも、おしなべて平等なるに、不公平なるは人の世や。

さるにても、風凄き滿洲の野、雪深き遼東の原に劒とる益良猛夫の困苦やいかに、……あゝ……。

折りしも、えならぬ薫の、風に送られて、鼻をつきければ、ふと庭の面をみあぐれば、早や、寒梅の一輪二輪さき初めて、梢に微笑せり、それや勇士の心情をかたるがごと……。

不意にドンと一發砲聲の震ひし彼方、烏さわぎて、茅屋より立ち昇る炊煙細く、征露の軍歌高くきこえたり。今しも怪雲はやゝに晴れて、やさしき日の神は、東の山の端より笑ふが如く出でたまひ、美き恵の金線、尊きみ光を放ちたまひつ。

世は依然銀世界、神の世、花の國にて、塵の世、罪の世のさまは、夢あらざりき

うれしや妾が心も、自らいと清くすみて。

(評) 言ひまはし方に、變化の妙を欠くを惜しむ。

○花かご

長野市田町二九　飯塚ぎを子

はなかごのうちにある春の花の姿のうるはしさ、艶なるあるべし、清なるあるべし、種々とりまぜて錦をか

ざるおもしろさ。我がなつかしきこのふみぞのにも、これなくてや。

まちこがれたるいちのまきも、あたらしき年のはつひに、はなやかなるうぶこゑあげて、うまれいでぬ。このまき手にしたる妾のこゝろは、いつしかたのしきふみぞのにさまよひいでぬ。

さきそろふ文の花の色香のうるはしく、げにたのもしきふみぞのなるよ。妾はゆくすゑながく、この文園に蝶と化して、えんなる花にやどりて、まどかなる夢をむすばゞや。

とりのねいろはなけれど、わけゆくまゝに、心ものどかに、身はいつしか、たのしきそのにいたりつゝ、とこしへに色香うせぬこのふみぞのぞたのもしき。つたなきふみの花籠たづさへて、咲きにほふふみぞのゝやちぐさをつみてやあそばむ。

（評）趣向はおもしろけれど、言ひまはしかれたるを惜しむ。

○春の野べ

埼玉縣浦和の里　關　香　毅　子

一

タイムは流れに流れて、既に春色めぐり、空いとうららかに晴れたる今日の日曜、遊心勃々禁ずる能はず。浮ける心の駒に、一鞭加はへて、風清き田島の原！櫻草の名所！へ向ひぬ。親しき友垣二人とともに……。

二

若草萠え出でたる道のべの農家、そが垣のあたりには、勇める駒をひき出したるわらんべ。涓々たる前の流れにて鎌研げる父。

菜の花一里咲きつゞく處、桃の花片のチラリ／＼と散りこむ窓に、梭打つ乙女。日當りよき南（みんなみ）の庭の蓆の上に、糸車くる老婆、尺餘にのびたる傍の麥畑に、餌をあさる鷄數羽、炎陽（かげろう）上る畑に天に歌ふ雲雀と、己れが唄とを競ひつゝ、鍬振ふ田子など。

進むにつれて、千變萬化する田舎の景をば、眺めつゝ、われらは歩を運びぬ。げに田園生活ほど天眞のゆかしく見ゆるものはあらじよ。

三

ゆる／＼吹く風に髪くしけづらるゝ、青柳並ぶ里川の土橋を渡りて、青紫の草花數町に咲きみち、處々綠草の點綴したる、譬へば、模樣衣裳の如き原につきぬ。是や名にし負ふ田島の原なる。洋服の人、袴の女、歩

む人、馳する子、あちらこちら逍遙ふ人など、げに一大パノラマにも似たらんかし。われらも、あちらこちらと、遊び歩きぬ。

四

宵の根の長き春の月も、早やわれらが影坊子をば、長く尺餘となす比になりぬ。落日にはえて櫻色帶びたる雲は、北方步甲山の峯あたりより起りて、悠々南方に流れて、榴柘色と化しぬ。葡萄色なる雲は、彼方山の上に現はれて、南方に流れゆく雲を襲はんとす。

われは、悠大なる蒼穹を仰ぎて、自然の景をば、恍として眺め居たりしが、友にうながされて家路を急ぎぬ。天つ神が、射玉ふ金線銀線の矢をば脊にうけつゝ。

（評）才氣の多少見ゆれど、まだ筆のたど〳〵しきを惜しむ。

○琴の音

名古屋市西魚町淺野方　戸空せいう

長閑なる春の日、うらゝかな、そして、どんよりとした花曇り、

庭の木立は鬱蒼として、ソヨ吹く風に其綠葉を漂はして、そして其綠を競ふかのやう。

折々餌をあさる雀の一羽、二羽が。

それも、今は最う時に、其疲れた翼を疊んで、そして恰度哀れなる人の子が、其愛兒を勞はるそれのやうに。

晃々と今迄金色に染め拔いて居た夕榮は、次第に灰色に變じ、そして、今はもう黑暗が四方を襲うて、恰度、黑幕を掩ふたかのやう。

無數の星は、黑暗々たるみ空に、煌々と瞬いて、晝の巷の渾沌として、燃える焰のやうであつたのを、平和なそして靜寂なる神の御手に托し、浮世の浪に漂ふ捨小舟の如き、哀れなる人の子を、樂しき、快き仙境に導くかのやうに輝いて。

肌寒き夜風は、戸のすき間をもれて、終日終夜床と親んで居る哀れの佳人……そはわが友なる……其やつれた面容に、亂れし後れ毛を、意味ありげに、拂ふのである。

……何思ひてか、不意に起ち上つて、其亂るゝ足下もおぼつかなげに、久しく手にだに觸れず、秘め置きし小琴を取りだして、臥床近かく引き寄せつ、天女の美しきみ手の、それの如き腕を伸べて、あはれに調べ出だしぬ。

……曲、一曲……殘月……想夫戀……。あゝいかに聽くものをして、恍惚たらしめたでありませう、

いかに心耳を澄ましめたであろう……？。
絃を渡る指、そが指先は、恰度電光のそれの如、そして、朗々響き出る音色は、珠の盤上を走るとばかり：……。
其妙へなる調べには、かしこき神も舞ひ、風も梢を渡り、雁もみ空を行き、軒端を雨は過ぎ、岸にも波は、よせ來るのであらう。其いとも目でたき手ぶりには、ひそめる龍もをどるであろう。
其聲、其音、其響、眞に悲想に堪へぬ。
細く、高く、……幽かに、靜かに……。
折柄庭の方に、戀猫の聲、……。

（評）才氣はほの見ゆれど、殊更に氣取りたる如き痕あるを惜しむ。殊に、結末の戀猫の聲の小細工、俗氣文趣を害したり。

〇亡き妹

神戸市　神山園子

かつらのはな影、一朶の浮雲に蔽はれて、雁がね二聲三聲、大空に鳴き渡り、露しげき草叢にすだく蟲のこゑ〴〵實に哀れなり、さらぬだに、あたりさびしき秋の夜頃を、年頃最愛の妹を失ひて、いたく浮世のはかなさを感ぜる此の身には、たゞ云ひしらぬ悲みの、むら〳〵と胸に起りて、われ知らず袖のうるほふぞ、是非なき。往日を追懷すれば、已に二年の昔とはなりぬ。一日、妹は假初めの病とて床に臥せり。初めはたゞ風邪なりしが、次第〳〵に病勢は重り行くばかり、臥褥幾十日、ゆたかなりし頰も、肉落色靑ざめ、嬌姿またいづくにか見む、蒼白なる纖手、梳らざる黑髮、見るだにいたはしの風情かな。あはれ、死の神は早や、わがいとしき妹を、そが黑き翼もて、蔽はんとはせるなりき。
斯くて、蕭々の雨、軒をめぐるの夜半なりき。
妹は力なくも、靜かに眼を見開きて、枕邊にみとりせる一族の顔を眺めつゝ、今を名殘の死出の山、泣きわめくわれ〳〵を、後に見すてゝ、やがて不歸の客となれりけぞ。
老少不定の世の中とは云ひながら、あたら蕾の姫櫻、夜半の嵐に散らされたる、天道果して、是か、非か。咄、死の神、汝も、何等の力ありて、斯くも人の運命をつかさどる。
嗚呼、悲しいかも、悼ましいかも、わが心の奧に深くもきざまれたる悲哀の痕、何物かよく之を拭ひさるものぞ。よし、拭ひさればとて、われは現世を永久に悲觀せざるべからざるかな。
涙をはろうて、空うち仰げば、月は雲間より出てゝ、雨の如き虫聲、一段の哀れをそへぬ。われはなほ、月に對して泣けり。

○白露

伊勢津市　永田きの子

夜といふ黒い冷かな布が、天から投げられて、山も川も田も家も野も、一面に包まれてしまうと、青い御空のうちに、圓やかな月がしかゝる、此時、吾等は、多くの友と共に、其月の都を出で、風に乗つて下界へ降りて行くのである。吾等が月の都を辭したのは、丁度望の夜であつた。下界は水のやうに澄切つて、かすかな鐘の音が、風につれて、此處まで聞えてくる。何か知らぬが、黒い鳥が、其の中を縫うて、鳴きつゝ行くのが見える。

吾等は、多くの友と、秋風に連れられて、地面をさして降り初めたその心の愉快さは、何とも云はれない。地上をさして下りつゝ、吾等は友とかう言ふことを語つた。吾等は地面に降りると、何れ何物かの上に乗せられるであらうが、吾は掃溜に下るのはいやだ、草の上はいやだと言ふ。そして、或者は美うい花の上を望ましいと言ふ者もある、或者は可愛い兒の袖の上を望む者もある、或者は石の上はいやだ木の葉の上だなど言つて爭うた。

その時、秋風は靜かに吾等を制して、そうして、汝等は是から何處へ行くかも解らぬに、好きな事を言つて、何をさわぐのか。汝等は人の世の爲めに神のめぐみを傳へ、淸くたふとき影をあとふべきでないか。世を厭へる人に望を與へ、戀にやむ人を慰めねばならぬ汝等ではないか。下界の人の子の爲め、情と淚を以て盡くせよかし。汝等よ、吾はいつまでも汝を守るであらうと言つて訓めた。

そして、吾等が地面に着くと等しく、秋風の姿は消えて了つた。

吾等は茫然として、地面に置かれたまゝ、今の秋風の言葉を考へ、人の世の爲め盡すべきことを思うて居たそのうちに、段々東の空が白んで、鳥が鳴き、風がそよ〳〵と吹いて、やがて、暖かな美しい光を持つた日は、華かに青い空へ昇つた。

吾等は、その光に驚いて、氣がついて見れば、四邊は明るくうるはしくなつたばかりか、今まで冷かな黒い色であつた吾等の體から、黄金の光を放つて、菊の花の上に置かれてあつたのである。

そして、かたはらに立つた美しい少女が、吾等をながめつゝ、あゝ奇麗な露だといつた。

○新春の一夜

廣島　堀田温子

たそがれてよりわづかに積りし雪の、さら、さら、さらとばかり軒端をすべり落つる音に、妾はゆくりなくも夢より離れぬ。

夜はいたう更けたるならむか、萬籟音絶えて、天地はいよゝ蕭條、たゞ窓前の筧の流れ、靜かに夢を呼び迴るやう、潺湲として流れ行くのみ。

意地らしや、嬉しの夢路はかなく奪ひて、知らぬさま

なる擔の雪、また沙々と仔細らしく音たてけるよ。
あはれ、まどろまむとすれば、眼はいたくさえぬ。奇しき思ひ、はしなくも妾が小さき胸に湧き出でつ。をりから、枕頭なる燈の影幽かに、光り薄れゆく淋しさに、手を伸べて引き寄せ、ふつとばかりに打ち消しぬ。

思はざりし、月にやあらむか。妾が腕さらに白う。と視れば、二張の朱骨、ほそき障子に映り、描かれし老梅の影。あゝ、何ぞ幵が容姿の美はしくも亦妙なるや。

大理石のやう皓々たる畫面の中、漆の如くに濃く、霞の如くに淡く、迂折し、太きは怪巖のやう、からまれたる纖きは、亂れし網のやう、あるは弦線の如くに、あるは波紋の如くに、とりわけ幵が間を綴りたる雪は、今し梢斜めに渡る風に下紐とかれたる、幾千萬の蕾に、あるは高く、あるは低く、さながら銀屏に薫いみじき墨繪のそれのやう。



あまりの床しさに、妾はやをら起ちて、さらりと障子打ち明くれば、さと流れ込みし月影、さらに白う、婆娑たる樹影と共に、室内に擴がりぬ。
あはれ美しき眺め、如何に心ゆくべきかぎりぞや。
おゝ、それよ〳〵、月は今宵の如く冴え、雪は今宵の如く潔く、花は今宵の如く馨れりき。げにその時よ、妾の心悲しうも亦うれしかりしよ。

思へば、昔、脊の君と、そゞろ暗香にあくがれて、紀念多きこの懐かしの庭におりたちて、まだうら耻しき幼な心の、包む香を袖に秘めて、ほころび初めし梅が枝を手折りて、何とはなしに嬉しう眺めしか、折しも、むら雲、とみに月を呑みて、あたりは闇となりけるに、おそろしやと寄りそひて、覺えず抱き合ひてぞ泣きし。

今ぞ千里雲へだたりて、月むなしう兩地の情を照らす今宵。むかしは共にこの月に泣きたる事もありしと、そゞろにうら悲しく、妾は五とせ、滿身の血の半は詩に灑ぎ、半は戀にそゝぎて、思ひ絶えなんとする今宵、月に向ひて面やつれし、妾が身の影さびしく、たゝみの上に參々として細し。
今し月は老梅の梢にかゝり、青白き迄に澄みきりて、

身を刺すばかりに冴え亘り、下には細き練糸を洒したらんやうなる筧流はかすかに銀鱗を漂はしつ。ゆかしき香にうつりし妾が袖、いと重し。

○冬の月

神奈川縣 小野露枝女史

春は花見し山ながら、秋としなれば物うきに、はや其秋も暮れんとする山の景色こそ、亦一入なれ。木々の梢も峯の葛葉も、一夜のこがらしに堪へずやありけん。皆あわたゞしう争ひ散りはてゝ、今は訪ふ人とても絶えてなく、折り〳〵讀經の聲のみ幽かに聞ゆるに、いづち行くらん衣かりがねの、はゞたきもいとたゆげにて、只一羽寂しげに鳴きて飛び行き、そこはかとなく妻とふ棹鹿の、落葉踏み分けてかなたの嶺にうちなくも、いとうれへ顔なり。友よぶ谷のましらは、絶え間なき瀧の音に和して、物思ふ人を驚し顔なるに、鎌なり月の響くらく、尾の上の松が枝にかゝる様見ては宛ら膓もちぎらるゝ思あり。

○冬の山里

熊本縣飽託郡春日村 松本しげ子

朝

鎮守の森を離るゝ明烏の聲に、驚き起き出てゝ見れば、庭の籬の菊は、霜に傲つて居る。厠の南天は、眞赤に色づき、手洗鉢の中に二ッ三ッ氷のはつて居る。前の竹藪に鳴く小雀の聲はさびていと哀である。こゝへ旭かさした様は一寸美麗なものである。時々道を往き來する下駄音高くカランコロンと聞えるのみである。

晝

晝夏の頃には青葉が茂り合つて晝も獨暗かつた鎮守の森も何時しか秋風に吹き散らされ、今では早枯れ果てゝ麓の碁石迄がよく見えて哀れ一入深い田の中には破れきつた案山子が一人で誠に淋しげに立つてゐる。それへ雀が何羽となし止つてそちあちへ糞などかけ恰も秋の時の仇近しだと云ふ様な風情である。

夕

夕日は全く西巒に沒しあたりは薄暗くなつて、夕暮告ぐる山寺の鐘はゴーン〳〵と餘韻山に響きて聞え向ふの山の麓の賤が屋には燈火一つ二つ野路を歸り行く馬の鈴の音遠く馬子の聲と和して遠く〳〵天地山谷に反響するは犬の吠聲である暫くにして月は次第に光を添へて見ても寒むそーである庭を見れば梅木の骨許りのがハッキリと下に映じて居る。（終り）

○流れ

岩代須賀川町 服部貞子

流れ〳〵てつきせぬ流れよ。汝れが代々は、さても長きことよ。さても睦ましきことよ。あゝ、我心のいつか樋はりて捨てしすみれを、乗せてゆきし流れは、汝れが父か。わが袂をこぼれていでしほうづきを、すかしすかしつれゆきたりしは、汝が母ならむ。紅葉にかきたる秋の歌を、君がたつ土橋のもとまでもてゆきしは、汝れが兄ならむ。われにさゝやきかたらひて笑み

ゆきたりしは、汝が姉ならむ。あゝ、その父母兄姉の流れは、今いづくにかやすらへる。あゝ、弟妹の流れよ。ゆかばよろしうとこそつたへよ。さらはゆけ。静かに、静かに。さらば流れよ。

○寒ぎく

日本橋區本材木町　佐久間靜子

床の間にさしたあまりの寒菊を、文机にかをらせんと翁の柴を負つた形の花瓶にさした。

この菊！あゝ！このかりの宿の翁の齢を千年迄と祈るのであろうか？。冷たきかをりは室にみちて……。

あゝこの菊！なぜ我れを愛し、人を愛し、物を愛したわが祖父君を、萬世迄とは祈らなかつたであろう？守らなかつたであろう？。

あゝ今は何處にいらつしやるのであろう？

○冬の山里

廣島縣神石郡永渡村　渡邊喜市

朝顔も枯れ果てゝ庭の垣に咲く霜の花殘て目立つ離のカラスウリ何れも哀れである吹く風は松が枝に聲を立てゝ物の品れは秋こそまされの秋にも一入まさつて實に物さびしく谷の小川は落葉朽葉に埋れて流れの水の音も細く近く北の山邊を眺むれば初雪の谷間に消へ殘つて恰も繪に畫いた樣に美しく見やられる獨哀れに聞ゆるは賤が屋で藁打つ音或は入相の鐘の音ゴウン／＼と地の底迄響き渡る時落ち殘りの木の葉が二片三片バラ／＼と落ちるなどは秋の景色つくらん爲てあらう？冬の山里は悲しとも淋しとも物哀れとも云へない位である

○紅葉一枝

赤坂新町五ノ四十一　河村萱秋子

露やゝ寒き片山里、寺よりの使ならねど、山賤な樵りつる柴に、折り添へし紅葉一枝、色深きにそれ給はれと云へば、暮れかゝる八幡村の秋の夕べに、炊烟縷々として立ち登る、茅屋を指して、彼處にまてる人のありと答ふ、そはおん身の妻にても、あるにやと云へば否、さるには候はねど、とさと赧らめし其顏、さては埴生の小屋に、立ちかぬる煙に咽ぶ、いぶせき賤の男も、戀てふものには、優さしき心の駒を、つなぎ止めかねけるよと、われもそゞろに興を催ほしつ、折りからの微風、斜めに枝をはらへば、ひら／＼散る紅葉、二片三片、うなだれし頸にかゝりつ。

○春のながめ

春の野

富山縣福岡町　庭山直子

野の神の染めなしけん、はるか目の及ぶかぎりは綠りの野邊、菫の床には、己が輕き衣に身をまかせて、蝴蝶ひら／＼と狂ひ舞ひ、雲井はるかの大空には、いとも妙へなる雲雀の聲。

この千ぐさ百草萌えてたる野べを、遊の庭として、眞白なる運動服かひ／＼しく、凧あげに、ベースボールに、その優を競うて、さも活潑に走せめぐる男の兒あ

れば、そよふく風に、輕きもすそをひるがへして、若菜つむに餘念なき小女子もあり
あゝ雄々しく、ゆかしく、また、さらに長閑なるは、春の野べにこそ。

春の川

青柳の糸をひたして、流るゝ野川の水しづけく、魚をとりて、水の面に波をつくれば、釣り糸垂れる老翁のうつれる面かげ、仙人にも似たるよ。
いざ、友の君よ、このきよらけき、しづけき、春の川に、舟をうかべて遊ばゞや。
あゝ、いかに詩趣多き春の川なるよ。

春の山

明けそむる空とともに見わたせば、麓は、うるはしき佐保姫のもすそにつゝまれて、むらさき匂ふ峰巒美しく、山腹にほのじろき櫻の雲に、有りあけの月影いとゞしく淡し。
あゝ、美しき春の山よ

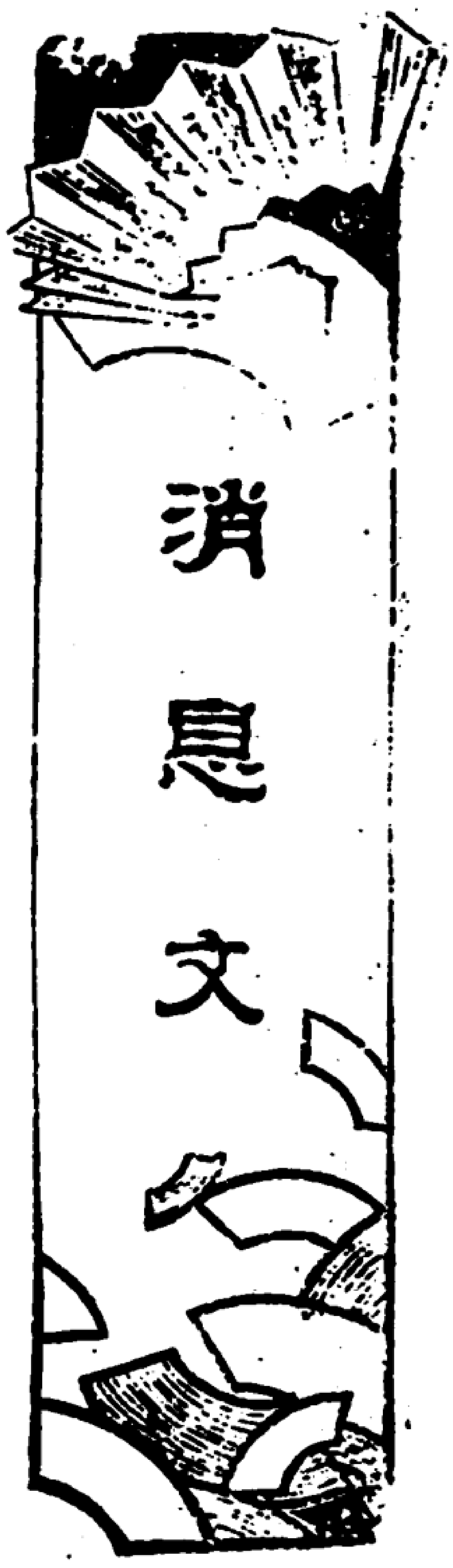
春の海

いりうみごしに、はるかに見ゆる山々、むらさきに、うすくこく見わたされ、碧の海おだやかに立つなみもなく、かなたこなたに鷗の如く、白帆の五つ四つ二つ、ほの見ゆ。
磯邊近う、みどりの松林をこめて、蜑の焚く藻鹽のけむりたなびく霞にまがひ行くさま、さながら繪のごとし。あゝいかにしづけき春の海なるよ。

○新年の山

新潟縣巻校内　しげ子

美しの山よ、嗚呼彌彥の山よ、あら玉の春の初日にあひて、いよゝ美しう見ゆるよ。白き白き雪のかつぎに、それに所々にあやをなす松の綠、天の彫刻いかに妙なる。シベリアの雪野より海を吹き渡る風をも、物ともせず、いかめしう聳ゆる其の姿、天の人の子を諭す鑑なるか。去年の春、かの頂上に登りて、下越の平野を眺め、青き海原を眺め、清らかなる空氣を呼吸して、血を新にし心を爽かにして、神にいのりことのありたるを、早や一年すぎて、また春になりぬ、新年になりぬ。
あな、年改ると共に、自から心を新にし、希望の駒を追ばや、神に祈りしことをとげばや。荒き世に處して、動かざること、かの山のごと、心の清きは、白雪にまねび、操を守ること、かの綠深き松を學ばむよと、山に向へば、しかせよ、しかせよと語るが如く立てり。輝く雪は彌白く、松の綠はいや更に綠に、無限の誠を告げぬ。あゝ美しの山、彌彥山は、神の靈のみ茂りて立ちけるか。彌彥山、永く立て。吾は今はの心かへじ、苔の衣を被るともかへじ。さればよ、永刧に予を守り慰めよ、美しの山よといへば、神の靈かあらぬか、山鳥一羽、こなたに飛びて來たりしこそ、いと嬉しかりしか



塩井雨江先生選

天

朧夜友の許に

千葉縣松尾町　ゆき子

久々御便り玉はねど、御變りはなくてか。妾は少しの變りもなく、日毎學び舍に通ひ居り候まゝ、御安心なされてよ。さて、今宵は月もおぼろにて、誠に春の心地いたし候まゝ、庭下駄突かけ獨り櫻の木陰をそゞろ歩き致し候。花は今や見頃にて、空には月の影丸く、誠に今宵は樂しき夜にて侍る。されど物たらぬは、共に眺むる人のなきにて候。若しも御許樣の此の地におはして、共にかく眺めなば、いかに樂しからむ。あゝこぞの此の頃は、こゝに手をとりて、夜を更かしゝものをと、御なつかしさにえ堪へず候。また御許樣には學び舍の御休みの日には、上野向島などに、親しき御友垣と、袖つらねて、そゞろ歩きや仕玉はむ。その折に、此の田舍乙女の妾を、思ひ出で給ふ事も候か。幼な馴染の君と我、思ひ出で玉はぬ事はあらじと推し侍れど、久々御便りのなければ、御忘れなされしかとも存じ候、妾は、朧月の下に、花を眺めて、御なつかしさにえ堪へず、せめては文にて申し述べばやと、すぐ樣机によりて、此の文認め申候。卷きこめしは、かの若野さくらにて、蕾はそが根元にありしを、一本抜き取りて添へ申したるに候。故里の春を學び舍の窓に、いかにか見給ふ、かく花は卷きこめてまゐらするを得れど、この朧月はいかにかすべき。これのみ心殘りに候。あなかしこ

（雨評）文整ひたり、且つ優美なる才情の愛すべきものあり。

地

兄の戰死を問はれし

に答ふる文

常陸國土浦本町山口方　石崎松子

晴れやらぬ空のけはひに、いとゞぬれまさる袂のしどど、拭ふも今は物うきまで、悲しさやるかたなき折柄に、こま〴〵なる御玉章、いつに替らぬ御やさしさに、いづるはたゞ涙にて候。夕に消ゆる露よりも、實に果敢なきは、人の命。まして、軍國の今日、身は軍人、もとよりかくあるべしとは、かねてより、思ひ設けをり候ものから、何悲しむべき事にもあらぬを、あやなく涙のあふれいづるは、さても甲斐なくめゝしき心に候ふかな。

さはれ、紀念として送りこしゝ軍服の、胸のほとり肩の上、腥々しき血潮に色變りて、打貫かれし腹部の破れ、手にしては、今更に口惜しさ悲しさに、心は遠く遼東の野にはせて、當時の樣を思ひやりては、御國の爲め譽れある戰死と知り乍ら、せきくる涙とゞめ兼ね申し候。まして、病後の姉上の、忍ぶとすれど、えたへぬ思ひは、その青白きおもわに知られて、軒の松風音淋しく、月影淡き夕には、人なき窓に身をもたせて、思ひ沈むを見るにつけ、また今更に亡き人戀しく、我世恨めしうかこたれ申し候。それよ、去月の末にて候ひき、戰死者の遺族とおぼしく、まだうらわかきをなごの、いたいけなる子を引き連れて、打ちしをれつゝ棺の後につきそひゆくを、道ゆきがてら逢ひ見て、哀れの人と袖しぼりしが、いまはた我身の上とはなり候ひぬ。悲しさやるかたなきまゝに、うらはづかしきまて、返らぬぐちをかきつらねしめゝしさ、何も〳〵親しき故とみ許し給ひて、吹く木枯に淋しさ增る此處なる柴の戶、いとせめて賑はし給はり度待ち上げ參らするになむ。

（雨評）文整ひたり、且つ、やさしき情もこもりたり。

人

盆栽を送られし返し

神戸榮町五丁目六十一　中村きく子

今年は雪にさはらずして春たち、垣根の梅も早く咲きねと願ひし物を、天は俄に雲を起し、肌さる計りの風を吹かせ、剰へ、白雲をさへちらしこんとは、あなつれな、然れど梅を慕ふ心は、いやまさりゆきて、心うく思ひつゝも、床の水仙を梅になぞらへて、心を慰め、淋しく暮らし居り候折柄、細々との御玉章に添へて、いと珍らしき早咲の梅の一鉢給はりしかたじけなさ、鶯の初音に勝りてなど申すも、いと古めきてはあれど、嬉しく御禮の聞え様もこれなく候。兼々御父上様の深く御嗜みの道とは承りしが、此花瓣にこそ、日頃御丹精のしるし顯はれて、懐しう眺め入り候、一二輪咲き初めし花、是非のいはん方なきに、風のえならぬ香りを送る懐しさ、匂はぬ草の庵も時ならぬ春心地致し候。御文によれば、明日同窓の友垣うち集ひ、かるたの莚開き給ふ由、此數ならぬ妾にも出席せよとの御事、誠に喜ばしく、さらぬだに久しく御顔ばせも拜しまつらず、御懐しく候儘、いつかは御伺ひに參らんと存じ候折柄なれば、二時とはいはず、一時よりさもらひ申すべく候。さて、此水仙は給はりし梅が香には及ぶまじく候へ共、幾久しくいや榮えに榮ゆる御宿の常盤の松の根じめにもと、御目にかけ候、餘は後日參上、御目もじの折に、ゆるゝ御禮申上ぐべく、先は取敢へず御返し事のみ。草々



（雨評）文整ひたり、且ついかにもすなほに女らしきをゆかしとす。

○妹のもとへ

越後國長岡　清水登志

暖い風、のどかな日和、もう春ですよ、君ちやん相變らず御勉强の由、結構。わたしも達者で、居りますから御安心を。

この間送つて下さつた作文、暇がなかつたので、昨夜始めて拜見。毎度ながら感心致しました。殊にこの度のは、あのうるはしい浦川の景を、御得意の筆で叙事したのだから、活氣はあるし、うつくしいし。讀んで行くと、何んだか故郷へでも歸つた樣な心地がしてホンにうれしかつたの、たゞ終りの方を、もつと氣をつけて書くと、よかつたけど。あそこへ行つて倦が來た樣な書振りが見えたのは、惜しかつたワ。でも、今までの內では、一番の上出來。御褒美として、新しく出來た、女子文壇を送りますから讀んで御覽。さうしてよい文が出來たら、投書する事になさい。少し位の處は向うでなほして出して下さるさうです。

裏の紅梅が咲いたら、一輪か二輪、封じこめ、それについて、歌なり文章なり、作つて送つて下さい。さうすれば、又リボンの御褒美位出ない事はないから。ホヽヽヽ左樣なら、御達者で。

○都の友に

富山縣福岡町　庭山直子

日夜おろそかには思ひ奉らねども、久しく打絕えたりし其罪よ、空恐ろしくて、さらぬだに拙き筆の、いよよたゆたふ心地せらるるぞ、是非もなき。都のおんすまひはいかに。定めし例の道に、御熱心の事ならんと、おしはかられて、羨しうてなん。去年音づれ賜ひしをり、春雨のをかしう降りいてゝ、向の山のうちけぶり、次第に消えゆくを御覽じて、いとも興あるけしきかな、繪筆あらばやなど、のたまひたりしも、昨日の心地せらるゝに、はやひとゝせをすぎぬ。あはれ、なつかしき雪子の君よ。長閑なるこの春のすぎゆかぬまに、はやくおとづれ賜へ。今年は已に繪の具の用意もしてまちはべるよ。かしこ

○紀元節に友を招く文

兵庫縣美嚢郡口吉川村　津根美花子

のこんの寒さ、やゝ緩み候ためか、きのふけふ、庭前の梅花、やう／＼笑みかけ申し候。幸ひ明後日は動きなき大御代の御柱たて給ひし嘉節に候へば、日頃親しき友垣うち集ひ、聊かことほぎのむしろ開かまほしう思ひ立ち候。さりとて、もてなすべき品も侍らねど、御餘興として歌の會にても催したく存じ居り申し候。御招き申すは、例の親しき誰れ彼れに候へば、御心置はあらせらるまじく候まゝ、當日午前十時頃より、賤が伏屋へ玉步まげさせ給ひて、我等がまとゐに、一きはの興そへ給はんこと、せちにねぎ奉り候。何卒御同意下されたく、鶯の初音にもまさりて嬉しく、御返しまちむかへ參らせ候、かしこ。

○折にふれて梅花をおくる

岩代國伊達郡小島村　菅野和子

女子文壇各欄とも、芳名を拜し申し候。御輕妙の筆づかひ、感服の外なく、羨ましう存じ候。殊に和歌三才中に當選せられ候は、御名譽の事と、乍陰喜び居り候。さて頃日はだいぶほがらかな日和と相成り、陰氣な破窓にのみとぢ籠り居り候ては、病の種をかもすべくと存じ候まゝ、けさは裏の田圃あたりに散策を試み候、唐詩うたひありきしなど、よそめには片腹いたかりしならむと今更耻かしう存じ候、

やをら耳をうたかひしは、鶯の一聲にて候よ。あまり懐かしさに、行くともなく足を公園地に進め、身はいつしか梅林の下にイみ居り候。見上ぐれば、雪風を凌ぎし幾百の古木、僅かに笑みをもらしつ、楚々の色香は鶯の羽ぶきに、折々こぼれ來り、えもいはず獨り狂ひ喜び候。

こはこれ、天の惠みと、こゝもる翁に乞ひて、一枝無心仕候。貴姉にも一片封入、御覽に入れむと存じ候を此枝ぶりの惜しさに、下男にもたせ上げ候。是非々々、一首承り度候。かしこ。

○かるた會に友を招く文

新潟縣西蒲原郡巻校内　しげ子

七草の夜のかるたとり面白く、今も其の團居に爭ふ心地して、殊にそなたの淸き御聲、わきて聞えるやうにて、またも近き日に催し、腕ためし仕りたく候。近隣にては、わたし强の者よとてほめられ、亦自らもかうと、いつも〳〵勝をえて喜び居りしに、其夜ばかりは、方々の荒手に出遇ひ、一夜とりかはして、敗北に敗北を重ね、穴もあらば入りたく覺え候て、平素のほこりをも裂かれて、甚だ殘念にはべれど、これまた修練の足らざることゝ、此頃ひたすら其の稽古に餘念なく候。此度こそは、先日の耻そゝぎ度く候へば、あなたも御稽古怠らず遊して、好敵手の方々御連れだちて、倉ひらきの午後、早やばや御出で遊ばせ、すゞしき目のかゞやく御顏に、黑う墨をぬりたく、早う其の日のまたれて候。しかし、また敗北の耻を受くべしや、黑岩樣の新發明のとり方をも、兄さまより習ひしもの、よもや敗北はとりまじ。いな先日の耻を雪がまじと、心强うも其の日の御出でをまち申すにつき、必ずかならずたがはせ給ふな。かしこ。

○親しき友の許へ

神戸市元町　高井小ぎく

いたうも御無沙汰致しつる事よ。さても、其後は御恙在しまさずや。今日は訪ひ參らせんか、明日こそはなど、心には深く〳〵忘るゝ暇とては候はねども、知ろしめす如き性質にて、只何となく皆樣の在します御あたりに參るのが、耻しう候て、かくは心ならずも打ち過ごしゝ罪、何卒惡しからず思召し給ひてよ。

今日は少し無理ならぬ御無心申し上げたく候、うべなひ給はずや、許し給はずや。

かの小學校卒業の折とともに取りたりし寫繪の、今は

あまりに幼なう覺えて、何となく物足らぬ心地せられ候へば、せめて一ひら、なるべく御近きのをめぐませたまへとの願ひに候。かゝる事はあまり好ませ給はぬをも存じての上の御無心に候へば、よく／＼の事と御察し下され、なるべくは御早く自ら御持ち越し下さらば、如何ばかり嬉しかるへきか。此頃の樣に見參らする事の稀に相成ては、行末やいかになどゝ、ゆるしたまへ、吾ながら怪しき迄心ぐるほしう成り申し候。それもこれも、皆御許樣を二三日が程見參らせざりし心のうさの反應に候へば、せめてはあはれとも思して、御暇の折々には、うれしき音信をせさせたまへや。

都の友に

安藝　堀田溫子

御音信も久しく打絶えをり候折柄、いと／＼御なつかしさのあまり、水莖の跡つたなき文もて、御尋ねまゐらせ時候とはいひながら、今年はわきておさむさ嚴しう、隙もる風の身に泌み候て、冬の最中とあやまたれ候ほどにて、いみじう身も凍えなむばかりおぼゆるを、まして武藏野嵐つれなき、都の御すまひ、いかにわびしくぞおはすらん。

さても、三津口の埠頭にて御別れ參らせしは、昨日の如く思ひ侍るに、隙もる駒の足早み、いつしか一年の昔となりぬ。アヽ思ひ出せば、ふり分け髮の幼きむかしより、はらからもたゞならずむつみあひて、春は花かすむほとりに蝶を追ひ、夏は野呂川風に袂をふかして、螢を呼び、秋の夕は、さえゆく月かげのもと、琴を調べ、冬は火鉢のもとにまどゐして、何となう語りあひて樂みゐたるに、あはれ今は心打とけて語ふ友もなく、見るものきくもの、みな涙のたねとなり、すみわたる夜半の月かげ袖に宿しては、いやまし嘆つ言の葉の、茂りに茂るのみ。

御許樣には、今宵の月を如何に眺め給ふらんと、心淋しく、ひそかに袖ぬらし居り候。さぞ御許樣にも、同じ思ひに、しづませ給ふらん。

ねがはくは、遠くはなれあふ身には、只ふみをみたよりなれば、いかにへだて候はんも、ゆめ／＼心をへだてたまはで、折々は都のさまをもらし給はゞ、こよなき幸になんかしこ。

○東都に遊學する友に送る文

靜岡縣濱名郡中瀬村　小川幸子

同じ學びの窓に、螢雪を集めし頃より、萬づのこと他に優れ給ひしは、卒業の式に榮ある賞を得させ玉ひしにても明かに候。承れば、こたび東都の某女學校に入らせ給ふとて、明日なん立たせ玉ふ由、御羨ましう存じ候。こなたにとりては、ふり分け髮の幼き頃より、はらからもただならずむつみあひて、たらはぬ妾を何くれとなく導き玉はりし嬉さ、誠に御許樣をのみ杖とも柱とも賴み、行末ながくお敎をうけまつらむと樂しみ居り候ひしを、いかに御勉學の爲めとはいへ、御身を立てさせ玉ふ御修業とは申せ、今御別れ參する心の

程、たとふべくも候はず、げに交りの深き程、別るゝ折りは悲しきとかや、さりながら、かゝる目出たき折に、少の年月をいかで惜しみ候べき。只此上は、日頃のさかしき御氣性もて、いそしみ勵み給ひて、とく實の玉を得させ玉へ、不束なる妾の申すまでにも候はねど、人は交る友によりて善惡を習ふとか申せば、かりそめにも惡しき習らひに染み玉ふとなく、又暑ささむさのみぎりには、よく／＼いとはせ給ひて、只一とすぢに志す方に勉められ、三とせの春秋、つゝがなくはやく／＼すぎて、長閑けき風に錦の袖をひるがへし、かへりまさんこと、指をり數へて待ち居り申し候。たとへ、都の友の數しげくとも、深山の草木をさげすみ玉はず、谷河の清き流れをくみとりて、折々は都のさまをもらし玉はゞ、こよなき幸になんかし。

○轉居を祝ふ文

埼玉縣寶珠花　伊東礎子

久しく癒えざる心の惱忘れさせんため、ちり深き都を去つて、物靜かなる田舍の山水に親む御心とか。野邊も、山邊も粧を凝して、新來の家を迎ふるでせう。山は翠に、水は清く、陽炎さへ立ち染むる野邊に、里の子相手の摘草も、嘸興ある事でせふ。別けて、花には名所とて、雲と曳き霞と罩むる美しさは、まあどんなであらうと、羨しく思ひます。今頃は庭前の花の香に醉ふて、朧に霞む月影を浴びつゝ、夢のやうに佇むで居らつしやる、を姿が、目に見ゆるやうです。

○北總より文壇に（第二信）

我孫子第二尋常小學校　中村由

心地よき春となりゆき申し候、如何あらせられ候や。この頃は、うす霞たなびく時節に候へば、朝おきても何となう心地よく、をちこちに囀くうぐひす、開かんとする梅の花、小雀のもの語り、これ等は毎朝の例にて、御地にはかゝる愉快なること、決してあるまじと、ひとりほこり居り候。

さて、一月三日のことに候。妾美しき女子文壇見まほしと心つき、とく近所の書肆にまゐり、求めて、小風そよ吹く春ヶ浦の松根に、腰打ちかけて、拜見いたし候折柄、いづこの枝より分れ來たれるにや、一つの木の葉、妾のもてるみ本に、さはりと落ち候。よつて、妾はそこに目を注ぎしに、あゝいかに嬉しからずや、妾のつたなき文あらはれ居り候。此時の妾の思ひ、如何ばかりか。さながら蝶にのりて春の日かげをとびまはる心地せられ申して候。こゝに身は塵の世をのがれて、恰も天の女神に敎を受くる如かりし。

御地にはかゝる心地よきことありや否や、御知らせ下されたく候。

先はほこり顏にて、相みとめまゐらせ候まゝを、かしこ。

○故郷の師に和歌の添削を乞ふ

筑前　花田うらの

此春は、去年よりも、殘る寒さの飢寒く覺え侍るを、

御許様はいかに、障らせらるゝ事もおはせずや。世はなれたる處に轉居致しゝより、面の當り、御氣色伺ひ奉る事も叶はず、隨て、萬のうたかひもとき難く、逝く春の哀れにもまさるは、古郷の戀しきになん侍る。時に此ふもとの池に碎くる月はあれども、峯の老松には錦もかざらず。なれ申さぬ山里の淋しさに、かねて承りし歌日記のこと思浮べ、少しは心の慰みにもと、日々、一筆又二筆と、ものに記し侍りしか、五月餘りも經ぬるに、いつしか、此一綴りとなり申しぬ。もとより習はぬ業の、いと拙くて、御耳にふるゝだに、はづかしさにたへ難く侍れど、かくて止みなは、いつかは上達すべきとて、つゝましさをも顧みず、御添作を乞ひまゐらするになん。

あはれ、せつなる妾が心を汲み玉ひ、拙きを捨てゝ、御墨の匂ひだに加へ給らば、幸は此の上に。

○梅の花に添へて

岩代須賀川町　服部貞子

丸窓のもとの白梅、今日咲き初め候。北の一枝と南の一枝とは、わけてもふりようこそ候へ。ほゝ笑みてのみ、口きかず候へども、北なるは滿洲の兄にと存じ、今一二輪封じこめたるところに候。南にむきたるは、いはずもがな、君の御許。とみれば、梅はうれしげにほゝ笑み候。さらばまた、うつくしのみ歌たまへや。こは梅の心に候ぞ。かしこ。

○故鄕の妹に

岡山縣御津郡石井村　松本もと

お正月がきましたね。芳ちやんも十歳におなりですね。頭の髮もズッと長くなりましたろう、お母さんに結つて貰ふのですか、どんなに可愛らしいだろう、姉さんは見たいです、ずい分寒いですが、お手々かシモヤケたでせう、早く藥をつけておもらひなさい。三月がくれば、芳ちやんも四年生になるのですね。精だして、去年のやうに優等を貰ふのですぞ。優等でしたら、姉さんが、ほうびを上げます。お伽噺の本は郵便で送つておきましたから、炬燵でお讀みなさい。さやうなら、芳ちやん。

○紅葉狩りに友を誘ふ

神戸市下山手通　神山園子

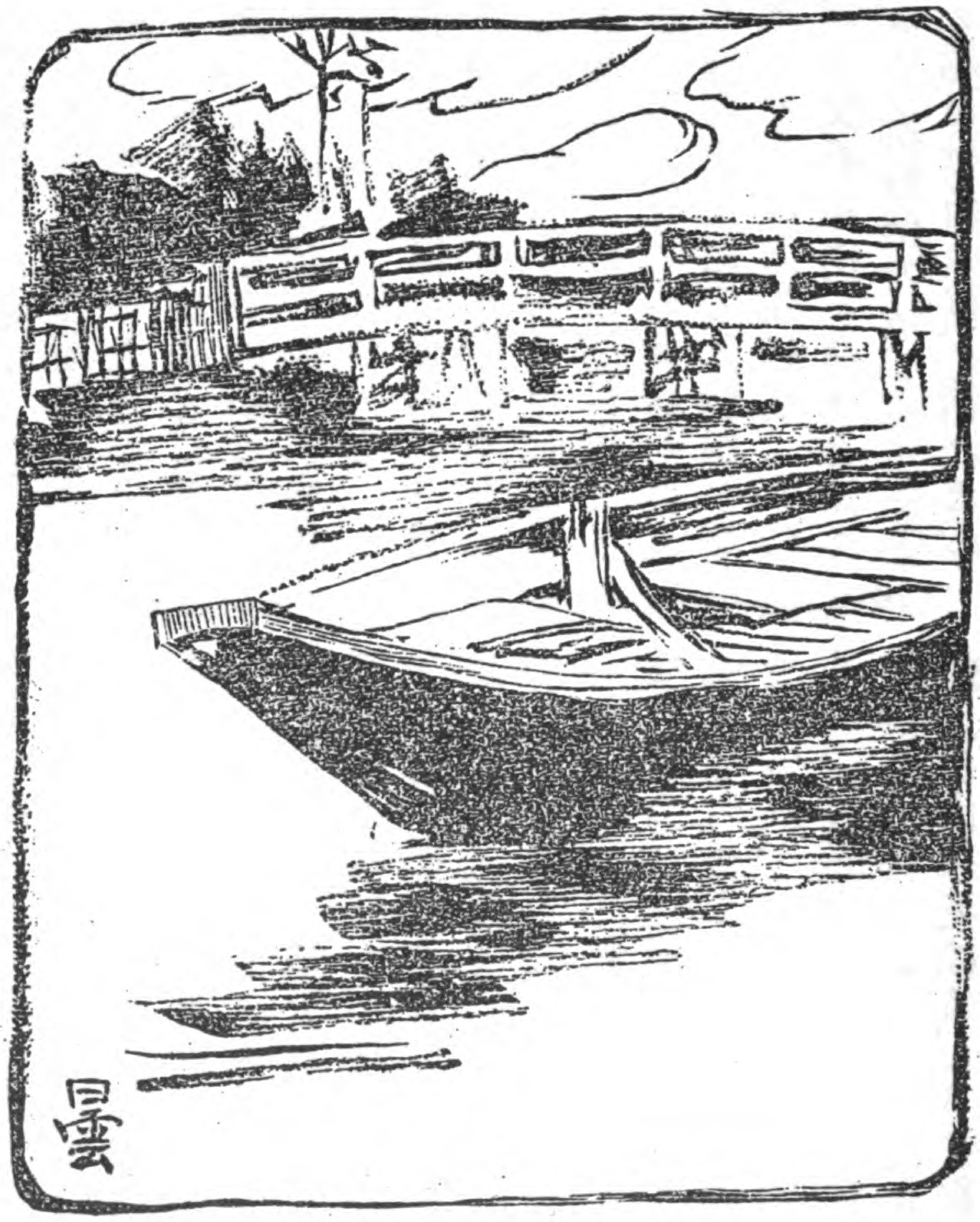
賤が伏屋の一本の楓すら、既に紅葉したる樣、いとうつくしき眺めなるを、さぞ此頃は清水山の紅葉、うるはしう赤き心染め出し居るならんなど、獨りどとしつゝ候ひし折から、今朝綾子さま御光來に相成り、種々談話の末、來る十六日朝五時を期し、清水山の紅葉に一日を暮らさんと約束致し候。思ふ友だち打連れて、樂しく遊び、日頃の欝を散ずるも亦、妾等學生のこよなき快事に候へば、あなたも御同道致されん事、御願申し上げ候。早々不一。

○遊學の友への返し

上毛富岡仲町　今井八百子

久々にて、御やさしき玉章を拜し、御なつかしさ。いとゞ相まし申候。仰せの如く、こよみさてあらたまり、

さしのぼる、日影うら〳〵と、のどかになり行けど、袂ふく風未だ寒く、梅花のさかりいつの頃ならんと、待たれ申し候、御許様には、ます〳〵御すこやかに、まなびの道をいそしみ給ふ由、何よりうれしく御悦び申し上げ候。次に私事相かはりなく、すゝまぬ針うごかし居り候まゝ、憚りながら御心安う思めし下され度く候、最早卒業試験も、間近く相成り候まゝ、一入御勉强遊ばし、首尾よく御卒業の上、一日も早く御歸り遊ばされん事、それのみ日毎の樂みと致し居り候。仰せ越しの袴、ぬひならひの事とて、至て不出來にて、御はづかしく候へ共、御言にしたがひ、小包にて御送り申し上げ候まゝ、御納め下され度く候。尙々寒さの折りから御心して、御身いたはらせ給ふやう、ひたすら念じ上げまゐらせ候。先は御返しまで、かしこ。



○新年故郷の親戚へ送る文

武州橘樹郡旭村　瀧　州　き　よ

あら玉の御ことほぎ、都もひなも同じためしにていまだ鶯も來鳴かず、梅の花も咲きいでぬものから、何となう長閑なるこゝちせられ候。おんもと樣にも打ち揃ひ、喜びの中に御年を重ねたまひにけむと、いと〳〵嬉しうこそ思ひはべれ。妾もつゝがなく、人なみに年を加へて候へば、御心やすうおぼしめし下されたく候。さて、妾まづしき家にうまれながら、幸にも情ふかき御もと樣の御助により、はる〳〵この地の學校へ御入れ下され、不束ながら年毎の試驗にも下りし事なく、殊に人々に優等とほめたゝへられ候は、全く妾の力にては候はず。一重に御もと樣の御恩とはるかに伏し拜み居候。ことに、我父母も、淺からぬ御世話樣に預り、たび〳〵妾がもとへも申しおこせられ候、其ふみを見候毎に、たゞひとり嬉しなみだにくれ居り申し候。いづれ今年四月には卒業いたし、久々

にて故郷へ歸り、御恩のかたはしをも報ひ奉らむと、夫のみ夜ひる心にかけ祈り暮らし居り候。先は年の始めの壽言のみ、穴賢。

○父を失ひたる友へ

名古屋市西魚町　戸田せいう

折柄は梅散り櫻咲く頃に候を、暴露討伐の義軍も追々出發せし事とて、などか花觀るなど閑日の人もこれなく、花徒らに咲き淋しく散りゆくなど、まことに愁殺なるありさまに候ところ、あなた樣には、此頃の世の有樣は如何見給ふらんと、そゞろ御起居の偲ばれ申して候。

新聞など繰り申し候へば、慘憺たる事ばかり目に止まり申候て、いつも泪にくるゝ事に候。此戰爭の勇ましき半面には、國民の血に泣く聲の籠るかのやうに思はれ申し候て、字々と讀み行く眼には、泪に濡れ申し候事に候。此悲しき中に外事でなく、私自ら此悲しき人に相成り申し候。そはあなた樣の御父君の失給ひし事を、耳にせし日に候。あゝ果敢なきは人生に候。人の死する事は天の命とは云へ、御父君には、お年と云へど左程老いたるには侍らず、常に御壯健なりしお方が、一朝芙蓉の花におく露と消え給ひけるとは、何とも云ひやうのなき哀しき事に候よ。

あゝ、もろきは人の命、丁度花の散るやうに果敢なく死するものかと思へば、覺えず暗涙に咽ばるゝ事に候。されど、之も皆人と生れし身には必ず一度はあることにし侍れば、是れよ天命よとおあきらめの程こそ、肝要と存じ申候。あゝ此世は夢には候はずや、先づは。

○山茶花を送る文

越後巻高等小學校內　吉崎れい子

冬枯し草木は、降り來る白雪に埋もれて、白梅の咲きしが如く、をちこちの眺め、いとよろしうなりました。さて、此の頃は香よき白菊も地に落ちて、千草の花の面影も消え失せて、つみ取る花とてなく、實に心細くありましたから、家にとぢこもつて居りましたが、ふと思出して、庭を眺めました處、昨年あはれげに散り果てた山茶花が、降り積つた雪をかきわけて、一寸顔を出し、美しき紅色の花を開きました。餘り美はしさに、手のつめたいのもいとはず、高く積つた雪をふり拂つてやりましたに、今は勢よく咲きそろひましたから、一枝我書室の机に飾りましたに、實に香もよくそよそよと吹き入る風に打たれて、一枚の瓣はひらひらと風に送られます。此の樣の美しい花を、私獨り眺め居りまするは、口惜い事で、餘り色どりもよくありますから、一枝差上申ます。御勉學の事と存じますれば、さぞ御心は御つかれてせうから、御慰みにして下さい。進上の山茶花はさぞさぞ喜しいてせう。餘り念をこめて御勉學は身躰に不爲めと存じますから、次の日曜に差支もありませんかつたら、御遊びにお出て下さい。面白い雜誌も來て居りますし、色々のお話しもありますから、是非とも御出下さい。庭の山茶花も笑顔で待

ち兼ねて居りますよ。

○忠死者への哀悼文

橫濱市淺間町　小林とき子

いにしへの、ふみをかへりみするに、四條畷にはらからら互にさしちかへ、露と消えにし、湊川淸き流の楠の二葉、いまこの招魂臺前にそを追想し、○○君を忍ぶ時は、悲哀の感にうたれ、轉斷腸のいたりにたへざる也。

さいつ日、醜の仇草打懲らさむと、はらから眞心こめて、いさみにいさみて、軍營にいる、類えくさ遼東にすゝみ、君同胞も各所にたゝかひ、忠義はひとすぢ、かへらじとかねてかくごの鐵石心、こゝろをつくし身をくだき、幾千代かけて國を鎭め、大御心を安すめまつらむの心雄々しくふるまひし、いつくしや。

あはれ、あはれ、人の世の儚さ、思へば有待の身、せんだん朽つる秋の風、あへなく屍を戰場にさらす悲壯の最期、君無きかずにいりしと聞きし遺族の袖に、時ならぬ白露むすぼほれ、落すしづくやいかなりしぞ。

しかはあれ、君の名は永く邦家に傳はりてかぐはしからむ、幽明界をことにすれども、よく皇運をまもりたてまつり、かつは戰地にいます兄上をさき／＼あれといたはれよ、謹て哀悼の辭をさゝげまつる。

○姉に婚禮を勸むる文

名古屋市白川町　横地よし

吹く風なほさむく身にしみて、朝な夕な拙へ難き事も度々有之候に、御許樣には如何遊ばされ候や。承れば、此度一夫樣より御許樣へ頻りに緣談の申し込みある由、願うてもなき良緣とこそ妾は存じ候へ共、御許樣にはなほ早しとて、徒に否み給へる由。いづれ一度は緣づくべき女の身の、幸と不幸とは、今の貧富にかゝはらず、唯だ夫と賴むべきの人の心一つに候へば、其心ばへを選む事いと／＼肝要と存じ候。妾は、幼き頃より、一夫樣の心雄々しく情ふかきは、他に得がたき御方と、確く信じ居り申して候。夫れのみならず、御兄弟なく、舅姑樣は今は念佛三昧に入り給へば、行末いと長閑なる家庭の造らるゝ事と存じ候。御許樣にも廿才といへば、尙早しと云ひて否むべき御年にも候はず。殊に裁縫の道も、近來はいたく上達なされ候由。又料理、茶の湯、生花の道までも、深く立ち入り給ひしとか。もはや緣づきなされ候も、さして後めたき事あるまじと存候。さすれば、弟明殿も疾く妻を娶りて御兩親共に思ふ事なき眞の御隱居となり給ふべく候。さりながら、露御心にそまぬを、强ひてとは勸め申さず候へば、よく／＼御考の上、御心定められ度候。とにかく親の情のありがたさに落つる淚を硯にうけてかくなん。かしこ。

婦人は森羅萬象の花の香にして淸香馥郁塵俗の世にも其馨を充す天の奇しき芳香なるかな

ツー、エフ、タウメル



塩井雨江先生選

天

墓側の花

茨城縣久慈郡西小澤村落合　舟橋栗子

雨晴れし夕暮、淸けき氣に驅られて、一人夏の夜路をさすらひたる妾は、今正に老杉鬱たる村寺の畔に立てるなりき、累々たる墓碑、苔蘚厚く閉して、石に當年の俤なく、空蟬さへ此處彼處にとゞまりたる、寂過ぎて哀なり。年古りて半ば枯れたる椎か根もとの、小さき卒塔婆傾きしあたり、雜草離々たる中より、ひときは目たちて咲きいでたる白百合の一莖、痩せて直き、花に無限の幽趣あり。この一時、妾は、形骸なく煩惱なし、いかでまた、墓前に默想せし妾ありしを知らんや。

古人此の下に眠れること、果して幾年、在世の遺功今知るによしなし。風雨多年、苔石の前、たれか敢へて其迷魂を弔ふものぞ。たゞ此の花、時來りて怠らず、年々純白の冠をつけて、主人の音容を忍ばすのみ。而して其のひとり、靜蕭の境に樂しむこと、曾て此に生ひてしより、今日まで、かくの如かりしなるべし。今日以後、また恐らく斯の如くならん。吁嗟、毒ある劍の暗鬪に、五十の年月空しく過ぎて、永劫覺めざる眠につくの時、樂しからずや、融然として不死の門に入る。慟哭と涕泣とを以て送られたる遺骸よ、一年十年、今は其名を口にする人だにあらずなりぬ。白露繁くして殘月淡き朝、朽ちたる骸は、化して平和と悠久とを表はせる、白百合の花となりて咲きいでたり。あゝ此の時よ、かの魂は金色の翼ある女神となりて、薫風馥郁、妙音瑟々たる極樂境に遊ぶらんかな。

（雨評）舊くさき題をとり來たりて、而して、少しも舊きを感ぜしめず。筆に力あり、詞に花あり、文も整ひたり。

地

數學の時間

神戸市元町五丁目　高井小ぎく

與へられた算術の難問題と、昨夜くるしんだ甲斐あつて、たれよりも先に出來て、二度までも、もしやとくりかへししらべて見たが、まちがひはない。先づ是れで大安心と云ふものだ。前後左右、紙をはねる音、鉛筆を走らす音。先生はと見ると、机でひぢつきをして、之れも何か考へて入らつしやる。隣から、〇〇先生の歴史の講義が、面白うもれて來る。今まで賑やかにきこえて居た體操場のあれいの音もやんだ。たれよりもと懸命になつたせいか、大變に頰がほてる、困しい。手をあてて見ると、あつくなつて居る。折から、凉しい風が、さつと南面の、只一枚あけてある硝子まどから、あつい〳〵ほてつた顏をなでゝくれた。下階の音樂、また叱られて居る。あの△△先生が、自分達のうたひ樣がをかしいとて、まねされる、其れが殊にをかしい。熱心に敎へられるものだから、あの高い聲が、あの端の裁縫場に居らうが、理科室に居らうが、中々よく聞ゆる。

など、空想にふけつて居ると、皆樣もう御出來になりましたか……。はつと思つて、吾にかへつた

（雨評）筆に少しの徒らなることばもなく、少しの隙もなくして、よく整ひたる、文章の骨を得たりといふべし。描し來たれるさかひも面白し。

人

九十九里濱鰯漁の一日

下總國野田村　平山みつ子

ほがら〳〵と鳴く鷄と共に遙かに、はーフはーフと細く長く、續けて斷つて、斷つては續けて聞こゆるは、これ磯守の濱呼ぶ聲なりけり。東天紅に、炊ぎの煙白く、ゆら〳〵とのぼる。昇る煙の、軒端をめぐりて、たなびける程に、遠近兒童の征露軍歌唱ふ聲聞ゆ。曙暉うるはしく、麥のみどり一しほ色增して見ゆるに、夜すがら結びし霜の花のすがた散りて、なごりのみ、かた山かげに未だ白う。折しも、濱呼ぶ聲は近うなりて、西にも東にも、あゝ妾が家の側にも、あはれ、色黑き磯守の、つゞれなす衣をまとひ、縄の帯きびしうしめて、下駄もえはかで柿色なせる手拭頰被り、初めは、これも白かりしならん。鶯の谷間につたふ聲あげて、呼ばう態、なれてもあかぬ樂の一つなり。朝餉急ぎて四隣近所、男も女も、若きも老いたるも、籠かき脊負いて、皆磯さして馳せ走る。畔道傳ひに行くもあり。

濱邊に下り立ち見れば、早や一番網のたぐり初められぬ。いとはしき諸の調なれど、いさましなんど、言ふも更なり。まして、金波銀波の漂ふ渺たる中に、數へも知れぬ漁舟は、欸乃のうちに漕ぎ回る狀、都の人に見せばや。汀に網の着きぬる程に、たまてふ網の袋もて荷ひ運ぶ。忽ち潑々たる魚の山は築かれて、我は顏にも漁人の妻の守る、あゝ麗しき銀の山。尙も二番三番の網は、女浪男浪の寄するにまかせて、磯に揚げらる。目もはるけき、九十九里濱は、人もてうづめられ魚もて山は築かるゝなり。やがて、晝近うなれば、酒賣る男、餅賣る爺、菓子賣るおうなもありて、忽ちに賣れ盡すさまのをかしさ。むすび食ひつゝ、引く網綱の先檣の浮びて見えかくれする、こゝ魚網の口とかやいふ。白鷗、さながら風の日に雪の降る如く、いづくより斯くは來つるぞと怪まるゝばかりなり。魚滿ちて網の破るゝことのあれば、すはとばかりに、波をくゞり、浮びつ沈みつ、三角形の網をもて、寒さも知らぬ顏に、すくふ人の何十百人ならん。すくひし魚を守る者、運ぶ者、拾ふ者、盜む者、叫ぶ聲、のゝしる樣、火事場の人にさも似たり。日も漸く斜にして、人の影さへ長うなれば、さしもの銀山低うなりて、眞帆片帆入り來る舟の多きかな。日もとつぷりと暮れ果てゝは、磯の松風寂として、白砂に人の影稀に、只見ゆる、漁火とまがふ舟守のたき火のみ。漁人のまどゐして、夕餉するさまのいと樂しげなるに、今は見まがふばかりの磯守よ、酒樽下げて、太き聲に大漁節、あぶなげなる千鳥足。

（雨評）其の情景は、しかと見えたり。

秀逸

○散る花

神田橋畔　せつけい

夜色沈々、萬籟止んで、四隣闃然、孤燈將に消えなんとする時、破机に對して、過ぎにし昔を思ひ廻らす時は、さても斷腸の事の多かるよ。

アヽ、夢なれや、世の中は。

嵐に散り行く櫻花、……亦再び逢ふべくもあらず。

紅蓮花落ち易く、鴛鴦のちぎり、夢破れ易しとかや。

アヽ、世は實に夢なれや。

思ひぞ起す、過ぎつる年の、而も彌生の春三月、百花盛んに開いて、露は深く、水は皎く、百千鳥囀りて、

人の心も何となく浮き〳〵とする頃と、越路なる長岡の悠久山公園にて、吾が戀ひ慕ふ君と共にちかひ語りし事あるよ。

アヽ夢のやうなる彼公園……。今もなほあれど……

吾が戀ひ慕ふ君は、かりそめの病に就褥し玉ひ、終に運命の神に弄はれ、彌生終りの散る櫻花と共に、かへらぬ旅に出で立ち玉ひぬ。

其後又吾が母上は、君の死を悲むの餘り、病を得て、又同じ旅路に立ち玉ひぬ。

アヽされど深くは言はぬ、涙の種なる者を。

アヽ世の中にうたてき事は數あれど、今の妾ほど幸なく果ない者は、他に有り得べしとも思はれず、アヽ。慕はしき母には捨てられ、戀しきかの君には先立たれ、思ひ出多き學舍の窓を打つ風の音、深夜の蟋蟀の泣く音にも、あるは浪の音、雨の音聞くにつけても、昔を偲ぶ愁の涙の乾くまぞなき。悲しさも堪へ忍び、物學びに勉めたるも、是れ皆な母上に心安く事へまつり、又彼君と共に月を賞し花を愛で、涙も共に、暖かきホームを作らんとてなりき。アヽされど、其慕はしき母上は、今は世にましまさず。其契りも淺からぬ戀しき君は、又世になく、アヽ雨の夕、花の朝、浪の音、松の風聞くにつけても、たゞ悲哀の涙に袖を絞るのみなり。さても、斷腸の極みなる哉。



アヽ思へば、何樂みに此塵の世に永らへん。アヽ、何思出に學問出世を望まんや。アヽ、吾れも同じ枯草の苔の下に母上と彼君と只今埋もれ居らんには。今更かゝる憂愁はあらざらんに。アヽ、黄泉何處なるか。一度行けば、落花の如く、流水の如く、再び歸り得べからざるか。

アヽ吾れは既に失戀に泣く精神の死人となりしなり。

アヽ吾れは行かん、母上と彼君の在ます樂天の蓮の

台へ。彼君の在ます國へ。吾は既に業に此濁世に居るを厭ふ者なり。猿の臂の如き不義の手に、貪婪の爪逆だて、姦譎の兩脚を備へ、弱き者を虐げ、權門に伏し低頭して、其勢利のためには、奈何なる苛酷の無情なる事もなして、尙ほ日も足らざりとなす、毒蛇、夜叉より醜くき形を備ふる人間の巢窟は、最早住み飽きぬ。暫しも早く彼の樂み多き天國に行き、彼君と共に蓮の台にて、樂しく母上に事へ奉りたし。吁、君よ、逝きにし君よ、靈あらば吾れを此濁世より救うて、此苦境を去らしめ玉へよ。吁、君よ。

アヽ、世の人よ。吾を戀の奴隷なりと笑はゞ笑へ、罵らば罵れ。猜疑の眼を輝かし、尖き殘忍の牙專橫の鼻高く、厚き唇、邪淫、嫉妬の口を以て謗らば謗れ。吾は神聖なる、戀の爲めには、如何なる毒舌をも、吾は甘じて受けん。

アヽ世の人よ、君等、勢と利とを以て、吾れを導かんとも、吾れは斷乎として、勢に結ばず、利に黨せず、吾は、一の光明と一の聖神なる戀、其者と、生死を共にせん。アヽ、世の人よ、吾を愚かなりと笑はゞ笑へ、罵らば罵れ。罵詈讒謗何かせん、吾は甘んじて受けん。落花よ、落花よ、我れは落花のあとを追はんのみ。

（雨評）其の心は、しかときこえたり。されど、や、殊更に作りたる如きあとの見ゆるを惜しむ。

秋のすさび

神戸市下山手通六丁目一三四長谷川男內　神山園子

心地よの風、優しの風、したはしの風、梢梢を音づれて、いまだ色つかぬ木の葉の、心あるが如く、無きが如くに、サラサラと落ち來る、あゝ、之れぞ秋の初めや知らする立田姬の御使になんありける、

垣根にからめる夕顏の、蔓も半ば枯れて、咲き遲れにし花の一二輪、心ぼそくもゑみつるさま、いと哀れに松虫鈴虫轡虫など、何を喞つぞ、草間の露になきしきり、心なき身にも、秋のあはれは知らるなり。

月冴えたる深夜、親や尋ぬらむ、子や求むらん、寒げに雁が音聞えて、千里孤客の腸を斷たしむ。

天高くして淸き夕、中空に懸る明月に對しては、そゞろなき人の面影の偲ばれて、うたゝ月日の過ぎやすきをなげく。

寂寞たる朝、細雨蕭々とふり來りて、バサリバサリと桐の葉の力なく落つるを見ては、やがては、瑤落の風に散り行く人の子の運命も、かくやとばかり思はれて、

何となう浦悲しくてなむ。
あはれ、さみしき秋よ。

（雨評）優美なる詞は愛すべし。

○日誌の一節

福島縣耶麻郡奥川村　杉原孝子

七月廿七日（舊六月十五日）　木曜日　前曇后雨

常さへ曇り勝ちなるに、今日は午頃より、むら雲のまよひ唯ならず、空のけはひ最と恐ろしく、今にも夕立の降り來たらんとする有樣なり。人人は日ごろの雨天に倦みてあるに、又も今日は雷雨になるべしとて、うちなげきつつ空のみ見守りて居たり。さる程に、はるかかなたの峯の方より、翠なる大空に墨汁にても流したらん如く出て來たり、狂雨は南風を追うて斜に降り來たれり。其勢甚だ烈しくして、つぶてをなげ打つ如くなり。

あわてゝ乾草取り入るゝ女もあり。向ひの芝生に遊び居りたる童の、なき惑ひて、ひたぬれに濡れて、馳せ歸るもあり。小鳥の我先きにと塒に急ぐもあれば、蛙の喜ばしげになきさけぶもあり。今日は舊六月十五日にて、隣村のお祭なれば、參詣に行かんとて、裝ひ出てたる人々の、途中より、裳を高くかかげて、馳せ戻るもあり。其有樣、をかしくも亦あはれなり。

雨はいよいよ大粒に、いよいよ烈しくなりて、篠つく如く、大甕をかへしたる如く、軒よりそそぎ落つる雫は、名たたる那智の瀑布もかくやあらむと思はるるばかりにて、砂動き、礫鳴り、瀑水踏々として、其音いとかまびすしくまた面白くして、形容しかたし。稲妻しきりに閃くにつつきて、雷おどろおどろしく鳴り響き渡る。

かかること暫くなりければ、小川の水、一時に增りて、濁流奔騰し、堤はきれなむばかりなれば、これを防がんとて、走り行くものあり。小溝の水あまりて、田一面、川の如くに水つけば、稲を害せらるべしとて、板をかき行くものあり。むしろを持ち馳せ行くものあり。其忙かはしげなる有樣、形容すべくもあらず。我身も徒にあるべきならねば、出てて手傳せまほしく思ひたり。

日は暮れんとするに、雨は止むべき氣色だになく、小川の水は、いよいよ增り、架せる橋橋、流れぬはなく、川邊にある田畑は、皆ひたされぬ。

されば、老人等は、昨年の凶作さへあるに、本年もかく水害にかかれば、如何にして暮すべき、餘年なき我我、かかるうき目に遭ふは何事ぞとて、悲めり。雨はますます降りしきりて、いつ止むべしとも見えざれど夜は更け行きたれば、臥し戸に入りぬ。

（雨評）　文はすなほに整ひたり。されど、別に新しきところなきを惜しむ。

○貧　家

神奈川縣都筑郡新田村　平本きよ子

鎮守の森の梢ちりはてゝ神さびし祠もあらはに、山寺の夕暮つぐる鐘の音、無常をこめてひゞくも、さびしや。樵夫の家路をさして歸る足の運びも、塒もとむる鴉の聲も、せはしげなる、これや山里の冬の晩景。村はづれにたてる一軒家、たてると云ふは名のみにして、柱よろぼひ、壁くづれ、屋根の藁くちて、いと危げなり。かくてもなほ人の住みてにやとたちとまる程に、苦しげなる咳嗽の聲して、火はともされぬ。反古張のすゝけし障子は、無殘や、骨折れ紙やぶれて、風のふきいるまゝに、ともし火の影、明滅として、一しほあはれを見せたり。あまりのあやしさに、やれまよりひそかに伺ひ見るに、六十路には二つ三つこえたらんと、思はるゝ翁の、いかなるいたづきにかゝれる、ひげまくろにはえ頬骨たかくいでゝ、なかばは此の世の人にもあらざるすがたなり。されど、何となく、賤しげならざるけはひの見ゆるは、深きゆゑよしあるにかあらん。やゝありて、くぼみしまなこを見ひらき、あたりをみまはし、菊子〳〵と呼ぶさまなりしが、又せきあぐる咳嗽に、もだえくるしみて、今はまたくつかれてけん、身うごきもせず、たゞをり〳〵細きためいきをもらすのみ。あはれ、菊子と云へるは、此の翁の娘にや、はた孫にや。蘭奢の薫たきこめて、玉のうてなにあたゝかき夢むすぶ姫君もあらん世に、月ももり雨ももるらんあばらやにありて、いたづきにかゝれる親のみとりにいそしめる菊子、なも家庭のたのしみを知るらやしずや。後四五日も經ぬまに、ひと日、雲のふるまひたゞならず、豆なす雨のはらはらと落つる景色おそろしく、しかも、あらき風、にはかにこれにそはりて、吹きあれぶ音すさまじく、家々の瓦はとばされ、今にも倒れんかと危みゐたるに、我が家はからくその難をまぬがれぬ。思はざりける一夜のあらし、彼のあばらやには、いかに吹きすさびけん、心もとなき

まゝに、いそぎおとづれしに、思ひしにたがはず、今朝の風にもろくも吹き倒されて、いたづきにかゝれる親も、みとりせる少女も見えず、いかにしつらん。家もあらん、折もあらんに、かゝるまづしき家に、かつ親のいたづきにかゝれるをりに吹きあれけん科戸の風しろしめすらん神の御心こそ心得ね。玉の緒のみはつなぎとめつるや、いとおぼつかなし。かたへにたてる一本の柳、影やせて、夕鴉の聲また心ありげにあはれふかし。

（をはり）

（雨評）多少の涙は見えたり。筆のなほたど〳〵しきを惜しむ。

○紅梅

埼玉縣浦和の里　關　香　毅

一

「姉樣！是を進呈よう、美しいてせう、」

妾は紀元節の式をすまして、學校から歸つて來まして、やさしい春の日のさし込む、四疊半で、袴を脱いでますと。弟の武二——今年八つになる——が、綠に紅梅の花瓣を通したのを持つて來まして、斯く言ふのです、

妾は此のしほらしい言ばを聞きまして、思はず、ホロリと紅涙をこぼしました。

元來、武二は、日に二度位は、「兄樣は何時凱旋るの、姉さん！」と尋ねますから、妾は「もー直きにつて言ふのに、眞にしつこいね、武ちやんは」と、叱かつたものですから、今日は武二は、暗にその謎をかけたのでせうと思はれて、

「武ちやん、もーこんな散つてるの。ぢや、兄樣も近日の中にお凱旋りになりますよ。家中で迎へに參りませうネー。」

胸のはり裂けるやーな思ひをして斯く言ひますと、

「あー、僕は嬉しいな。姉さん、僕には大きい旗が持てないや。隣りのおぢさんに……うむ、いや、僕が忍耐して持つて行かう。兄樣驚くでせうネ。そして、御賞美も屹度下さるネ。何だろーかしらん。露西亞の國の寶物でせうね。僕は隣家の健ちやんなんか伴れて行かう。ぢや、友達にさう言つて來よう」

と嬉しさうに出て行きました。

あゝ、妾らが知らせないからでもあろーが。武二は未だ兄樣の戰死を知らないのかしら……と、妾は、又も涙をしぼりました。

二

妾の兄樣は、騎兵少尉でありまして、昨春二月中旬

に出征なされました。先年父樣を失ひまして、病身の母樣と幼弟一人の外には、何もない妾には、兄樣が柱とも杖とも思はれたのですが、出征は一家の名譽——國民の義務、何を不覺を……と我が心を叱して、未練の涙を抑さてお送りしました。その折、武二は、「兄樣何時凱旋り」と尋ねますと「お庭の紅梅が咲けば凱旋るよ、母樣と姉樣などゝお迎へに來てくれ」と、笑ひ乍ら申されました。

兄樣は、九連城占領以來、遼陽陷落、沙河大會戰に到ります迄、いと／＼壯健で在らしやいました。

月日は流水の如く去つて、年も新たまりまして、庭の紅梅も咲くやーになりました。それですから、武二は子供心に兄樣のお言ばを信じまして、毎日、兄樣の歸期を妾に問ふのです。あゝ…………………。

一月廿八日は、何といふ日でせう。兄樣は、沙河地方で、暗夜に斥候に參りまして、數多の敵に攻圍まれまして、已むなく自殺せられて終ひました。妾共の方には、既に通知がありましたが、事は秘密になつてましたが、今日は——紀元節の日——發表せられまして、東都諸新聞は勿論、埼玉新聞には「斥候の勇敢、名譽の戰死者本縣人松山操」と題して、二號活字で記されてありました。けれども、武二は未だそれを知らないのです。

三

黑塀の內際には、三本の梅樹がありまして、右手の方二本の紅梅が兄樣の愛でられましたものです。昨今はそれがヒラリ／＼と、靑い苔蒸した飛石の上に、點々散るのです。此の紅梅の前には、亡父の秘藏せられました、霜降りの根上り松があります。その左手の花壇には、鉢植ゑの福壽草などもあります。妾は今、此の廣くもない庭を、夕陽浴びつゝ、そゞろ歩きしてをりますのです。

「あゝ——此の松は父樣の紀念となつたが、亦此の紅梅も、兄樣の紀念物となつてしまつたのか……」などゝ思ひつゞけて居りますと、

姉さん／＼、兄樣は名譽の戰死だ。お隣りの健ちやんの兄さんが言つた。眞だ／＼。これこゝに、明瞭と「松山操」と、書いてあるよ。姉さん——。」

と新聞紙の兄樣の姓名だけを、切つて持つてきまして妾に見せるのです。妾はもー耐へ切れなくなつて、梅の根下へ泣き伏しました。すると武二は。

「姉さん——どーしたの……何故泣くのよ——……仇

ア……伉ア……僕がとるよ、姉さん――」。と申すのです。まア何といふ健氣な言ばでせう。どこ迄も無邪氣で、姉なる妾を、却つて慰め、宥めて吳れるんですもの。どーして妾、泣かずに居られませう。「武ちやん！と妾は織手に、武二を抱き占めまして、再び泣きくづれてしまひました。（完）

（雨評）心は言ひ得たり。されど、何んとなう涙の足らざるやうおぼゆるを惜しむ。



○溝　萩

麴町區土手三番町　岡田刈萱

『お前は何を云うのです。姉さんを可哀想と思はないかい、これ武男！、解らないつて餘りだよ』。と僕は伯母さんから叱られた。

それで、伯母さんは、昨日から泣いてばつかり。餘程の泣き虫だよ。

『姉さんを可哀想だと思はないか』つて、何故だらう、何がそんなに可哀想なのだらう、僕には解らないよ。朝から晩迄引きりなしに、種々な人が訪ねて來て、いそかしくて自由に遊べないからか知ら。だつても、先刻脊の高い、ハイカラな新聞屋の小文さんが來たとき、姉さんは笑つて話して居たでないか。

僕あちやんと見てたんだもの、よく知つてらあ。嬉れしいから、笑つたんだ、然うだ、姉さんは屹度うれしいんだよ。

僕だつて、僕だつて、嬉れしいや。

名譽の戰死者！

吉岡少尉!!

誰だつて知つてるさ、今度遼陽で、すばらしい働きをして、戰死しちやつたんだもの。

あれは僕の兄さんさ。

なに、うそなもんか、ほんとだよ。

僕の姉さんは、そのお嫁なの。

まだね、お客樣をしておひろめはしないのだけれど、兄さんが戰地へ出發つ前に、ちやんと御祝言は濟ませちやつたの。

僕は、これから、大道を大威張りに威張つて歩くんだよ、うれしいなあ。

此次の戰爭ごつこでは、僕が吉岡少尉さ。弱蟲の泣き蟲の大野なんか、露西亞の大將て、恰度好いや。今に捕虜にしてやうんだ。見てやがれ！

○烟管物語

岡山縣御津郡石井村　松本もと

私は烟管でムいます。私が生れたのは、四百年も前で、故郷は陸中の尾去澤です。最初私はきたへにきたへ、磨きに磨かれて、立派な鏡となりまして、京の美人の手に渡りまして、朝な夕な、其お姫樣の顔を映して居りました。それから、少し後になつて、秀吉が方廣寺の大佛を立てた時、私は寄附せられて、大佛になつたのです。そして、善男善女幾萬人に拜まれたのです。それから、徳川家光の世になつて、とう／＼寛永通寳といふ錢にせられ『文』といふ字のついた着物をきるようになりました。或時は、富を誇る人の手から飢ゑたる孤兒の手に投げだされ、或時は、田舍の乙女に清い心捧げて、鎭守樣の賽錢箱に投げ入れられ、或は落されて、掃き溜めの中にも居り、或は庫の中に入り、日本國中津々浦々、北は蝦夷松前から、西は筑紫のはてまでも、人より人の手に、今日は西、今日は東とさすらひました。ところが、今からつひ二年程前、今のやうに烟管にせられて、暫く店頭に居りましたが、何のご縁か、當家の御隱居に買はれたのであります。これが私の歴史。

○異郷の夢

神田橋の畔　原　雪　渓

坊、お前お雜煮を澤山食べて、お父ちやんと追羽子をしよーね………」。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

鎭坊お前受け損つたから、其罰いや罰としてお白粉をつけてやろう」。

今度父ちやんが失敗したから、坊がつけてやろう」。

これ坊！こんなに澤山つける者があるものか、ハハハじや今度坊が失敗つたら乃公は顔中へつけてやるよ………………ハハハ…………」。

好いとも、坊は今度父ちやんになんか負けんから」。

白雪が頬へひやり。

おー坊？雪が降つて來たは」とて、氣づけば、夢なりき。吁。是れ、南柯の一夢、將軍は尚ほ天幕内にありし。

將軍は奮然起ち上りぬ。

彼方丘陵よりは、曉の空を破りて、一發ドドドン——。忽ち腰間の秋水を右手に、鞘を拂ひぬ、刀身を檢せば、純白なりし、霜を以て。

天に聲なく、地に響きあり。其が刹那の將軍が感想、

奈何なりしか。
悲！哀！愁！悽！壯？

○軍族家庭の新年

松江市雑賀　美談　麻子

兄君出征の途に上ぼられてより既に年歳、櫻散り菊枯れて、玆にまた春を迎へぬ。さわやかなる庭、竹垣の內に、早咲の紅梅一輪二輪、雪を欺く水仙、珊瑚の如き南天、何れ劣らじと美を競ひ婿を爭ふ中に、獨り碧綠の松は、超然として立ち、泰然として益々其節操を示す。日章旗は、形ばかりの門松の影より、そよぐ朝風にひらめけど、年賀の人の足音も間遠なり。六疊の兄の書齋には、常ならば醉ひてのうた聲のもるべきに、陸軍少尉の略服を衣させ玉ふ寫し繪、嚴そかに床に安置せられたるのみ。沈々として四面聲なく、白晝老鼠の鏡餅のあたりを悠然と徘徊するさへきこえて、たま〳〵弟陵一が、洋刀を佩き、竹馬に跨り、進軍の喇叭、號令をまねぶ響あるのみ。出入もの靜かに、勝手口より入り來り年賀を述ぶる人、先づ戰地よりの音便の有無を問ふ。酒を進むれども飲まず、怱々として辭し去る、これ妾が家の新年。

○猫ちやんの日記

埼玉縣比企郡小川町　岩田ふさ

一日、(大日和)、きり々々との音に、目がさめ、何だろうと思ひ、行つて見ますと、若水汲む音でした。私は、昨日母ちやんに敎はつた顏洗ひをしましたら、お竹(下女)さんが、目を私のより大きくし、「お正月だと云ふに、雨の降る呪咀ひしなくもよい」つて、餅の樣な手て、こづき、何喰はぬ顏して居る。本當に惡くう御座いました。今日は元日と云ふ處から、人が大勢來て、私の居る所は少しの間もありませぬ故、竈の中へ潜り込んで居ました。竈も奇麗にしてある。すると、お竹さんが、頭の上へ黑いものをかけました。變だと思つて居ると、今度は赤い物を、口の方から入れました。其內に、あつくなつて居られぬ故、飛び出そうとすると、折角母ちやんに奇麗になめて頂いた初着を、臺なしにして仕舞ひました。私はもう口惜しくて口惜しくて、お竹さんに喰ひ付いてやろうと思ひましたけれど、ならぬ堪忍をして、座敷の方へ走つて行つて見ますと、今坊ちやんや孃ちやんが、お召換へして居られます。あまり羨やましい故。坊ちやんの羽織の紐へぢやれてやりましたら、今度は奥さんが、恐い顏して、白眼つけましたから、こづかれぬ內にと、逃げて仕舞ひました。そしたら、私の好きな、お魚の入れてある箱をあける音がしましたから、急いで行つて見ますと、坊ちやんが今大好きのお魚を澤山下さる處で、私が行くと、「玉よこい〳〵」となでて下さいました。坊ちやんは誠に私の命の親です。一生懸命食べた處、それは〳〵おいしいので、ほつぺたが、落ちさう。今日は一日御馳

走になり通してした
二日、(上天氣)、朝から御馳走、私一人で食て仕舞ひましようと思つて居ると、ぢよん(犬)ちやんが來て食べやうとしましたから、とう〳〵喧嘩になりました。私は何でも一ばんやはらかい所をひつかいでやろうと思ひ、鼻を思ふ樣ひつかき、一目散に裏に逃げ行き、松の木に登りお尻を出して、べちや〳〵はたきながら、笑つてやりました。處が、可憐そうに、さすがのじよんさん、どうする事も出來ず。私を白眼で、わん〳〵なくばかり。私にはいたくも痒くもありませぬ。丁度御覽なさつて、「やあ、ぢよんが、あんな小さい玉に敗けた。もうジヨジユン(旅順)も落ちると大喜び。處へちん〳〵、號外々々、旅順陷落の號外……と來ました。私嬉れしくて、飛び廻つて。居ると、坊ちやんも大喜びでした。

○小猿

越後長岡　清水とし

○

靈氣充てる雑木林に、小猿手をくむ秀才ぶり。世の浪を知らず、浪の恐ろしきを知らず。出てゝ迷ひぬ、塵ふかき都路。
アヽ、かくて、うらぶれし身の、かへり見れば、落葉林になくは梟。拾ふべき木の實もあらず。朽木枕のまどろみは、時雨する音に破れて、やせし手足の、寒しとも、さむし。

○

戀姫のかもしけむ、紫の甘酒に、醉ひしれて舞ふ、やれ庭の小猿、何等の幸なりや。見よ、熱したる彼が面は、赤うして、眼はかゞやきぬ。
木の實拾はず、親養はず。狂ひてのみ。然りたゞ狂ひてのみ、今日も昨日も。

○

こけむす巖の、崩づれむとして、しばしを、ふかきふかき碧潭に、のぞめる頂。香り高き百合の一本。そは詩に因みあればとて、小ざかしの小猿。手折らんとてたどり行く、こけの小道のつゞら振り。いくまがりのそのはてには、用意なき身の飢えて、こゞへて。今更詩の神を恨めど、罪は詩の神にあらで、才なきに試みしその身にあり。泣けばとて、さけばとて、答ふるはたゞ木だまのみ、アヽ木だまのみ。

○初旅の一夜

岡山縣御津郡石井村　松本もと

故鄕をはなれて五里、これ三蟠の汽船宿に、今宵妾は宿れるなり。夜はいたくも更けぬ。海面一面に黑うして、汽船の舷燈二つ三つ赤う輝き、港の町の淋しさ、旅なれぬ身にしみて、思ひは千々に碎かれぬる。村はづれまで送りくれられし父上母上は、今いかに。弟はいかに。思へば、何やらん悲しき心地して、涙さへ出

づるなる。
嗚呼思ふまじ、明日はとく起きて、汽船にのり、東の都に向ふなり、いでや床に入らめと、燈火細うして臥すれど、なほ、こしかたの事ゆくさきの事ども思はれて、眠り得ず。折から、近く船の汽笛ボー〳〵と、靜けき夜を透して聞えつ。おゝ妾も、明日は船出するなり。さらば、父上母上よさきくておはせ。弟よ、惡戲して怪我なせそ。
萬籟死して音もなし。

◎兄樣

長野市狐池　安孫子美子

小さな手に誠をこめて、おぼつかなくも縫ひました燃え立つやうな、緋メリンスの寫眞帳に挾まれて、笑ましげに、床の間の柱に佇んで居りまするのは、可愛らしい五年前の敏雄兄樣と、美さん私とでございます。當時二人は限り無い行手の、うれしい想像に、醉つて居つたのでございませう。如何にも其眼は、希望の色に輝いて、こぼれるやうな笑顏は、確かに、人を引き付ける魔力がございます、
紫色の長いリボンが、兄樣のお持ちなされた、美しい詩集に打ふれて、居りますのすら、私は見るに堪へられませぬのに、尙も、其手と手は、いつまでも、はなれまいと、暖かな、血汐の波は、響もなく相通うて柔かに握られて居るのでございます。
二人は、永久に、此寫眞帳の、天地に、笑ましげに並びあつて居りますが、其お優しい、現世の、六尺の、お身體は、再び此世に打觸れ、相見る事は、出來ませぬ。
お聞き下さいませ、私の兄樣は、若い有望な、少尉として、南山に、戰死いたされましたので、眞に短い生涯でございました、オヽ兄樣の、此お胸の、あたりには、實に榮ある金鵄勳章の美しいのが、かゞやいて居りますのに、私は、今しほろりと、なやましげに散つた。花瓶の白梅を、匂ひ、其まゝ、色、其まゝ、此お姿の、お胸の間にかざしませう。

◎家庭日記

東京　柳　鼎子

十二月十日
今日は、なんだか、いやに曇つて來て、しん〳〵寒さが、身にしむ。なんだか雪模樣だが、明日だけは、何にも降らしたくない。いよ〳〵主人の御出征も、明日と、なつた。もとより覺悟したものゝ、國民兵まで、召集せられるのだから、もう少しは、猶豫も與へて、くださつても、よささうなものだ。せめては、來年の正月なりとも、家内團欒の内に、御雜煮位なりとも、祝うての後に。あゝ思ふまい〳〵、御國の爲め、君の爲め、我身我家を犧牲にして、あの通り勇んで入らしやる。今日は國許から着いた、先祖代々からの名刀を

持つて入らした。今朝も、此刀で、露助の首を斬つてやるのだと、仰せてあつた。さて、夫はあの通りの皷心で入らしやるのに、なにを女々しくはと、自分で自分を叱咤しても、倘涙は胸の關門をやぶつて、ほろりほろり。

あゝ、一郎も千代子も、ああして、無邪氣に遊んではをるが、明日からは、家がどうなるだらう。餓飢死をしやしまひか!!!

舅姑は、しきりに、三疊て内職をして入らしやる。十歳を頭らに、七つ、五つ、三つ、の幼子は、破れた汚れた、着物をきて、表てで遊んで居る。主人は明日の出征のいとまごひにと來る客と、しきりに、話し聲笑ひ聲はきこえるけれど、其笑ひも、一種平常にかはつた、憂ひと、悲しみの凄しい分子が、うらには包まれてある。やうにきこゆる。夫は表面ては露ほども、そのやうな樣子をお見せに、ならないが、此の貧しい、慘然たる家庭の裏面を、つぶさに御考へになれば、片時も、安き夢路に入ります事がないと思へば、一層涙は禁じ得ない。

客は出て、入り頻繁。親族、緣者、知己、朋友、鄕先生まで、狹まい一室にこぞつて、出征前一夜の別の宴を開かれて居つた。或は戰捷談、功勳談と、談笑愈盛にして、知らず〳〵夜は深更に及んだ。四隣寂寥として、雨のそぼ〳〵とふつて居る。一番鷄は明けを告げて、つひに一眠もとらずに。

十二月十一日

いよ〳〵出征當日となつた。何と思つても、致方がない。庭前には、紫白赤の旗は、旭日の風に飜つて、町内の老幼男女三々五々集はれて、居つて、嬉々談笑。主人は昨夜の疲れに、氣分あしからずやと、一同に慰められるに、何に氣が張つて居るからとの答へ。即ち、勇み立つて、赤痕點々とした、日清戰爭の時に着用した服をとり出て、之をきて十年の昔旅順の山に昇つたなぞとの話し給ふ中に出で立つお姿は、さすがにををしき武士の面かげ、軍服軍帽に帶劍いさましくさらばとばかり、はや門を。再びとだに家をかへり見たまはぬ、夫の後影の見ゆる限り、兩親四人の子供等は、見送りて、歸りたる後の家居は、火のきえたる如く、寂又、寂。

◎課餘漫筆

西駿志太郡梨の里　藤池　葵花女史

◎子を見ること親に如かずとは、誰が言ひ出せし僞にや、世の人、愛といふ雲に遮られて、心の月も曇り、飛だ見違をなせるが多し、恰も色硝子もて覘けば、一物として、或は靑に紅に見えざるなきが如し、されば眞に子を見るの眼持ちたる親は少なからざるべし、己が不勉强に落第せし學生の親が、其の教師を恨める、己が不正直に解雇せられし小僧の親が、其主人を憎める、又は其子が柄にもなき大言を吐けば、頻りに之を

眞にうけて人に自慢する者、我子のみはと油斷して、徒らに學費を欺き取られ、飛だ放蕩學卒業生をこしらへ上る者など、皆之れ其眼の明かならぬを證するに餘あり。シエーキスピア曰く、己れの子を知るは賢父なりと。眞に然る哉。

◎表に似非仁義をかざりて、裏に陰險暴惡なる心を抱ける輩こそ、面憎くけれ、昔の誰やらは、僞君子たらんより寧ろ眞小人たれといへり。内心は學識なく智能なきに、徒らに外貌をのみ飾る者こそ、笑止なれ。知らずや、錦を着ては絅を尙ぶとさへいふものを。

◎人の慾は、食と色と睡の三つと、古來相場の極つて居るに、近頃は外に一つ金といふ慾の增進せしぞ、恨みなる。彼の軍事界に教育界に、醜聞の甚だ高かりしも、亦此慾に外ならず。看來れば、何ぞ斯く拜金宗の徒の多き。されど、人、能く意を注ぎて記憶せよ、金が敵といふ諺は、啻に貧乏人の例語のみには非ざるを。

◎大功は細瑾を顧みずと、此語や善用すれば、薄志弱行の者が、其爲す事に一頓挫を來せし時の戒となすべきも、若し之を惡用せんか、甚しき害は生ぜん。夫の墮落生は輙ち言はん、英雄は色を好めり、他日廟堂の上に立て、天下を經理せんと欲するの我、聊か自家の資産を消して花月に流連すとも、何ぞ咎めん。古人も然曰へり、大功は細瑾を顧みずと。夫の不良者も亦言はん、新器械を發明して國利を圖り、大事業を起して民福を增さんと欲する者、其資を得んが爲に、聊か行爲の不正にして、法網に觸ることあるも、敢て慙づるに足らずと、亦證するに此語を以てす。此の如きは、細瑾ならずして大瑾なり。此大瑾を甘ずるの人、爭でか成功を期すべけんや。



◎詩は志なりとは、說文に出づる所にして、詩は志を言ふとは、周書が證する所の語なり。故に、極端に言へば、詩を解せざる者は、無志想の人といはん乎。然るに、動もすれば、狂歌端歌と同じく、一の遊戲文字視する者あるぞ可笑き。唐土の事は暫く措き、見よや、我國にても之に藉りて尊王の志を櫻樹に表せし、彼の兒島公の故事を。詩の德亦此の如く大なり。故に、今

日に在りては、中學令、已に課書の中に之を加へ、生徒に授けしむるに至れり。學べ！人。

◎世に甘き舌と重き苞苴とをもて鼻息を伺ひ、漸くにして官途に就くを得れば、早くも人を眼下に見下だし、縦ひ其友たりとも、己が眼上の瘤と見るべき者は、誹謗讒構至らざるなく、以て其前路を妨ぐる者あり。此輩の膓、殆ど針孔と一般、憎むべき極、却て哀れむべし。孔子も云はずや、夫れ、仁者は己れ立んと欲して人を立つ、己れ達せんと欲して人を達すと。反省一番して可ならずや。

◎植物採集の一日

神戸市榮町　中村菊子

野山に咲き亂れたりし花も、降りしきる雨の度毎に、色褪せゆき、吹立つ風に散されて、空しく世は夏の神の御手に抱かれはてぬ。見渡せば、山々緑濃き美の神の衣となり變りぬる或朝、契り置きし事とて、友の君の訪ひ給ひつるに、用意調へ、いでたち、間もなく和田の岬につきぬ。

げに朝の海ほど壯快なるものはあらず。濃藍を湛へたる新潮の香は、永遠に神の秘密を傳ふる如く、清氣骨に沁み渡り、聖けき風は顔をなでゝ、至大なる慰藉を與へぬ。

清き渚には、蜑が船出の今しも賑かなり。

あゝ、此平和なる光明に浴して、幸多き海の朝の祈禱を奉る子よ、其快樂、果して幾何ぞと、一人感じぬ。折りしも、友の呼び給ふに、趣けば、美はしき旋花、畠の如く咲き揃へり。ふむもをしけれど、清けきをのみ取り、花の調るゝを恐れ、イみておさんとすれば、ふと足下の所々に、大なる葉の攢がれるあり。怪しみ取れば、濱ばうふうにてありき。めざしたる品は、早手に入りぬ。されば、尙進まんには、珍らしきもあらんとて、行く。松宵草は恰も畠の如し。清さをおし居れば、七八歳の少女、手に美しき花もちつ、傍に來り、此花望み給ふやとて、置き去りぬ。あゝ、如何に愛らしき少女よ、惡深き少女よ、恰も天使の如し。傍の濱豌豆、桔梗等手折りつ、刈藻川を渡り、車前蓼、又友よりのつてもあれば、野あざみ、藤あざみ等、多く手折り、いよ〳〵進む折りしも、花さうび匂へる垣根によりそひて、愛らしき少女子二人、「あゝ學校の先生よ、彼處に」。わらはゝ、師の君にても後より來給ふにかと、顧れど、友とわらはの外に、何の影もなし。あな、わらはどちを師とまがへしにか。

鷹取にも程近くなりぬ。此邊に稀なる家がまへあり。今しも剪刀片手に庭の面に下り立ち給へる三六の少女ありき。とり〳〵の花咲き揃ひて、餘りに美しければ、「あならるはし」と、友は聲をたてぬ。主の君には、「君達よ、此花望み給ひてか。さらば、さゝげなん」と、あやめ姫百合花さうび取りそへて給へるうれしさ。「又の日も訪ひ給へよ、さらば珍らしき花の

開きなんを」とのたまへる、心に感謝の言葉をくりかへしつゝ、此所を去りぬ。燈心草澤瀉科等とりて、應取驛に趣けば、二時の列車の程なれば、今日の採集はこれまでと、乘りてかへりぬ。

今もなほ壯快なる海の景色と少女子とは、思ひ出されて。

○なづかしの閑居

越後燕町　長谷川　田都子

書も讀みはてたれば、しばし心をやりてんと、園の枝折戸くゞりて、野邊に出でつ。そよふく風も、なにとなくはだへ寒き心地はすれど、さすがに小春日の心地よさ、野菊めど萩など咲き亂れたる畔の細道分け行く程に、をかしげなる丸木橋かけたる一筋の流れの淸らかなるに出でぬ。いと小さき柴舟やうのものゝ、菊紅葉など折り添へたるが、四ひら五ひらの木の葉と、先を爭ひつゝ流れ行く樣の、何となくなつかしきに、そが行く先の知らまほしき心地して、我ともあらず、歩をすゝませ、いつしか山路は深くなりて、とある庵の前に出でつ。浮世の塵をよそにして、かゝる仙境に物し給ふは、そもいかなる君にかおはすると、かの柴舟よりも深く心のとまりたるに、土橋を渡り、すいがいのひまより、細目に見つるに、いと廣らかなる庭の、しつらひも自然のまゝに、萩女郎花などの咲き亂れたるは、をさ〳〵野邊の景色にも劣らず。夕顏の五本四本、夏の名殘りばかりを止めて、かやぶきの軒にはひかゝりたるなども、所がらいとつぎつぎしく、かけひさへ設けられたるたゝずまひのいとなつかしきに、我れを忘れて尙も見入れつるに、南面の障子引きはなちて、机にもたれたる花の如き乙女、ふと心づきたる面もちにて、側なる母を顧み、やよ母君、今日は父上の冥日なるを、露深き庭の千草共、手折りて參ゐらせんと、いひつゝ、やをら庭に下りたちたるが、ふと我を見て、あはれなつかしの君や、いざ給へと、はや近く來らるるに、心なき業してけりと、何となくはつかしくて、しばしいらへもせざりしに、初めてのたいめんに、かるむらいの事聞えまつらんは、なめげのものとおほさめど、木枯ならでは訪ふ人もなきわび住居は、浮世の人のなつかしく侍るを、一夜やどらせ給ひてんやと、切に乞ひ給ふに、我より願ひてもと思ふなれども、母上の案じ給はん事の心もとなさに、又來ん時を契りて歸りつ。人はいとゞ名殘り惜しげに、さらば必ず待ち聞えてん、せめてはそが枝折にもと、園の七草折りて給はりぬ。後々は必ず訪ひまゐらせんと思ひしも、はや都に上る身なれば、え果さず。されど、いと忘れがたく、ことゝ我身の上によう似給へるやう覺ゆるゝ、いよゝなつかしさのまさりて、後の忍び草にもとかくは記しおく。

○三ヶ日の記

千葉ゆきえ子

一日、起き出でゝ見れば、危みし空の、いとよく晴れて、星のきら〳〵とかゞやくも、うれし。元日とて、妹も何日より早く起き出でぬ。そこら片づけ終りて、兄君より命ぜられしまゝ、庭の寒菊二枝三枝切り取りて、床にさしぬ。祖母君は、何日よりも見事に出來ぬと、賞美し給ふ。目出度く雜煮を祝ひ、折りから來給ひし春子の君と伴れ立ちて、師の君の許に年賀に物す。歸れば、晝過ぎに成りぬ。友への年始狀など認む。夜に入りては、芳子の君の許に、歌留多遊びのありて、行く。

二日、昨夜夜を更かしし爲め、昨日より少し朝寢す。都の姉君より、み文と小包屆く。中に、うつくしき、りボンと人形とあり。人形は妹に賜りしなり。年賀の爲め伯父君來給ふ。火鉢を圍みて、祖母と妾と、妹と、四人して物語りす。程なく兄君も歸り來給ひ、例の快活の御噺に、一座また興をそへぬ。四時頃、旅順陷落の號外來る。町は頻に賑しう成りぬ。夕方より妹を伴ひて提灯行列を見に行く。歸れば、十一時。いそぎ床につく。

三日、昨夜のつかれに、妹はまだ起きず。妾も眠むけれど、勉めて起き出づ。都の姉君へ、昨日の禮狀を出だす。中に、昨夜の提灯行列の樣など認む。折りから、勇ましき、郵便の聲と共に、投げ込まれしは、俊子の君のみ文。見れば、こは新年の御題に因めるものにて、富士の山に三保の松原書きし、うつくしき繪葉書なり。早速御返事出す。妾のは第二回征露紀念葉書の一枚、愛國婦人會の貴夫人達の卷のそれなり。晝すぎより、伯母君の許に物す。折りから、兼子の君の來合せ給ひ、面白きお噺に、日の暮るゝも知らず。かへれば、灯ともし頃に成りぬ。夜は燈し火のもとに、兄君の靴足袋を編む。

○女子文壇の講師の君の御うつしゑに向ひて

千葉町　大谷ちか子

あはれ、世の中に女子の友とする文てふ本は多けれど大方は形式的に流れ、あるは、かと〳〵しくて、女子の讀物としては望むべくもあらずなど、とかくふさはしからず。何がな婦女子によき書物もあれかしと、ひそかに心に願ひしに、我が心の屆きしにや、ゆくりなくも明けて明治卅八年の、戰勝國の元旦より、女子文壇てふいとも有益なる書の發行せらるよしにて、我の喜び、たとふるに物なく、又大方の姉君達も、しかおはすならんと、公の爲めはた自からの爲め、まことにうれしき極みになんおぼえつる。

武裝せる一月一日の晝少し過ぐる頃、待ちに〳〵し文壇は、我手に渡れり。あまりのうれしさに、取る物も取りあへず、ひもどき見れば、かねて御名の聞え高き三宅先生の御筆に成りし初日の出、實に〳〵、眞に迫りてさながら一幅の活畫のそれなるかと怪まれ、ひたすらに見とれて、しばし時の移るも覺えざりき。

扨叉うれしかりしは、講師の君の御うつしゑよ。日頃よりいや高き御芳名もれ聞きて蔭ながら敬慕せし折柄かく御うつしゑに向ふ嬉しさよ、幾度か拜し且つ向ひぬ、遅れがちなる我も勤め勵みて、御德高き師の君の御はぐゝみに浴し、文の林にわけ入りて、花のありかをたづねばやと、ひたぶるにねぎたてまつるになん、

○歸省日記の一節

長野縣埴科郡坂城町　恩田兆子

可愛き妹

『あれ、母樣、東京の姉樣が……』と、愛らしき妹の綾ちやんが、先き頃小包のついでに送つた、紅色のリボンを、ヒラ〳〵させながら、門の中に駈け込で、『母樣、母樣、姉さんがお歸り……』、とけたゝましく、『おやさう……ほんとにねへ……此次の滊車だろうと思つて、迎へもやらなくて、お困りだつたろう…………』。

久し振りで故鄕へ歸る程、嬉しい事はない。殊に、無邪氣の妹の愛らしさ。靴を脱いたまゝ、まだ御挨拶もせぬに、奥から縫ひかけの縮緬の被布を、持つて來て『これねへ、京橋のおば樣から頂いたの、いゝでせう』と優しき目、何とも云へぬ。母樣とさし向ひで話して居ると、綾ちやんは、めづらしさうに膝にもたれて、髮のリボンや、紫の袴などいぢりながら、もぢ〳〵して居たが、やがて思ひきつた樣な聲で、『姉さんお土產』。不意を打たれた私は、『御免よ、ねへ、綾ちやん』と、人形と花籠とを出して、人形をやれば、嬉しさうに抱きながら『其お花、咲いたの』。『イエ、これはこしらへたの。お父樣にあげるのよ』と云へば、じつなささうに『私、散るやうになつたら頂くはねへ、お母ア樣』とかすかな聲。四歲にはちとませた云ひ振りなれど、可愛し。夕食後、炬燵で東京の話から學校のお話などして居る處へ、綾ちやんが、婆やとお湯から歸つて來て、例の人形を抱きながら『姉さん、人形の着物ないの。こしらへて頂戴な、ね、』とせがむ。綾ちやんの氣性として、云ひ出した事は、一歩も引かぬ癖、漸々だまして明日までのばす事にした。

一ぱいの牛乳を呑んで、スヤ〳〵と眠つた綾ちやんが夢の中に莞爾。あゝ可愛らしい……あ愛らし……まるで天使。

▲寄贈書目▼（追て批評を揭げます）

○にひじほ　第一卷一號（定價拾錢）　にひしほ社發行

○文藝　第一卷一號（定價八錢）　大俗社發行

○百字文　第一卷六號（定價拾二錢）　百字文會本部發行

○家庭文學　第一年一號（定價拾錢）　家庭文學社發行

○英學生　第五卷一號（定價二錢半）　東西社發行

○小詩人　第一卷一號（社費六錢）　小詩人社發行

○大崎新報　第廿一號（定價三錢）　大崎新報社發行

○女學世界　第一卷一號（定價二十錢）　博文館發行

○中學世界　第一卷一號（定價）　同

○秀才文壇　第五卷一號二號（各價拾錢）　文光堂發行

◎繪葉書の王　本鄕區妻戀坂上の便利堂より發行せる美術繪葉書（四季の美人、年賀用繪はがき、御題新年の山、戰爭紀念はがき）は孰も當代名家の意匠に成り紙質印刷とも精巧世間流布のものとは其選を異にせる最上乘のものなり



廣津柳浪先生選

地

連錢葦毛

西駿藤枝のほとり　藤池たけ子

（一）

「親爺渡すぜ、馬代が六兩よ、いゝか、其内一割は俺の手數料て、四十錢が印紙と紙代、そこで殘額が恰乎五兩、な、よく改めて受取んねえ。――」

吸掛の煙管で指示しながら恁う言たのは金公と申す馬喰、其の側の男も金の仲間であろう。

家といへば家、物置といへば確に物置てある。破れて歪んだ柱に、朽ちに朽ちた軒、戸障子は名計りで、壁は竹の骨が露はれ、疊は藁の腸の出したのが漸っと三枚、これでよく去年の嵐に持怺へたと思ふくらゐ。その眞中の、火は絶えて、眞黒に煤けた欠土瓶の懸つてゐる爐の正面に、かう腕を拱いて凝と物思はしげに、首俛れてゐた六十許の老爺は、はつと頭を擧げて、

「へい、これは……。」ちらと金員を見遣つた、親爺の眼は見る〳〵濕んで來て、思はずほろりと一雫。

「萬望、彼馬は大事にしての……」

金は忙しさうに煙管をポンと叩いて、

「いゝつて事よ。金員を渡したら早く馬を貰はうぜ、なあ、親方。」

（二）

背戸の立枯の榛の木に繋いだ、瘦せに瘦せて、毛さへ長く伸びたまゝの葦毛馬の脊を撫でゝ親爺は今更のやうに別を惜しむのである。

「親爺さん好い加減にしねえな、是から五里歸らなけりやならねえんだ。」

「飛んだ多助だ。はははは。」

聞倦んだ二人は衝と傍へ寄つて、親爺の手から、打奪るやうに手綱を取つた。」

「へい、へい。」と手綱を放した親爺は、遽に打萎れて、

「萬望……可愛がつてやつての……」返事もせずに手荒く曳出す、曳かれて馬は歩み出したが、それと知つてか首俛れて悄々と、いかにも力なくもの悲しの風情。

「親爺さん大きに、叱、歩かねえか！」とはや一鞭。

「あゝお前さん……」

言ふ間にはや街道へ出て、直ぐに右へ折れて行くこと十歩許り、銜と蹄を止め、我家の方へ頭を向けて高く嘶く。

「おゝ行くか、葦毛……」

一歩々々蹄の音は遠くなつて、微かになつて、やがて影さへ見えなくなるまで、親爺は門邊に立ちつくすのであつた。

と見る碧空は春の夕暮、艶立ちて華やかに、今朝の雨の行方やいづこ、西に入日を包んだ雲は、紫、桔梗、金樺と彩られたが、鑛毒に變色した地は滿目蕭條、柳はあれど葉は烟を罩めず、櫻もあれど花は笑みを含まぬ安蘇郡は渡良瀬の滸り植野の里。

（三）

「親爺さん、今上の方へ曳いて行つた馬は、お前許の葦毛ぢやあ、ありやんしねえかね？」と、通掛りの同じ村の、極めて血色の勝れない若者は、其方を瞶めた儘突立つてゐる親爺に聲をかけた。

「……………」

親爺は語も耳へ入らぬ樣で、魂の脱けて了つたものゝやうに、瞬もせず尚も一心に眤とかう瞶めたぎり。

『したが葦毛なら可哀相だの、明日は命がありやんすめえぜ。』

『えつ！』と親爺は始めて振返つて眼を瞬つた。

「そりやお前眞個だかね？」

「眞個も虚言もありやしねえだ、お前あの一人は馬喰の金だが、一人は足尾の肉屋の亭主だ、お前彼馬を賣りやんしたゞか、え、え？」

と語を切つて無言で頷く親爺の顏を氣の毒さうに見上げて、

「知らなけりやあ無理も無えだが、可哀相に明日は憎い鑛夫等の腹を肥すだ！」

「えつ!!」

物言ひたげに唇は顫へるばかり、親爺の顏色は見る見る變つてゆくので。

と踵を返して疾風のやうに家へ飛込んだかと思ふと、ちやらんと銀貨を集める音がする、と聞く間に引返へ

して、慌たゞしく、今曳きゆきし馬の跡を趁うて一散に、門邊を流るゝ小川の柴橋を渡ると直ぐに右へ。側目もふらず喘ぎ〳〵駈けて行くのではあるが。ともすれば雨上りの道の泥が草履へ粘り付くので、えゝ面倒と、そこへ脱付けたまゝ、見向もせずして尚も一散に。小川の水源の鏡が淵の傍まで來ると、是より下りの街道は眞直な一筋道、伸上つて打見やれば、遙に遙に小さく小さく、それかとばかり見えた影は、今夕靄に包まれて、如何に詮術もないのであつた。

「あゝ――」

絶望の語と共に、肩でほつと一息吐いて、べたりとそこへ腰を下した。

「あゝ可哀相に……」

不圖懷ろに手を入れると、觸つたのは以前の金員の包、情なさゝうに取出して、

「斯麼もの！何するだ！」

發矢とばかり投付ければ、包は風を截つて空に鳴り、水音高く鏡が淵の中頃に墮ちると、深碧の淀みは颯と破れて、沸立ち沸上る大泡小泡。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

人煙稀な寒村の夕の寂寞を破つて、今し歩みを停めて過ぎ來し方を顧み乍ら、駒は悲しさうに一聲高く嘶いた……。

評　人の未た思ひ及ばざる一個質樸なる田舍親爺と其愛馬との纏綿の情に筆を着く、而も其筆致老達にして情景眼に見るが如し

人

蘆分舟

麴町區山元町三丁目一番地　高橋つる子

お兄さま、妾は春匆々から恁麼御話しを申し上げるのを悲しく存じます。過去を振り返へつて見ますれば、妾が家を出でまして此邸に奉公致しましたのは早や二年、長いやうで短いのは月日と今更知つたではございませんが、憂いことも辛いことも樂しいことも夢のやう、自分の出來事では誰を怨んだこともございませねば三年このかた、お姫さまの傍らに仕へて、外の女中衆に嫉みを買つたことはございません、その故でもありませうか？殿さま初めお姫さま迄「梅や〳〵」と持て囃してちやほやなされます、わけてお姫さまは姉

妹も及ばぬばかりにこの不束な妾を懐かられ遊ばして御自分の髪飾りの道具を街に出てお買ひ遊ばしまするにも必ず「これは梅にうつりが宜さそうだから買つて來ました」と何んの！妾風情に勿躰ない、「那麼ご心配は御無用に遊ばして」と辭退致しますれば手で打消し「遠慮しないでも宜いよ、宜いよ、宜いから納めてお置き」と推し遣るやうに妾に貴重な品を下されます。また毎日の學校の往還りにも妾でなくてはならぬやうに仰せられまする、その有難い思召の御恩に浴しましては辛いこと憂いことさては苦しいことは疎か、此の身が舍利になりましてもお姫さまのことならば、何んの少しも厭いはせまいと常日頃から心の裡に思つて居りまする、せめて何時かはこの御恩返しを致したいと思つてるばかりで未だに何一ツ御用に立てたものもございません、妾はこのこと許り殘念で堪えられませんて内心ひそかに耻ぢて居りましたが、今は御用に立つべき事柄が出來ました、今は御用に立つべき秋がまゐりました。

お兄さま、何から御話し致しまして宜いのやら、心が亂れまして委しうは申し上げられませぬ、去年の毛蟲の五月蠅い夏の頃でございました、お姫さまは學校の夏期休業を機會と遊ばして妾と松が枝さまをお連れになつて、相州は江の島の別莊に避暑にまゐられましたが、江の島は東京と違ゐまして目に見るもの耳に聞くもの何一つ珍しくないものはございませねば、お姫さまは非常のお喜こびで毎日濱邊をお歩ひになつて色々な貝類を手づからお拾ひになつたり、青々と聳えた山や流れ清い河を思ひ出にとて式紙に書かせられて獨りで歌を誦せられたり、又は船唄の餘りに面白くてと節おかしく眞似られたりして樂しく其日〳〵を暮らして居りましたが、月日には關守がなく頓て當地に歸りは還りましたが、其後のお姫さまの振舞何とは知れず一人で部屋に引籠つて兎角沈み勝な御容態、妾と御話しを致されますのにも以前のやうでなく、五度のものは三度十度のものは五度位しかお口をお開きなされません、性來お優しい情深いお姫さまが斯く物も仰せられず遇には妾を厭はせられるやうな素振を見聞き致しましては、傍に侍る妾が心什麽に悲しうございましたらう什麽に怨めしうございましたらう、命をとも賴んだお姫さまは何んで箇樣な隔てをなさいますやらと竊かに勿躰なくも怨みも致しました、人知れず泣きも致しました、愚痴とは知りながらもお姫さまを搔き口說きも致

しました、が、未だお心が解けやらぬかして御返事もなさいませんで、偶にはしく／＼泣いて被入るではございませんか、妾は傍でこのいぢらしい有樣を見ましてどうして默つて居ることが出來ませう、什うかして平生の御恩にも報ゐたいと存じまして、若しや御病氣ではないかと心配も致しましたが、さりとて別にお身躰も別條はございません御容子、若しや人知れず戀せられて被入るのではないかと、それからは毎日のやうにお姬さまを搔口說きました、天も妾の誠心にお感じ遊ばしたか漸くお姬さまは云々と恥かしさうに實をお話しなされました、妾は聞きまして什麽に吃驚致しましたでござんしたらう、お兄さま、妾は三日三晚泣いて泣いて一目でも眠りは致しませんでした、其は外でもございませんお姬樣は妾が最愛の武雄さまに戀せられてると聞きまして……お兄さまお察し下さいませ、お察し下さいませ、幾夜髮を抱ひて惱ひて惱きぬいたでござんしたらう、これ許りは如何なお姬さまのお願ひでも厭／＼、死んでも否でござんすと獨りで胸の裡に答へは致しましたが、また振り返へつて考へますれば誰とて一度は血に燃ゆる戀はあるもの妾とてお姬さまとて、切なる思ひは同じこと、いくら身分に差別があるとは言へ女は女、優しい情が無うてなりますものか、妾が樂しいと思ふ夢はお姬さまも樂しい夢、妾が切ない苦しい夢は矢張りお姬さまも切ない苦しい夢と悟りましてはまたしみ／＼と今迄預つた御恩が浮び出だされます、自分さへこの戀を無い昔とあきらめて捨てゝ仕舞へば或はお姬さまに幸福な家庭が得られぬとも限られませず、妾とて悲しみも薄らぐ道理、思へば去年の夏お兄さまが武雄さまと一緒に江の島の別墅に妾を訪はせられたのがかく悲しい運命を作らうとは夢にも思ひは致しませんでした、今迄のお兄さまの御恩死んでもこれは忘れは致しません、武雄さまと妾との交情皆お兄さまの御盡力に依らないものはございません、今が今この戀が破れましてもお禮は言葉にも盡されは致しません、お兄さま、ゆめゆめ身の淫奔でこの戀を捨てるのではございません、ゆめ厭氣がさしてこの戀を忘れたのではございません、妾はお姬さまと武雄さまとの戀が成り立つて末永く仲らひの變らないことを窃かに祈つて居りまする、お兄さま、この梅が一生の願ひ、何卒御盡力下さいませ、それで妾は安らかに此の世を送られます、それで安らかに此の世で眠りに付かれます。

評　纖細なる筆致よく少女の優しき心根を描きて餘蘊なし

○尼法師

常陸しろがね

（上）

京都二條橋の西詰、笹原伯爵家の二階に、鴨川の淸らかな流の、秋風に鳴く哀れな響を聞きながら、憂愁多き身を欄干に寄せ掛けて、見るともなく、東山の空を望んでゐるのは伯爵婦人龍子である。白雲の行方でも索ねて居るのであらうか、青い程白い細面、凛々した眼元、何となく腦みの風情はあるが、流石に後れ毛をもみださない世にも氣高い容貌である。「お母様、是れ?。」寫眞を手にして出てきたのは、令孃愛子で、擦り寄つて母に示した。龍子は振り向いて、「あゝ是れなの、有難うよ。」寫眞を受けて、暫し見詰めて居つた龍子の目は怪しくも輝いて居る。「孃や、此人誰れ、知つて居て?。」小鹿のやうな目を見張つて、母の膝から覗き込んだ愛子は、その無邪氣な顔を押付けるやうにして、「孃知らなくつてよ、誰れ?。」「孃の御父様なのよ、孃は知らないの、え?。」と淋しさうに微笑むだ。お父様ぢや無くつてよ、知らないわ。餘所のお叔父さん?。」「お父様ですよ、孃のね、眞實のお父様なの。お父様と云つてごらむ。」愛子は不思議さうに眉を顰めて、「お母様、眞實のお父様、何處に在つして?」「遠い〳〵所に入しやるの」。「遠い〳〵所て何所?。」「孃の知らない所なの、孃はお父様に逢ひたくつて、え、會いたければ、尼様になるの。孃尼様お嫌いかへ?」「孃會いたいわ、お父様に會はれるなら尼様好きよ。」とまたしみ〴〵眺め入る愛子の姿、餘りの悄らしさに、龍子の胸は一杯になつた。「お母様もね、遠い、遠い所に在らしやる御父様のお傍へ行くからね、孃は溫順しくして尼様になるんですよ。」「お母様何所へ行つしやるの、孃もお母様と一緒に行つてよ。え、孃尼様になるわ、いつ、いま?。」振り仰ぐおさない顔に、ばらばらと散る熱い涙、龍子はじつと我が子を抱き〆めた。愛子も譯は知らぬが悲しくなつて龍子倶々泣くのであつた。

（中）

靉靆と綠の雲が覆ひ重なつたやうな。御苑内の松の影を左右に縫つて、圖書館の前まで來た可愛らしい海老茶式部は、即ち令孃の愛子で、附添えのお玉に左手を曳かれながら、紅のリボンでとめた艶々しい髪をば、

惜氣もなく秋風に波打たせて居る、今しも幼稚園の歸途であるのだ。「今日はね、先生に賞めて戴だいたのでよ。」甘垂るい調子で斯う云つて、袖から取出してお玉に見せたのは、厚紙に縫い作られた、小さな黃菊、白菊である。「おや、それ御孃樣のお縫いあそばして。まあ何てお上手でしやう。早く歸つてお母樣にお見せなさいましよ如何にお褒めあそばすか知れませんわ。」お玉は景色よく褒めそやしたのであるが、愛子は格別浮かぬ顏色で、「あの貞ちやん居るの?。」「え、貞樣ですつて。」意外の問にお玉は周章て眼を睜つた。

「孃、貞ちやんが居ちや厭だわ、また必と奪つて終うのだから。」と可愛らしい黒目勝の目を上げて、恰も同情を求むるが如く、お玉の袂を握つたのである、お玉は忘れて居つたと云ふ風で、「まあ妾やお孃樣に、……あの何ですよ。厭なお妾の叔母樣や貞樣はね、今朝お父樣と御一處に、須磨の別莊へ行らしつたのですよ。」

「さう叔母樣も貞ちやんも最う歸つて來やしなくつて?。」

「いゝえ、最うこれからずつとお母樣とお孃さま限りお嬉しいてしよう、ねお孃樣、あれ、あんなお顏して在つしやるのよ。」と顏をのぞく。愛子の目は希望に輝いて居る。「お玉さん、お玉さん……。」突然に名を呼ばれて、驚いて顏を上げて見ると、お梅と云ふ同輩が、息せき切つて走つて來た、其顏の色は眞青である。「お玉樣、は……早くお歸りよ、大變なのよ。まあお孃樣お早く……。」氣息忙はしく、物狂はしさうなお梅の樣子を見て、魔にでも襲はれたやうにお玉は茫然と停立づむで居る。「何だつて茫然して居るのさ、早く御歸りつたら、大變なんだから……。」と凄しい勢でたゝみかける。お玉は漸く我に返つて、「だつて何か解らなくじやないかね、大變て何に……?。」

「自烈躰ねえ、御上樣がいま俄に……御病氣だつて……妾やその病院まで……。」

「え、御上樣が?。」お玉の顏は颯と蒼青めた。お梅はそは〳〵として落付かず云ひ殘した儘走つて行く、

（下）

ざんざと降りしきる雨を、吹き亂す須磨の浦の汐風が、颯と松の梢を薙いで、荒れに荒れる十一月二十九日の夜、天も黒く地も動く、惡魔の叫喚かとばかり、海には浪が闇に狂ふ聲凄じい。雨を踊いて、彼方に見えた一點の赤い光、消えては見え見えてはまた隱れる。風は其の光をも滅さうと吹き捲くる。

とある家の門。「電報！電報！電報！。」
家の内には應答が無え。ドン々々々々々と戸を敲く音、「笹原伯爵樣、電報！！！。」夜は空しく荒れに荒れて居る。「御前樣々々々々御邸から電報がまいりましたよ。」手燭をさし翳して切々がましく伯爵を搖り起すのは妾の花枝てある。
「ウーム、何だ電報だ、電報がどうしたのだ。」酒氣紛紛、生欠伸を混へて目を開いた。「あの、御上樣が御危篤ですつて…。」流石に聲は震へて居る。「ナニ奥が危篤だ。フム奥の病氣は十八番だ。」「だつてあなた、至急お歸りくださいつて…。」「歸れ？歸れと云つても今頃から如何して歸るのだ。」「まだ終列車には……。」
「えつ煩さい、打棄て置け…。」
荒々しく云つて、伯爵が寢返つた柄子に、傍に寢て居た貞雄が目覺めて、ワツト泣く。驚いて花枝がすり寄つた。ピユーピユー、と終列車の滊笛の響が風雨を破て、震ひ勝に微かに聞えた。恰も、此世の臨終を豫言するものゝやうに…。
寒い空に二條の橋詰に咲いた葬儀の花、中に蕾の墨染衣が一つ。風よ吹くなと祈る人もあつた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

○動員令

（上）

千葉縣　吉原靜江女史

「姉さん。」
玄關の側の小座敷に箱火鉢を中に挾んで差し向ひの姉妹。妹の方の十許りなのが優しい聲で讀本を復習して居たが、急に何か思ひ出したらしく本を下に置いて、こう呼びかけた。先刻まで凄まじく吹き荒れた北風は今止んで、夜はもう寂然、野良男の里歌も聞えず、軒の小笹の囁きも聞えず、梅が香獨りどこからか傳つて來る。
「なに。」と姉は縫ひかけた針の手を猶ほ運び乍ら一寸妹の方を見遣つた。
「あの、今度露西亞と戰か初まるんだつてネ。」
「あゝ、だけれど、それもまだ判然とは分らないんだよ。」
「あら、そう、ぢやア無いかも知れないの。能くは分らないけれど露西亞の返事次第で致ないかも知れないつて。」
「そう、そうなれば宜いのネー、ほんに戰なんて嫌だ

ッ妾。」

「ほんにネー、何も宜い事はないんだよ。むやみに、人許り死んで。」と姉は今全く仕事の手を止め「戰つて聞くと妾、お父さんの事が思出されてならない。」姉が言葉の終らぬに、妹は小供氣の遠慮もなく、「アそうネー、お父さんてば妾お顏も能く覺えないのよ。」

「そうだろうネ、お前が二歲の時だつたから。お前は何も知らないけれどネ、お父さんが御亡りなすつた時なんか、兄さんはまだ拾七許りで被存つたし、お母さんは御病氣で臥つて被存るし、妾は、そうネ、丁度お前の歲だつたから、それはもう、悲しいんだか切ないんだか、どうする事も出來ないで、兄さんと一所に藏の前で泣いてゐたよ。」と今その時の事を思ひ出して、私かに目を拭くのである。奧の方からは靜かに讀書の聲が聞える。姉の話に妹は小供乍らそゞろに淚を催し、今更の樣に身震ひして。

「ほんに、戰つて嫌なものネ。」と僅かに云つたが、又急に顏を上げて、「それでネ姉さん、今度戰が始まると、兄さんも被入るの。」

「そう、兄さんはまだ豫備だから、被入らなければなるまいよ。」「あらッどうしようネー、若し又お父さんの樣な事でもあつたら。」「嫌だネー、この子は、そんな緣喜の惡い事云ふもんぢやありませんよ。」折りから聞ゆる時計の響。――「オヤもう九時」と見上ぐると途端、周章しく、

「電報、須賀さん電報」

「オヤ、今時分、ハイ、」と姉は立つて一葉の電報を受け取り、「德ちやん、ちつと待つてお出、兄さん所へ持つて行つて來るから。」

（中）

「兄さん、電報よ。」

一人机に倚つて讀書に耽つて居た兄は、聲を止めて半ば妹の方へ身躰をねぢ向け。

「ナニ、電報、どれ、愈々來たナ、占めたぞ。」

もう見ない中から喜色滿面に溢れて、取る手遲しと急ぎ披いて見て、

「違いないー、實に愉快だ、萬歲だ。」「ナニ、兄さん獨りで嬉しがつて。」

「イヤ、愈々來たよ。」「なにが。」「お迎ひが。」「何處から。」「アハヽヽヽ、分らないネ、戰のお迎ひだよ。」

「エッ、ぢやァほんとに戰が始まつて。」と今更らの樣に眉を顰めた。

「ナニ、これから始めに行くのサ、敵の首の五百も取つたら、庭飾にしようよ、ハッハッハヽヽ。」と腕を撫して哄笑一番。この中には、いかに勇ましき喜びが籠つて居るであらう。

妹は呆氣にとられて、只兄の顏を見守つたが、やがて、

「て、兄さん、いつ被入るの。」

「モー、今夜はいけないから、明日成東の一番列車に仕よう。」

「あら、餘り急なのネ。」

「イヤ、無論そうだ、兵は迅速を尊ぶと云ふから。」と云ひさして、急に言葉を變へて、「時にネ福ちやん、僕が行つた後は、何とかして、お母さんを大事に、僕の分まで能く孝行を盡してお呉れ。」

「それはもう、被仰らなくたツて、家の方なんかどうにも致しますから決して御心配なしに。」と雄々しくも云つたが、横を向ひて見るとはなしい洋燈を見つむる目には、光りを千々に亂すのである。兄さんは漸く三年前、三年の兵役を無事に濟まして、袖には二本の金筋を横へて歸鄕後、さる役所の官吏となつて今では細々乍ら親子兄姉妹打ち寄つて樂しい家庭を作つて居るのだが、今度兄さんが戰に行つてその後には病身のお母さん纖弱い妹、あゝどうしてその日を送らう。これが外の事なら、兄さんの御歸りを樂みに待つ事も出來るが、もしや先刻德ちやんが云つた樣に、お父さんと同じ運命にでもなつなら、あゝどうしてこの一家を支へよう、心强いお母さんだから、口では何も被仰るまいが、心のお悲みはあゝどんなであらう、と思ひ至つた時に、お福は泣かずには居られなかつた。然し兄に淚を見せまいと、つと火鉢によつて灰をかきならすのである。

兄は勇ましく立ち上つて、「お福ちやん、よく云つて呉れた、それで僕も安心して死なれる。」

お福は驚き、淚の目を見張つて、

「あらツ、嫌ね、そんな事、無事で歸つて頂戴。」

「馬鹿ッ、戰に行くものに無事でッて云ふ奴があるものかハヽヽヽヽ、家が大事か國が大事かッて云へばそりや國だからナ。」「ハイ。」と云ふたが外に答ふる言葉はなかつた。

「ぢや、福ちやん、お母さんにそう云つて來るから、あのお前にこしらへて貰つたフランのシャッと軍服を出して置いてお呉れ。」兄が出て行つた後で、お福は遂に袖を顏に當てた。鐵瓶の湯が獨りブツ〳〵と沸え立つ

て居る。勇ましい鷄の聲が暗を破つて、曉は間近く迫つたらしい、西の空には幽かに星が二ッ三ッ、瞬いて居る。痩形の老婦人は今その子の出立を送る可く二人の妹と共に玄關とは名許りの入口に立つて、

「ネ、鎭雄、家の事なんか決して心配せずに、十分働いてお吳れ。」と淚を呑んで諭す心の中、流石は武士の妻である。

「それは、お母さん、大丈夫です。元より國の爲めに捧げた身躰ですから、それに、數へて見るとモー十年になりますが、この軍刀に對しても不覺は出來ません。」と鎭雄は腰なる軍刀を撫して、意氣昂然、天を衝いた。あゝこれが亡父片身の日本刀、叩けば聲鏘として還遼の恨みを告ぐるのである。

「おゝ、よく云ふてお吳れた。立派にお父さんの樣に討死して……。」お福は驚いて。母の面を見つめ、「マア、お母さんはあんな言。」と呆れ顔。

「あら、嫌ッ、兄さん、死んぢや嫌よ。」とお德も姉が後に續いた。鎭雄は小氣味よく笑つて、

「お前だちは弱い子、ナニ心配する事はないよ。乾度歸つて來るから。」この言葉を聞いて、

「兄さん、ほんと、」

「乾度歸つて、兄さん。」と二人は深き思案もなく早や笑み傾けて、鎭雄が言葉に猶ほも念を押すのである。鎭雄は沸き出る笑を嚙みしめて、

「あゝ、乾度歸るよ、位牌になつて、ハヽヽヽヽヽ」

と云ひ終つて遂に噴き出した。

「あらッ。」兄が生還に向つて幽かな光明を認めた二人は、今この言葉によつて再び暗愁に閉ぢられ。言葉は胸につかへて後は云ふ事が出來なかつた。

「ぢやア、お母さん、マア御機嫌宜しく、福ちやんも德ちやんも左樣なら。」と鎭雄は遂に勇ましく別れを告げた。

「マアそれでは機嫌よく。」と母の聲は流石に震へて居た。二人の妹は顏を得上げず僅かに默禮した。

鎭雄が戀しき家を辭した時、中から聞ゆる泣きすゝりに思はず立ち止まつたが、やがて決然、鎭雄は去つた。

「あゝ、神よ」と、叫んで。

曉風一陣、門側の梅花風のまに〳〵三片、五片。

○生かじり

下谷　專念子

此處、とある木賃宿の淋しい四疊半の一間に唯一人、

『死ぬ、噫此死ぬと云ふ事は、誰れも悲しむ、己れ計りぢやあ無い、だが一度は誰れも死ぬんだ。泣いても笑ふても何時かは死ぬんだ。何うも仕方がねえや、諦めが一番だ、そうだ諦めるんだ』と獨り言を言つて居る二十六七の男『思へば人間て云ふ奴あ、馬鹿な者だ。この自分の生れて來た前も死んで行く先も知らねえんだからなあ。生きて居る内は、泣いて見たり笑ふて見たりして居るが、さあとなりやア、實に心細いものだなア、女を戀して樂しんだり、金を儲けて喜んだり。皆悉人間の迷ひなんだ、凡夫なんだ是が凡夫なんだ』と大息をするのである『人間の死んだ先や、生れた前の事など噫此凡夫に何が分るものか、女なんぞを戀しいと思ふたり、笑つたり、泣いてたりしたなア、悉皆自分の罪なんだ、罪なんだ、斯う思やア、死ぬも生きるもねえや、只佛樣を念じるより外はねえ、噫此罪の有る凡夫、念佛より外はねえ。念佛より外は無え。斯う思ふとお寺の和尚の云つた事が、身にしみる、實に身にしみらア、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛』と木賃宿の一間を我が寢間として只安閑も一日車を引いて居る其日暮しの車夫蜀野又吉が或る夜何に感じたか、大息つきながらの獨り言、

* * * * * *

時は明治三十〇年十二月二十八日の夜、淺草松淸町の門徒寺蜀魂寺の表門でブランコ往生をとげて自殺した一人の車夫風の男があつた死人に口なしで區役所で引取つたが近所の噂に、其日の午後、此男に好く似た男が蜀魂寺の說敎を涙を流して聽いて居たとの事である

○斷絃

千葉縣　小高せい女

「何故、生意氣、何故ですお母さん……」

義雄は愛らしき、黑白勝の活々とした張眼へ涙を湛へ母親へ小さき膝を進ませて詰るのである。

母親は垢拔のした三十四五の年增、一見して其ありし昔を想像するに難からぬのである。

「生意氣だよ綾ちやんに三絃のお稽古を止させなんて……お前、生徒等が調戯のを眞に受けて、何日も其樣なことを言ふのだらう、お前はまだ歲が行かないから無理はない、何も知らないのだよ、ね、其樣なことを氣にかけいでも、ホヽヽ、なにも泣くことはないぢやないかね……。」

母親は串談半分、宥め半分だが、義雄は眞劍だ。

「今日、今日それが爲めに、お母さん‥‥皆に、僕あ僕あ口惜しいんだ。」

涙はハラ〳〵と、筒袖の腕で活溌に目を拭ふた。

「ソーレ見なさい、生徒にからかはれたのだらう、それ其樣に泣いたりなんやして、眞劍に憤るものだから面白がつて言ふんだよ、ナーニ何をお前のお友達なんか知るものかね。」

長火鉢に凭れ、銀の煙管を火箸の尖端でほじつて、紅唇に力を込めブッと吹くと脂の魂がポイと。

「でも義雄、一般女と云ふ者はね、誰でも三絃を心得てをかねばならないのだよ。」

「そ、そんなのばかりぢやないんだよ、」義雄は泣じやくりしてゐる。

「それなら一躰どうしたの‥‥」と母親はちよいと眉を顰めた。

義雄は泣じやくりして容易に言葉が出ない。

「其樣に泣かずにお言ひよ、」

「皆、皆かね、姉さんが藝妓に、な‥‥なるんだと‥。」

十二歳の美少年、朱唇を咬んで無念と泣くのである、母親は驚きの目を見張つて

「あらまあ、其樣こと、」と高聲に、「容色が容色だし、他所の親達が種々のことを言うとみへるね」と、あらぬ方を向いて誰に言ふとなく微聲で、小い吐息一つ。

「ね義雄、泣くんじやないよ、ソリヤお母さんだつてそんなことを云われては口惜しいけれどね、全く無いことを云ふのだから、相手にならずに放擲とくのだよいゝかい。」

母親は宥めつゝ小さい脊を撫でゝゐる、

義雄は漸く泣きはらしたる顔を上げて、

「お、お母さん僕は口惜しいから。三絃を習つたつて藝者になるに限つてゐない、と云ふとね、あの酒屋の出入りする大工の清さんね、藝者でなければ、其樣なものは不用だ、素人の習ふものでない、と言ふの、他の生徒もね‥‥。」

無邪氣なる目から、紅の頰に傳ふ涙を、可愛らしい手で邪慳になぜた、手に墨汁があつたかサッと薄墨、恰も日の出の空に立ち昇る賤が家の烟とばかり。

「僕は不可と言ふのを知つてゐるがね、お母さんが平常そう言ふから、誰でも女は習はんければならんのだ一寸も構わない、と言ふと皆が、可か不可か教師に聴かうつて、それから教師に聴くと。いけません、汝等の聴くものじやないつて」。義雄はまたもや涙に咽ぶの

である。
母親は尙々驚き呆れて、
「あらまあ、いろ〳〵なことを‥‥。」
「か、歸りに皆が、ぼ、僕の後へついて來て、げ、藝者々々つて囃すので‥‥僕あ〳〵悔しくつて、お母さん‥‥、」義雄は母の膝へ武者振り付くのである、母親は義雄の脊を撫でさすりつゝ。
「‥‥義雄、何故そう泣くのですよ、女兒見たやうに困るね‥‥」一躰お前等は先生に聽きようがわるいのだよ、先生はね。お前等男の子が習つたり聽いたりしちや不可と言ふのだよ‥‥女の子なれば、先生は屹度可と言ふに違ひないよ、ね‥‥。」と微笑した。
「だけどもお母さん、僕は、わ、不可と思ふ、姉さんに、止さして異たら僕あ、嬉しい‥‥けれど。」
母親はこれ迄の境遇が境遇だけに其頭腦は、(女子の眞價は容貌の美なるにあつて、其の武器は遊藝で三絃は其武器の內最も銳利なるものである)と是等を以て充されて、女子は國に家庭に如何なる關係を保つてゐるか、其品性の修養は如何に重大なることであるかに付て、聊かも留意して居らない、彼はどうして、是等頑是ない小供の言ふことに隨ふと云ふ心になれようぞ

「困るね、じや義雄、何故不可の‥‥。」
「な、何故つて‥‥」
「それ知らないでしよう、譯も解らずに只いけない止せつて、本統にいけないね、ホヽヽヽ、」と母親は大得意。
「譯つて、不可のだ、」義雄は凉しい目に角を立てゝ母親を睨む。
「オホヽヽヽそれすぐに癇癪筋立てゝそんな可怖ない顏をして憤るから、皆に譯も解らぬことを云つて、調戯れるのだよホヽヽヽ、顏へ墨を付けてさ、早く洗つておいてよ‥‥。」
母親は笑ひに誤魔化さうとするが、義雄は只だ「不可ない不可ない」と無上にジャ〳〵けるのであつた。
「黑髮の結ぼれたる思ひをば‥‥」
木々の若葉、綠したゝらんばかりにして、泉水の燕子花麗はしき庭園を眺めつゝ、綾子は今彼れの部屋に其の冴えたる三絃の音、愛らしき聲を以て、今し方師匠に敎はつた「黑髮」のお浚へをしてゐるのである。
今年十五歲の少女としては、得易からざるの彈き振りであると母親は大の天狗。
綾子は遊藝にかけては、極性のいゝ方で母親は苦勞

人だけあつて、女學校は三年で退學して、現在は三味線と生花のお稽古に日もこれ足らずと云ふ、有様てある。突然部屋の唐紙を亂暴に引き開けて、
「やかましイ」大喝一聲でなくつて、疳走つたる子供の聲。
綾子は余り驚いた樣子もなく、振り返り見たが、其所に愛らしき目で睨みつめて、義雄が立ちはだかまつてゐる、綾子は、また毎度のことゝ言はぬばかりに、ホヽと笑つて向き直る。
（解て寢た夜の……）
「姉さん八釜しい、」と義雄は三絃の竿を握つた。
「アレーお母さん、義雄が、」
母親はすぐ飛んで來た。
義雄は己が部屋へ退去すべく、余儀なくされたのであつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

綾子は弟の、義雄が何故に怒るかを知らずして、習日只ゞ面白半分に義雄の部屋の次の座敷へ行つて「越後獅子」を調子高に彈いたから堪らない、義雄は昨日の失敗と云ひ例の癇癪を起して、玉の如き顏面に血を走らし、ナイフを片手にスックト立上つた。

間の唐紙を開くや否、ものをも云はず躍りかゝり、三絃を目かけてナイフを振つた、絃は最後の響を放つて空に刎ね上り、ナイフは尚三味線の胴皮を貫いた。
事のあまり意外なるに驚いた綾子は、母の側へかけて行つて泣き伏したので、母親は驚いて飛んで來たが義雄が見えないて、椽端へ立出てたがアット呆れた。
燕子花咲き、葉櫻影を宿す池の面に、そこに皮は破られ絃は絕れたる憐れなる樂器が浮びつゝあるのである。
築山の新線したゝるばかりなる木立深き間より漏れ聞ゆるは「萬歲」と叫ぶ義雄の聲であつた（終り）

○磯千鳥

下總國印旛郡酒口井町根古谷　小島よし子

（上）

『では何かえ、お前どうしても篤志看護婦とやらになりたいと云ふのかへ。』
『そー、そうだわ、お母さん。』
『嫌な子だね、そんなものになつてお前どうする氣なの、若い年をしてお前、兵隊さんの仲に這入つて御覧酷い目に遇つてしまふわね。』

「大、大丈夫だわお母さん、お母さんは何時でも十五六世紀時代のことばつかし云ふんだもの、今日のやうに開けてるんだもの……宮田さんなんか」

靜な冬の夜、親子の話である。ランプの光は斜に稍や爪先上りとなつて餘光を二人にあびせかけてる。

「あんなむんずりな軍人さんはありやしないよ、お前はお前の好きなあの貧捧小尉、村田が行つてるから、看護婦になつて行きたいと云ふのだろうけれど、それよりか宮田さんの方がずんと好いわね、大學校は卒業して學問は出來るし、財産はあるし、あのやうなお方が、私所のお婿さんになつて下すつたら、其れこそ開いた口に餅菓子だがね」

「そうすれば好いだろうけれど、さう甘くはいかなくつてよ、村田さんがあるんだもの」

「村田があつたつて搆いやしないやね、戰に行けば死ぬか生るか分らないし、そんな待遠しいことをいふと鬼が笑ふわね、宮田さんなんか御覧、何時だつて手殼で來たことなんかありやしない、必つとお前にはリボンとか髪留とか買つて來るぢやないか、その證據には先達なんか金時計を下すつたぢやないかね、村田なんか一年に一度か二度位のもんだもの、それも好い物なら好いけど、ショールだなんて藝者の着るやうなものばつかしさ」一息ついて

「それだのに宮田さんが嫌だなんて、罸が當るわね」

「………」

女の思ひつめた程恐ろしいものはあるまい、村田小尉の出征以來、益々確固たる戀を形作つて、未來の夫と思ひ定めたのである、そしてもしも戀が叶はなかつて夫婦になれなければ、身投とまで決心したのだ、それを今母から、宮田なんてことを云はれたので、胸は針さゝるゝ如く知らず涙を呑んだのである。

（下）

つゞくともなく飛來つた一羽の千鳥は、今しがた鐵砲に斃れて死んだ一羽の千鳥の上を行きつ戻りつしてる果はそれに縋りついて異様の聲を出して鳴いてる、こゝ海岸の邊り秋の寒む風身を攻むれど、さすがに景色の好き處なれば、どつかりと腰を下ろした二人がある一人は名譽の負傷して凱旋せし村田陸軍少尉、連の女は糸谷かやの娘文子である。

『だつて茂さん、だつてあのうお母さんが承知しないもの、妾が篤志看護婦になるつて云つたつて、そんなものになつてはいけない、宮田と結婚した方が好いな

んて云ふんだもの、宮田て名を聞いても胸騒がするわ、だから妾は村田さんといふ人がありますと、恥かしいけど云つて失つたのよ、そしたら戰に行つた人は生きるか死ぬか分らない、そんな人を待つと鬼が笑ふなんて苦笑ひするんだもの」

思はず打笑んだ文子はぞつと紅を咲したが、茂は何時にない無言

「それで今日だつてやつと來んだわ茂さん、宮田は先達から妾の家に來てるんだもの、何時どんなことが起るか知れやしないわ」

「………………」

「茂さん何かおふさぎて、茂さんてば、あら惡らしいわ」

「矢張しおふさぎなの、邪慳だわね、折角稀に遇つたのに」

「いや別にこうと云ふわけはないてすが」

「ないてすが少しあるとお云ひのてせう、妾心配でなりませんわ」

思ひ出したやうに

「文さん寒くありませんか、おう寒い」縮み上つた。

「されぢやこうして……」

白い文子の手は村田の後に廻つて、ショールは二人の身を被ふた。

「矢張し寒くつて」

「なに、有難い、これで暖かくなつたです、そこで文さん君に一つ願があるですが」

「願つて?」と身を摺寄せた文子、茂の顏を見守つてゐる。

「文さん」手を握つて「世は全く浮世ですね、僕は今此處で立派に文さんと手を引きたいです、手を」

「餘りだわ茂さんあまりだわ、妾何だか知らないけど今更だわ、手を引くなんて」

「今更でも仕方がない、僕は今日初めて悟つたです、到底文さんのお母さんは、君を僕に呉れまい、必ず宮田君と結婚させるに相違ない、之も道理です、宮田君は君のお母さんの兄の子だもの、僕は何んでもない他人です、それに全快次弟再び戰地に行く身てす、素々命の遣取りの職業、一つ一つの命ですから、鐵砲玉一つて已んぬる身です」

「今更、知らないわ、餘りだわ、妾の心はそんな安いもんぢやないわ、妾し妾どうしたつて嫌だわ」

やにはに茂は文子を抱き締めて

「文さんどうも仕方がないです、君は立派に宮田君と結婚して下さい、そして僕が戰死したと聞いたら、千香の一本もたむけて下さい、それが僕に取つて何よりの嬉です、もう後は云ふまい」

二人はひつしりと抱き合つて涙である。前さに見えた千鳥は遂々其處を去つた、名殘り惜しさうに死んだ千鳥を見つゝ。

あゝ神よ神は二人の運命をどうする意か、神よ願くば二人の運命に幸をあたへ給へ。

○雜誌物語

靜岡縣濱松町一　寺田智惠子

茲は○學校の寄宿舍で、今夜は丁度十五夜で、鏡の樣な御月樣は、綿を積んだ樣な雲の上から我が靜かなる室を照して居る。其の奇麗な事と云つたら、何とも云へないのです。妾は今八重子さんとランプをはさんで右袖を机の上に置きて、今夜の奇麗な御月樣を眺めて居る。八重子さんしきりと何か御覽なすッて、御居でゝ、いと靜であッたが、八重子は何か御驚なすッたのか、突然、

「智惠子さん之れ御覽ん！斯樣惡口が出て居ます。」と本を妾の机へ差出しましたから、妾は驚いて振り向ひて見ますと、之は八重子さんの大好の○○雜誌でして八重子さんは右の手を伸して妾に御示しなすて御居でなさる。其の人差指の先には、男尊女卑としてありまして、讀んで見ますと、甚だしい惡口ばかり書き揃へてあッて、誰れでも恨まぬ人は無い位である。八重子さんは妾の讀み終るのを待つて、

「ねー貴女ひどい事が書ひてあるではありませんか一體斯樣のものを書いた人は何も知らない人でしよーねー」妾も眞面目に成て、「ほんに左樣ですよ、男なんかは女を御尻に敷いて誇ッて居るなんて、妾等にくらしくッて堪りませんよ、ねー貴女」

「實地そーですよ、ねー貴女。男だッて女だッてそう變りましようか、それでいつも惡口ばッかり云つて居る」

「そー貴女男の方が却て惡い事をしますよ」

「畢竟自分を知らないのだねー左樣に自分の事を知らなくッて惡口を云ふなんてほゝゝゝゝ」

と、笑て居る妾もにこにこ笑ッて

「まあほんに左樣ですよ」

と、共に少し鼻を高くしたのである

「貴女等何がそーおかしいの？」

と、云ひながら後ろのドアーを開けて入て來たのは櫻井先生と云ふ舍監であるそして愛相がよくて誠によい先生である今夜も見廻りに來たのだが妾等があまり大きな聲で笑つてゐたから何事かしらと入つて來たのだろー

妾等は驚いて振向ひたが先生がにこ〳〵して居つたから妾等も笑つた

先生は又

「何を御話したの？」

と、やさしく御尋ねに成りましたが先に置いた雜誌に御目が附いたと見えて直ぐ

「其れ誰さんの？何の本ですか御見せ下さいなね」

と云ひましたから、妾はそれを取て先生にやると、先生は妾の机と八重子さんの机と列んで居る、北側へ御座りに成てしきりに何か御覽なすつて居たが、やはり先生も男尊女卑と云ふのに御眼がついて御讀みに成つて居たが、

「貴女等之を御讀みなすつて」

「えー只今讀みましたのです、ねー先生ひどいではありませんか一躰斯樣な事を書いた人なんか何も知らないんですね何せ？」

と、お笑ひに成て尋ねましたから妾等は得意氣に成て、

「先生いくら何だつて之れに書た樣な事ばかりありましよーかね、之れ必度惡口から出たのでしよー」

と、話しますと先生はお笑ながら、

「貴女等の御云る事は御最です、だが、ねー未だ女の缺點もあるのですから止むを得ませんのです、だから此の惡口を消すのには吾等が勉强するより外はないから、よくお勉强なさいそうすれば必度鼻が高くなりますから」

と、諭したから妾共は成程と思つて聞て居ますと先生は猶ほ言葉をつがれて、

「それで、元より學校の科目は大切ですから勉强せねばなりませんが、學校の科目だけてはたかゞ知れて居ますから、外の有益な物を讀むとよいのです、殊に雜誌など取て一方に新らしい智識を得、又一方では盛に投書して筆の先を健にすると進歩も早くてよいのです」

と、云はれたから妾は

「では如何樣、雜誌がよいてすか」

と、尋ねますと先生は

「左樣ですね、まあ、是等はよい方でしよー」
と、云ひながら見終つた、雜誌を机の上に置いて、
「あゝ、やつと遊んだから又行うし」
と、云て立上らんとしたとき、ふと裏に出て居た女子文壇に御眼が止まつたと見えて、
「何に？」
と、又本を手に取て、廣告を熟覽して、
「あゝ此の女子文壇の方がよいでしよーハ、之れ廣告を御覽……ね！貴女等斯樣によい雜誌が妾等のために發刊せらるゝのですから、取ては如何ですねよく考へて御覽ん……」
と、云ふて立上り
「左樣なら」
と、後ろのドアーを開いて足音は彼方に行て幽に響くばかりである、

* * * * * *

妾と八重子さんは少しの隙にも筆を取て筆端を磨いて居る先生は
「感心てすね」
と、云つた、ほゝゝゝ

夫婦の教育家
（ともかせぎに就て）

何れの男女學生を問はず、其の學校にある間は、孰れも理想の家庭を畫きつゝある者なるに、扨いよ〳〵一家を構えての理想家庭は大に攻究す可き問題なり、と某教育家は語れり、一例を擧ぐれば某高等學校に教鞭を執れる人あり、其の令夫人も亦某高等女學校に教鞭を執りて國語と家事とを教授しつゝあるが、夫妻とも午前七時ごろに家を出てゝ午後の三時、乃至四時頃に歸り來るの例なるが良人は良人の居間に、細君また自分の部屋に閉ち籠りて出てず女中の聲に促されて漸く夕食の卓に就けば、又た例の如く各々の居室に引き込みて再び出でず適々學術上の問答あるも、啻だ議論するに過ぎず果ては右を左と言ひ、白を黑と爭ふのみ、斯れは妻君なるもの出てては家事の講義を生徒に授くれども芋の煮方も御存じなく、而かも御自分は更に念とするなく、極めて乾燥無味の家庭を作り居れりと是は勿論極端の一例なれども世間に此の例乏しからず、されば今日の處ろ夫婦の『ともかせぎ』は大に考ふべき事ならん云々。



尾上柴舟先生選

天

秋風

長野市花咲町　安孫子美子

天地の寂を傳へ來て
長夜の夢の驚けば
神入間をてらすべく
白羽の征矢か蕭殺の

簷端を掃ふもの音に
迫る有情の秋の聲。
無弦の弓につと射たる
今胸を刺す秋の風。

森嚴、雄偉、悲壯、悉く具備せり。近時有數の作なるべし。

地

せゝらぎ

兵庫縣美嚢郡　常深はな子

晨に花の香を浮べ
うす緑なる春の野を
低きせゝらぎそもや何。
春の女神が秘言か
あらず藝術の御神が
象り彫む鑿の音。

夕べに星の影宿し
ゆる／＼流るゝさゝ川の
はた又戀の囁きか
春の世界の萬象を

第一節、やゝ平凡、第二節にいたりては、はじめて精彩あり。光輝あり。

人

西郷南洲の像に對す

長野市狐池　安孫子美子

西に驅け行く日輪の餘韻幽かにたそかれて

人と魔と呼ぶ地の闇を吁崇高の君が像、
夜風斜に花吹けば笑ますか偉人聲無きに
讀殘の書投げ捨てゝ我今君と茲に見る、
問はん英姿の不死の靈活眼既に閉ざせりや
見よ韓山の雲の色豫言は遂に空ならず、
聞け蓋世の其壯語我が事茲に了はんぬと
笑つて去りし西海の山河青みて又起たず、
偉業は高き丘の上われたゞ知らずひれ伏せば
松籟かみに冷やかに嗟莞爾たり君が像、

叙し去り、叙し來る、大河の滔々たるがごとし。天地に配せざるは、女子らしからざるがためなり。

秀逸

○凱旋の祝福

看護卒某の入營を祝して

横濱市淺間町　小林とき子

ウラルの東長白の　山のいたゝき雪しろく
胡沙吹く風は荒れすさみ　猛き武夫四十萬
日本魂振りだてゝ　肉はいや鳴り骨跳る
武士道の民岩船の　黄金花咲く歡樂に
皇軍撻ちし此冬の　霜月極日召集の
令に勇みて君は征く。

君見よ東三千里　荒るゝ千重波八千重波
船路遙けき太平洋　浮出し、博愛の
汽船に正義の纜解きて　金門港に帆を張れば
風柔かく波ひくゝ　我日の本に來つきては
慈悲の心の松山に　ひるは終日夜もすから
戰傷勇士を看護せし　愛の化神のマギー女史

御空ゆく雲西東　分袖いともにかなしくも
瑞穗の國の快男子　國に事端ある其時に
眞心こめてすめらぎに　つかへまつるは我務め
君よとく行けいざやゆけ　門出の別れの一曲は
君凱旋の祝福ぞ。

○水の囁

名古屋市西魚町淺野方　戸田せいう

水の響のかすけきに　耳を澄ませば囁やくよ
囁やきは何?

「色美しきわれが身は　たゞ白銀（しろかね）の色に似たらずや
清き調べのわがうたは　たゞ琴の音に似たらずや。

聴け詩人（うたびと）よわがうたを　悶の人よ詩（うた）を聴け
自然の秘密おのが色　自然の歎わが響。
聴け汝（な）が悶わが詩に　耳を澄ませば胸はれて
其胸の痛のぬぐはれて　汝が唇は微笑まむ。
悶ゆる人よ汝（な）が悶ゑ　戀にか或は向上か
語れ悶ゑのあはれ汝　われなが悶はらさなむ。」

悶の人は叫びけり
おゝ汝が色は美しく、　汝が呼きは清けきよ。
其美しく清らなる、　汝れが同情（なさけ）を享くるわれ、
など此胸の悶をば、　うちあけざらん聴け水よ。

われは小百合の紅の、　其滴りの蜜をこひ
花に接吻（キッス）する蝶の身の　其羽働の音をきゝ
われは心に悶ゆなり　われは心に悶ゆなり。
水は應へて言ひけらく、
汝ぢの小さき其胸の　慾の焔をうち消して、
わが身の如く清からば、　さゆりの花は汝（な）がこひを
汝れが戀ゆるをゆるすべく、　汝れが悶を慰やすべし。
汝れよ清よかれ我が如く、　美しき胸となれよ汝（な）よ。

○小さき惱み

安藝　堀田温子

雲冷やかに日は落ちて、　愁はせまる夕まぐれ、
又うちさわぐわが胸の、　この思ひこそ怪しけれ。
得たへぬ思胸にあれど、　さすがに弱きたゆたひに、
言はで惱める甲斐なさは、　誰にさゝげん眞心ぞ。
千草つゆ草しげき道、　いつたどりけん夢にして、
暗きが中に日もすがら、　夜すがらひゞく胸の琴。
あゝわづらひの今日も亦、　冷えし胸戸をえ開かで、
苦しやひとり血を呑めば、　面のやつれのしるゝかな。
かゞみにうつる面影の、　やつれはてしも理りや、
ものや思ふと人とふも、　われ得堪へぬつらき哉。
憂の一日またひと日、　闇地にゑどる星のかげ、
冷うのみも光らねど、　斯くても消えん運命（さだめ）なる。

そは何故のうき世にて、　人に誠はありながら、
のぞみは草の花のごと、　咲くまを待たで萎むらむ。
げに光なく榮えなく、　冷う森に潜み咲く、
小さき憂ひの花のかげ、　それにも似たるわが身かな

○霜柱

千葉縣上總國山武郡成東町　吉原靜江女史

朝の宮殿きらゝかに　神のきざめる霜柱
菊の枯葉もしたはゆる　紅うすき玉床や
櫟の木の根一めぐり　土のやはきをたよりては
うねなしたてる長き城　遠く枳殼の垣根まで
つゞく小山の裾に據り　光り輝く殿造り
やがて旭の昇りなば　稜角彩を現ずとも
鳩の下り來て踏まぬ前　運命脆く壞るべく
命短き朝あけよ　たくみの長き思ひでよ
わりなく落ちし我涙　珠の柱は流れたり

○河村菫秋子を送る

麻布第三高等女學校　田原花影女史

夕日は西に傾きて　袖ふく風もさびしきを
狹霧こめたる小松原　かげうすれつゝ君は行く。
げにや浮世の戰に　塵と涙のあとゝめし
額蒼白くうるみたる　瞳をかへし給ふなよ。
自然の彩の美しう　錦かされる春の野邊
詩卷くりてそゞろにも　君まちたりし事ありき。
池の面渡る清風の　涼しう笑める青葉かげ
袖を枕に片しきて　君を夢みて微笑つ
それも短かき蝶の夢　あゝ春ゆきて夏くれて
立つや秋風はだ寒く　脆きは人の運命かな。
君も幸なき子と知るに　弱き心にえ堪んや
結ぶもゆかり露の世の　はかなき命を歌はんぞ。
雲にみだれて美はしき　さ霧にうすれ行く君の
痩せし姿のわかぬまで　せめては此處に見送む。

○胡蝶の夢

越後國栃尾町　内藤ゆき子

羽ね輕うとびかふ胡蝶、　美はしき花のしとねに、
春ふかき夢はやどせど、　いつまでかゝくてはあらむ。

たゞさとれしたゝる露の、見るが中に消えてゆくごと
春花のゆくゑさだめず、ちる影に希望はあらむ。

○露 歌

武州橘樹郡旭村北寺尾　瀧川きよ

櫻づき夜にあくがれて　少女の袖にくだけつゝ
はかなき戀をもろ共に　なげきし者は我ぞかし」
小笹に懸るさゝがにの　糸のとぢめにおき伏して
あれたる宿に玉すだれ　かけしたくみも我ぞかし」
月かげ清き秋の夜は　尾花の袖を宿として
あはれを人に教えつる　しら露こそは我身なれ」
色香たえたるしら菊に　千代を契りてきのふ迄
すぎこし物を露の身の　霜とうつらふはかなさよ」
花の仇よと人は呼べ　清き心を我ぞ知る
いざわが霜のきせ綿に　病む脊の君をあたゝめん」

○露の玉

近江國彦根町　宇多花子

あはれやさしきおん神も　いかなる憂のますやらん
朝な／＼におく露は　自然の神の涙かも
あはれ尊き神の世や　晨の露に花すみれ
白百合さけり美はしく　されば惠の涙かな
あゝいまはしき塵の世や　僞善の涙人の目に
露の玉とは輝けど　落ちてつめたし劍より
さあれ闇にも光あり　聖きみ親の涙もて
我は生きけり世の中に　愛の涙の露をもて
天に道あり白露あり　人に愛あり涙あり
かくして花咲き人は生く　あな光ある露の玉

○春の朝

橫濱市淺間町五九五中島方　小林とき

釋尊金口八萬言、經に結集めて四千卷、
あゝ似たらずや空蟬の、もぬけのからのこれ枯骨、
枯骨叩ひて春の朝、都大路をめでたしと、
無明に迷ふ人の子に、一喝の下破照闇、
薫り絕えせぬ菩提樹の、花いとゆかし今も猶。

○百合と蝶（無情の人）

甲斐市川　秋山雅子

緑小暗き森中に、　一本百合の香も高く
此の世を外に咲き匂ふ、　其の姿こそ崇けれ、
清き香をしたひてか、　羽も輕げに舞ひ狂ふ、
赤く小さき蝶々は、　やがてとまれり百合の花
「荒れし野原を逍遙ひて　涙に暮れし吾はしも、
君を慕ひて來りしを、　あはれと思せ百合の君」
「小暗き森の下蔭に、　ひとり淋しき吾なるに、
やさしき君がみ心を、　などていなまん蝶の君」
浮世の塵のかゝらざる、　森は二人の世界にて
清き心とあつき愛、　聖き戀やさゝやける、
蝶と百合との囁きを、　情心も荒苦
人の子打てばあな哀れ、　此の世の息は絶えてけり。

○春の惠み

岩代國伊達郡小島村　菅野和子

北ふく風も和ぎて　刄の氷柱をるゝとき
山ふところの白梅も、　清き匂ひにほゝ笑まむ、
谷の戸いづるいさゝ川　水あたゝかく流るれば
羽つくろひて鶯も　やさしき聲に名のるらむ、
春の女神の天降り　惠みの光みつるとき
天地のもの甦かへり　野には若草生ひたらん、
そゝろありきに歌ひつゝ　自然のむしろに息ふ時
もつれつよれつ飛ぶ蝶も　つかれし羽根を休むらん。」

○磯の曙

赤阪區新町五丁目四十一番地　河村菫秋子

みそらに清き明星の、　光り幽かにきゆる時、
新潮よする荒磯に、　われたゞ一人たゝすめば、
聖き響ぞおこりたる、
磯の松風おとさえて　汀にもどる浪のはな
しろさは泡かはた雪か　砂路をはしる赤蟹の
ほこ打ち上ぐるも面白や

ひと夜慰安の夢さめて、　ふる巣いでたる鳥〳〵が、
自然の樂をたつるとき、　みそらは暗く紫に、
綠にあけに化しゆきて、

藍を流せる海原は、　ごがねの色をにほはして、
沖にはなびく薄霞の、　ふくしほ風に消えゆけば、
あらはれ初めぬ眞帆片帆、

○磯の海

鹿島市　野崎くま子

紫うすき東雲や、
風にみだれてとふ鳥の、
やがて海原風なぎて、
うら〳〵のぼる初日かげ
光りまばゆきその姿
そこに消えゆく夜の闇
櫻島へとこぎ出づる
聲は波まにほのかにて
空にたなびく雲赤み、
片羽も輕し磯の海、
むら雲何時か消え失せて、
こがれの波を漂はせ
げに長くも尊しや
うら〳〵かすむはつ霞
節おもしろき舟うたや
治まる御代の海しづか。

○星　神

同　　人

空にたなびく夕雲の
中ひき歸る里の子の
ひく〻たなびく夕雲の
愛の女神はいでまして
やがて夕雲消え行きて
希望の星はうかびいで
べに色匂ふたそがれや
征露の歌ひ聞ゆなり
めぐみの光りはなつとき
我等をまれき給ふかな
女神はかくれ給ふとき
少女が胸をてらすらん。

○悟道觀

神奈川縣　平本きよ子

浪のまさごのうらかへし、
世の浮波にたゞよひし、
昨日のゆめの可笑さよ、
雲のかけはし誇りかに、
迷のうちにさまよひし、
さとれば尊きのりの道、
今朝よりみれば縱や夫、
日をかへすとも尙爭て、
名利の雲にのぼらむと、
浮世にかけて空せみの、
心のうちのあゝをさな、
無常をふかく觀じてし、
惡魔のちから世を裂て、
眞如の月をけがし得む、

○若　草

茨城縣　舟橋惠子

あゝ佐保姫の乳房より、
蜜より甘き春雨に、
あのか心にもえそめし、
靈の惠はれかへとも、
溢れ出てけむあたたかく、
うら若草は色も濃し。
その戀草はあはれ今、
惠もなくて萎み行く。

○臨流所感

富山縣　庭山直子

晨に花の香をうかべ
行きてかへらぬさゝ川や
夫にも似たる身なれはか
淸き流れの源は
したゞりいでし昨日より
明日わだつみに注ぎなば
夕に月の影やどし
水のこしかた行末の
ながめて長き憂あり
惜もしげきもりなれや
今日もことなく過しかど
よるべなぎさにくだけなん

○いはかげの泉

長野市　飯塚ぎん子

幾世へにけんいはかげの、
音もしづけくよどみなく、
詩人ならぬ我が胸に、
あたりきらめく日の神の、
かすかにもるゝ其影の、
木のまを渡るそよ風に、
いづこの人のなりはひか、
こけむす岩のそがかげに、
すゑはいづこにわき出て、
苔の衣につゝまれて、
世のちりしらぬ岩淸水、
神のみことひゞくなり、
光も木々にとざされて、
そこに神代の姿あり、
折々ひゞく斧のおと、
異樣にきこゆ耳のもと、
わきて流るゝましみづの、
誰か里人にくまれなむ。

橫濱市　大島照子

○新　調

手毬唄

百八ッ鐘に待ちわびて
今朝はよい春お正月
私が隣の糸屋の娘
貰つた帶は嬉しい筈よ
文筥拾ふに夢さめりや
祝ふた雜煮は歳の數
都の叔父より年玉に
十七此春お婿とり

鳥追ひ

笠は目深に鳥追の
頬にちる髪仇めきて
顏は見られて差しう
音締床しう流しゆく
眼けば眉の痕青く
振向く襟の白さ哉
抱へし三味に面ふせて
姿かくれし浮世小路よ

磐城　綿引しろ子

〇星

野邊も山べもひとすじに
雲雀の歌は花に落ち
人は家路を辿るとき
みそらの端のひとかたに
靜かに笑める星の花
夕の色につゝまれて
蝴蝶は薑の床に入り
淡きかすみの幕いでて
すゞしきまなざし開きつゝ
廣き下界を瞬けり。
あゝ星よ
音も響きもなきなれが
神のまなざし示すとき
その尊しの光にて
遠くへだつる故さとの
老いし父母見るがごと。

日本橋區　佐久間靜子

〇あゝ我が兎

樅の大木の下陰に
墨の香若き墓じるし
こゝこそ我らが愛しける
兎の眠れる處なれ。
情にあつき弟の
供へし野菜の數々も
今はた何の用あらん
あゝわが兎は逝きにけり。
せめてと魂に妹が
手向けしばらのいろ／＼は
昨夜の雨に色あせて
くづれ／＼て香も失せぬ。

＊　＊　＊

逝きし兎のゐますてふ
月の御舟は浮び出ぬ
たゞ何となう悲しくて
胸に愁の波高し。

〇無常

神奈川縣　小野雪枝女史

南のやまのかげくらく、
うしろのみれに狐なく、
こゑ淋しくも聞ゆ也、
折しも響く鐘の音の、
何とはなしに哀しくて、
やをら小窓をあけて聞けば、
諸行無常と告ぐるなり。
錦着かざるたをやめよ、
哀れを知らぬ世の人よ、
憂世の夢をいざゝませ、
此所に來りて一夜寐て、
見ずや玉なす白露も、
けふは枯野のあられ也、
涼しとめてし風さへも、
けふはなが肌さかんとす。
われとたのめる紅顏も、
あした夕にわれ乍ら、
明鏡むなしく懸る世ぞ。
泉門ひとたび掩ひなば、

〇鳥刺

富山縣　清野はる子

軒と軒とのそが中に、
竿をかたげて鳥さしは、
屋根の瓦をながめつゝ、
つとさしとれり小鳥をば、
刺されし鳥をうち見れば、
翼もやれて毛もぬけて、
只ひたぶるに逃れむと、
狂ふが上にいや狂ふ、
久しくあはぬ友どちと、
幼なごゝろを暖めて、
語らふものありなむを、
あはれつれなき鳥刺や、
小田の忘れ穗拾ふべく、
みちし希望をかい抱き、
喜ぶ鳥もありなむを、
鶏の竿こそつれなけれ、
わが屋の軒の雀をば、
いまか捕ふる一刹那、
吾はた／＼と手を打ては、
嬉し小鳥は逃げ去りぬ。

〇蝴蝶の賦

麹町區　岡田刈萱

御神の啓示つたへんと、
暫しを此處に天つ女の、
あもりましせかそもや又、
ミューズの神や化しましゝ。
萬花野山をかざるとき、
天の彼方に彩雲の、
棚引くあたりひら／＼と、
舞ひ來る蝶の妙なるよ。
光り長閑けき春の日を、
そよ吹く風に送られて、
終日はなにあこがるゝ、
さても其身の美くしき。
詩人讚美のこゑをあげ、
あだくみ筆を折り捨てゝ、

ひとしく天を仰ぐかな、
さはれ浮世の習ひとて、
蝴蝶の夢の果敢なくも、
世は秋風のうら寒く、
一本匂ふ菊のはな、
あゝ人の子の幸うすく、
戀に榮にゝしひがし、
生きては花に身をよせて、
詩人汝をとむらひつ、

○初日出

むらだつ雲を排しつゝ
初日は出でぬ山の端に
清けき風は瑞のごと
平和の神の聲高し

○夕の思ひ出

ほの紫の靄たちて
夕の風の冷かに
思ひ出せばこの夕
戀しき君と露の野に
あゝ故郷の君いかに

○秋

さびしい哉や落實の
辿りしあとを眺め見よ
かきの實落つる山畑に
愁ひのまなこ悲しげに
夕かげうすらぐ庭の面に
散るや紅葉の二葉三葉
まだ罪知らぬ少女子の
霜枯れはてゝ花もなき
あした鏡に我れ向けは

汝れが氣高きすがたより。
双樹の花の色はあせ、
覺めては悲し今更に。
選霜しろきませかきに、
これや手向の花にして。
空しき響求めては、
塵にまみれて喘ぎつゝ。
死はしろたへの霜の中、
さても蝴蝶は榮あるよ。

富山縣　中田せつ子

輝耀赫々瞳々と
靜けき山は笑む如く
浮世の塵の影もなく

三重縣　山崎初子

日は早や西に暮れ落ちぬ
ほゝのあたりをなでゝ行く。
我がなつかしき故郷の
語り更かせし夕なり。
あゝ恨めしのこの夕。

富山縣　小川すみ

天地にみちし秋風の
寂寞として秋の老ゆ
餓に痩せたる小狐の
垂れし其尾ぞ力なき
嵐いたみて我泣けば
情ある子のえ堪へんや
戀うしなひしさまに似て
草葉に蝶の夢さむし
あゝいとゞしく老ひたりな

かほそき手もて撫やれば
あゝ吹く風に拂はれて
哀しきかなや夕星の
髮のほつれに風寒し
涙ぞ落つる袖の上を
猶もあはれに宿るなり

○雪のあした

東の空を眺むれば、
葦に似たるうすみどり、
やがてその色うすれ行きて、
是や浮世の朝の神、
置きし白雪やう〳〵に、
歩みし跡は梅のはな、
子等集まりて雪遊戯、
下駄の前齒の端かけて、
見渡す限り野も山も、
平和を歌ふ小雀の、
はるかに見ゆる賤が家も、
二筋三筋けむり立つ、
思ひやる間に白ゆきは、
思へば世とは面白や、

下總　中村由

紅もゆる花色や、
色どるさまの麗はしゝ。
輝き昇る朝日かげ、
げに花やかに美しゝ。
とけ行く時に犬の子が、
あるは櫻に似たりかし。
作るもいとゞ面白く、
二の字のあともをかしやな。
銀の世界と打ちかはり、
啼く音もいとゞ心地よや。
玉のうてなと打ちまがひ、
そのさま繪にも似たりけり。
煙をあげて消えて行く、
人の心もかくならん。

○川べの柳

流れもゆるきさと川の、
曲りくねりしひとすぢの、
綠のかすみ香ばしく、
隆ゆく水もさゝやきて、
散歩にうみて歸へりくる、
袂別ちてわかれ行く、
世のうきことも知らずげに、
風にまかせてよな〳〵と、

常陸　西野はる

岸のやなぎの色ふかし、
道ゆく人も長閑なり。
吹きてみだるゝ花の色、
小舟止むる情あり。
夕べは吾を打ちまねぎ、
晨たは吾を惜みかほ。
殘しくも西ひがし、
靡く川べの糸やなぎ。

はがき文

天

○別れのなみだ

宮城縣米岡小學校内　鈴木幸子

妾は今露ちやんを犇と抱きしめて別れの涙に咽んで居るのです、あゝその泪人生の最も尊とい愛の泪、枯草を辷つて地にしみ込むのでありますが、其處からは來春どんな花が咲くでありませう…………

其處に咲くは菫ならず、永久に萎れまじき金色の愛の花。

人

○鐘の音

埼玉縣浦和のほとり　關香子

『蝙蝠來い〻〻』と夕ぐれ婆さんの脊で歌つて居た君ちやんは今しボーンと一杵の鐘の音に驚いて、婆さんの脊中に縮んでしまつた。吁鐘の音！、未だ四歳の君ちやんに迄、無常寂滅の感を與へるだらうか。

浮世の苦勞知らぬ君ちやんの如何で鐘の音に無常を知り得んやさりながら御身の想像の幽なるとよ

秀逸

○雪の朝

野州　矢島松枝

雨か雪かと思ひて寢し夜半、竹の折るゝひゞきす、今朝眼を開けば白雪皚々、常には目立つ村長殿の白壁の長屋門も何處にか失せし只眼に入る物は鎭守の森の烏の黒さと、籔中の稻荷の鳥居の赤きのみ。

四條派の繪を見る如し

●すゝき野

越中　小川すみ

火を放けたら面白いであらうと思ふと、思ふ程重りに〱たすゝきは、利鎌の樣な物凄い月を半かくしてさる、廣茫たる野原、たゞ秋風の蕭々と衣を打つのみ、忽ち見る一大火烟の猛たるを、アヽすゝき涙あるや。

薄に何の涙なきものをなどて斯くばし思へ給ふ

●躓き　麹町　高橋ゆかり女

星影寒き春の夜妾は最愛の夫に別れて獨り細道を小提灯さげて我家に歸り行くに礑と路の小石に躓きしに二三間程ころ〳〵と地を縫ふて側への溝に落ちし心地惡さ早やこの緣永久に繋れぬを思へて心いとゞ寒かりき

若き身の夫喪ひてはさこそと思ひやり侍ろ

●故山の春　常陸國　西野春女

あゝ慕しき故郷の春景色！よしや山には吉野、水には松島のなくとも、永き年月住みなれし妾が目には、それ等の美にも勝りて、いと樂しく面白く眺めらるゝなり、妾が宿の春の眺めは!!

景よりも心の美なろとよ

●かるた會　日本橋區　佐久間靜子

一度は榮あるかるた會に、出まくほりする折柄、御玉章して御招ぎ下されたる、いざやこの新年を劒はき鉾とりて、巴となり板額となり候はむ。かしこ

やれ恐しや

●四季のわが家　巣鴨　いまぜき

春は霞に蔽はれて、夏は綠に木がくれて、秋は紅葉で色どられて、冬は氷で閉ざされる。嗚呼、なんと眺めのよき、四季のわが家よ。

住めば都の聲あり

●露　埼玉縣　れいか女史

夜もすがら置く露は草木に月宿らせて珠玉に等しき姿はにごりなき我眞心を尚清うせよとてか、旭昇る間の短生涯に哀れに、厚き情のこもれるぞ、うれしかりける、

優しの心や

●夜　滋賀縣　よしみね

世はおしなべて夜の神の御手に歸し、森々と更け渡つて闇き大空には二つ三つ星姫の閃めくのと折々夜風に騷ぐ磯打つ波が此寂寞を破つて訴ふるが如く悲むが如くに聽える、噫我に若干の詩想あるならば。

此心すでに詩想なり

●初日　富山縣　諏訪やい子

立山の空紫色の雲は今や紅の色に變つて暫くして丸い〳〵初日が滿ち〳〵たる望みの光を輝かせて靜に山をはなれましたあゝ此初日平和な初日を出征の勇士達はいかなる心地いかなる思ひを以て迎へられるであり

ませうか。

いかに鉾とる身なればとて故國の春を偲ばでやは

●夕まぐれ　岩代　服部けさ子

薄けれど力ある夕日は櫻の上枝にかぎろひて、そゞろかたき蕾を暖めて居る、こゝみんなみの中庭、花の咲くのはいつの日曜であらう…………

夕暮を悲観せぬ所佳し

●斷腸　福島縣　柏木てつ子

御母さん父ちんは何時お歸りになるの―早く歸るといゝな―何をお土産に買つて來るだろ―、サーベルに帽子……叉急に何時歸るの―父ちんはと呼ぶ坊や、母は只抱き締めて泣くのである。

父上は名譽の戰死者

●思　滋賀縣　よしみね

今し轟々として黒煙を吐き走せゆくは新橋行の列車、吁、我が懷かしく戀ひしく一時も忘れざるたらちねの母は幼なきころ我を置きて東都にさすらひ給ひしなり此汽車や彼の旅客を打ち眺めては、懷偲の情切なり。

至情

●夕ざくら　近江　大石よし子

詩人は笑みぬ。紅き短冊に染めしもの、なにならむか？手を拍ちて、夕陽の坂路を下れば、春風一陣、詩人は再びたち止まりぬ。あはれ夕ざくら、はら〳〵と風に散るなり。

成りし詩や幾篇

●戰地の兄君に　埼玉縣　新井琴子

兄上樣！未曾有の快き新年は和氣陽々たる庭にまゐりました、祖母も、父母も、妾も久江も、皆達者でこの新年を迎へました、紅梅も見事に開きましたよ、一同の寫眞は別包の通り……先はお悦びまでに。

兄上樣は御無事か

●在京の姉に　大分縣　佐野玉江

餘寒去り吾等の好む春日和とはなんぬるに姉君如何と朝夕案ては、「思へども賴みにならぬ秋の空」と常に母樣とかこち文子と「懷かしき君の音信の思はれていと安かれと神に乞ふ身は」尙硯水も盡ざれど後事になん

姉君は嫁ぎし人か、はた學窓の人か

●征士の魂　青森縣　紫紅

月白ふ玄光寺の鐘樓を照らし、夜嵐は時々思ひ出した樣に、そつ―と卒塔婆を渡つて、夫れがまだ新らしい君の御魂場の土まんじう、さびしげにかすかに聞ゆる琵琶の音、哀れ御魂や如何に聞くらん。

あゝ如何に聞きますらん

短歌

佐々木信綱先生選

天

○霜白く吹く風寒しいつの日か　仇平らげて君歸りまさむ

大阪東區東高津南の町十一　田中千枝子

（評）萬里遠征を思ふの情言外にあふる、すぐれし歌。

地

○鴨去りし名殘の波に崩れけり　風に寄りたる桃の花びら

伊豆國湯ヶ島局區市山　古見虹子

（評）いひさま巧にうつくしき歌

人

○亡き姉が形見の指輪ゆるうなりて　思ひ出多き春の夕暮

越後國長岡千手町　武藤枝子

（評）物おもひに思ひやせたる人のおもかげもうかびて。

秀逸

○凩に胡馬の嘶き途切れ〲　雪になり行く滿洲の原

兵庫縣美嚢郡口吉川村大島　津根美花子

○晝しづか十戸の村に鷄なきて　桃の花びら風なきに散る

仝　仝　人

暮鐘

雁の列は山の彼方の雲に入りて　薄を渡る夕ぐれの鐘

福井縣武生町　山﨑菫子

○美しうねむるうなゐが枕邊の

越後國古志郡上組村前島區　内藤ゆき子

ゆりの花わに神おりまさむ　越後國古志郡前島村內藤方　翠夢女史

○

將軍のほまれうたひて野をゆけば
千草八千草花皆おごる(秋日作)　伊豆國田方郡上狩野村市山　古見彩子

○

藤の實の障子に飛びて響きけり
冬の日ぬるきこもり居の椽　伊勢宇治町中の切町　白汀女史

○

うらぶれの身をはつかしみ佇めば
つゞれ衣に梅の花ちる　名古屋市榎町十一番地戸矢納方　永田加須尾

小春

つぶ〳〵と念佛申すおい人の
御寺詣の野の小春道　山口縣都濃郡福川村　峰雪子

衾

厚衾とりかさねても寒き夜を
ますら武士は雪にふすらん　東京市京橋區南佐柄木町三番地　岡田つる子

○

あこがれし女神の御影ふと消えぬ
追うてはかなき白梅月夜　越後國栃尾町清水町內藤方　みゆき會

○

ふるむらじかゝりしまゝにさきにけり

賤が垣根の白梅の花　越後長岡高等女學校　遠藤ちとし

○

新室によき伽羅たきて何となう
人の待たるゝ春の宵かな　横濱市淺間町五百九十五番地　小林とき

禁中春月

右近衛のとのゐ申しの聲更けて
梅おぼろなり春の夜の月　廣島縣神石郡永渡村　渡邊喜市

冬木立

時ならぬ花みたれくる心地して
雪の林の風おもしろき　姫路市坂田町五十二番地　毛呂正子

旅順の陷落を聞きて

陷落のしらせ聞きつゝ今更に
君居まさらばと思ふかなしさ　京都市寺の內通大宮西　三宮つゆ子

春の歌

風かをるおぼろ月夜の花園や
春の御神の出ましところ　宮城縣登米郡登米町金澤　大槻八洲子

○

君にとて縫ひし綿衣の成りし朝
旅順は落ちぬ君幸くあれな

女子文壇の發刊を祝して　和歌山　山東かをる
新玉の明けて開くる此花は武藏の野邊に高く匂はん

冬の歌の中に　越中　中田房子
夕げたく烟とみえぬ枯木立鳥語りて日は落にけり

○　越後　佐藤癸佐雄子
情あつき君が玉章手に取りてしばし見上ぐる夕暮の窓

題知らず　千葉縣　平山みつ子
彼の君は今宵いかにとおぼしまに偲ぶともなくしのばるゝかな

○　千葉　平山みつ子
ある夕九十九の濱に佇めば不遇に泣くかうら若き君

○　長野　手塚とも子
妹との髮ゆひませる南の椽に夕日のあたゝかき哉

○　宮城縣　鈴木幸子
岸にして榛焚くけむり西に流れ流れ渡りぬ湖のうへ

鶯和琴　上毛　吉田はる子
鶯も聲あはすなり來ぬ人を待つらん妹が箏琴の音に

○　仝　仝　人
馬追ひのひな唄遠くきこゆなり木立にかすむ夕ぐれの里

○　鳥取　上山千重子
三年あはぬ乳母なづかしみ來て見ればその家いづこ野馬あそべり

雛　下總　唐津ひこえ
こよ〳〵と親とりひなを引連れて若菜の畑に何かたるらん

偶感　長野　飯塚ぎを子
うれしさはすく悲しさに變る世の人の運命のいともはかなき

○　下總　葛生のぶ子
海に陸に向ふ處の勝軍不士に朝日の影長閑なり

長閑　信濃　佐々木歳子
歌かきて短册つるす梅が枝に鶯なきて午しづかなり

枯野　新潟縣　土田ます
野狐のなく聲冴えて枯野原嵐に低し片われの月

○　三重縣　山崎初子
大君の御稜威もいよゝ輝かむ新玉の今日敵もなびきて

○　滋賀縣　藤居春江子
なつかしき戀しき君に筆ぬらし文かく夜半に牛の聲きく

雪中梅　上總　吉原靜江女史
散らずばそれ共知らで過ぬべし雪間に咲ける白梅の花

母　備前　中島光代
幼子の母をしたひて乳母とともに行く道さむし木枯の風

漁村の冬　岡山縣　松本もと
漁夫の酒くむ夕風さむう繩のとほそに霰たばしる

○　岩代　佐瀨ふぢ子
山姫がかけし小瀧のやさつゞみ春にうたげのしらべ淸らか

月夜亡き友の偲ばれて　群馬縣　吉田きみ子
今よりは月をもめでじ見るたびにわが亡き友の偲ばるゝ身は

○　筑前　花田うらの
君の乘れるふねはいつしか見えずなりて浦風寒う日は暮れんとす

○　東京　佐久間靜子
脊の血もてそめし日の旗門にたてゝあやしきばかり涙ふりくる

深雪　滋賀縣　市川こみ子
さゝのはに降りしく音のたえにしはふかくやなりし夜半の白雪

折りにふれて　富山縣　淸野はる子
君として摘みけん菫悔ゆらくはうつろひやすき紫にして

旅窓　加賀　山上小夜子
夕まぐれ一人旅窓にたゝずめば戀しき方にかりかれの飛ぶ

○　仝　仝　人
旅枕思に惑ひし夜は更けてそゞろに結ぶ古鄕の夢

○　越後　猪俣てふ子
給合せのすさびに倦みてよる窓に萩の芽二寸雨こまかなり

○　名古屋　戸田せいう
かすれ〳〵鄙唄うたふ少女子の聲たそがれて日は暮れんとす

○　上野　靜子
黄昏がれて小鳥の聲も絕えはてし梅の花園月になりゆく

春の夜　群馬縣　清水靜江
今日の日記しるしをばりて旅やかた花間がくれの月を見るかな
うばら　神戸　中村菊子
少女子の遊ぶまがきはあれたれど愛らしくさく花うばら哉
水邊落花　埼玉縣　伊東禮子
夕月もおぼろにうかぶ故さとの板井の水に花ぞちりける
○　遠江　大石よし子
三日月は梅の梢に出て初めて蕾する女花に向ひぬ
春雨　磐城　綿引とみ子
玉椿をり〱おつる音のして庭靜にも春雨のふる
折にふれて　栃木縣　齋藤秀子
稚子のうまいするまにわが夫の寒さ防がん衣縫はん哉
勅題　遠州　芳村梅子
曇りなき御代のかゞみの初空に仰ぐも高し白妙の富士
○　神戸　神山園子
戀に名に戰ひの世をのがれ來てつりする今日のいと安らけき
小村の新年　武藏　持田玉子
松かざり小さういとなむ五月の村村 にひとりの負傷兵もなき
○　大阪　池田賤子
降る雨に小傘つぼめて松蔭にしはしは神のさゝやききゝぬ
○　紀伊　和貝千代子
初日子の綠に薫る梢より壽歌通ふ藤の上の松
○　群馬縣　今井房子
國のため出にし人の安かれと今日も詣でぬ國つ社に
春宵　長野市　安孫子美子
媼説く江戸物語ふと絶えて夜の雨しづか牡丹くづるゝ
軍艦　茨城　舟橋栗子
くろがねの重きみ艦に武夫の輕き命をのせて行くかな
○　富山縣　小川すみ
酒もりて御勝を祝ふ高殿に本犀かをる薄月夜かな
新年の歌のなかに　千葉縣　平川ゆきえ子

若水に面てそゝぎてうぶすなの社にまゐる晨たのしき
○　新潟縣　内藤ゆき子
牛の背にねむる童のゆたかなる夢の花野の風あたたかき
負傷兵　岩代　門多さなへ
身におひしあまたの傷のあとにこそたてしいさをの數は見えけれ
鶯　東京　近藤園子
君しばし窓をな明けそ軒近かき梅の小枝にうぐひすのなく
山路落葉　仝　近藤愛香子
うすぎりのまだ晴れやらぬ麗路を落葉ふみわけ旅人の行く
○　東京　近藤ゆき
苔青き岩間に近かく身をよせて魚つる人のかけかすみつゝ
○　仝　仝人
朝かすみつたへてひゞく鐘のねに森のあなたは寺と知らるゝ
鹿　越中　諏訪やい子
紅葉ちる奈良の都の跡訪へば彼の森近く鹿の聲する
○　岩代　服部貞子
歌はならず思みだるゝ此あさけ鐘の音ひくう鳩なき出でぬ
○　越後　小出とせ子
彈丸か霰の中を男の子等はろすけ打ちとて犬追ひまわる
○　名古屋　戸田せいう
ふりかへり又ふりかへる別れ路の袖に時雨るゝ萩の下露
○　埼玉縣　新井琴子
斥候の駒の跡の音消えて霰たばしる遼陽の原
○　名古屋　戸田せいう
日は暮れて風に波打つすゝき原枯野三里を馬子低き唄
○　越後　内藤露子
廣野原たゞ白雪にうづもれてことさら青う見ゆる池水(汽車中)
○　新潟縣　内藤男喜子
白梅の高きにほひに歌はなりて春の花野の風ここちよき
○　新潟縣　翠夢女史
思ふどちまどゐうたげの盃にはしなくうつる春の花かげ

○うらくとかすむ港の朝清くのぼる初日の影のどかなり(初刊の口繪を)　越後　白雲子
○戰捷と年の始の祝ひ聲響く村々日の丸の旗　近江　宇多花子
○主はゆきてれざめつめたき國の月に音のみたかき玉霰かな　長野市　飯塚ぎな子
○妹の重き病をしろや梅情なく花の窓ちかく散る　磐城　綿引しろ子
○若の浦若蘆そよぐ朝風に白鷺一羽海に吹かるゝ　福岡縣　花田信子
　　折にふれて
○亡き母が御墓に一人さまよいぬ梅の花散る春の夕暮　信濃　紫柳女史
○門松をくゞりて出づる萬歲の鶴の大紋朝日きらめく　埼玉縣　門井美代子
○をさなごの何思ひけんほゝ笑みて眠れる顏のあいらしきかな　上毛　今井八百子
　　春夕
中くにのぼる白帆の面白ろし長閑なる日の利根の夕ぐれ　群馬縣　清水たき子
　　古寺梅
荒れはてゝ住む僧も無き古寺に空しく薫る白梅の花　上野　三木たま子
　　偶感
いかにせむ手折りて贈る人もなし籬に咲ける白梅の花　遠江　小川幸子
○たへかれて暫しまどろむうたたれに結び初めたり故鄕の夢　福島縣　杉原孝子
　　背公
照る月の蔭にたゞよふ村雲をよそに眺めて君をしぞ思ふ　岩代　菅野和子
　　富士山
たぐひなき國にあればそ富士のねもたぐひなしとは仰がるゝなり　神戶　高井菊江
○梅一輪窓の硯に散りうきぬ母なつかしき歌かきをれば　牛込　渡邊まきき子



俳句



巌谷小波先生選

天　ふらゝこの柱のもとやつぼ菫　伊豆國田方郡上狩野村市山　古見彩子

地　初雪や狸訪ひ來ぬ俳諧寺　東京市牛込區矢來町　渡邊まさ子

人　語らせて答へずなりし蒲團哉　東京府北豐島郡巣鴨上駒込　いまぜき

秀逸

いさゝかの酒に醉ひけり宵の春　越後　遠藤ちとし
京に近き鍛冶が小家や梅の花　陸前　山縣柳子
歌の主あと追ふ櫻月夜哉　埼玉　伊東仲子
春風や馬逞しき美少年　信濃　紫柳女史
野の寺や彼岸の入日暖き　埼玉　伊東禮子

詩人の新墓近く菫咲く　茨城　川田牧羊子
舞殿の欄干朽ちて梅白し　横濱　石山政子
自轉車の一隊桃の村に入る　浦和　關　白江
井戸端や雪に印せし鍋の尻　同　人
黎明や花に無常の陣太鼓　同　人

彩も春よ雜煮の花かつを　熊本　松本しげ子
夜は更けて獨り凛たる歩哨哉　石川　西川登代子
音のなき雪ほど深う積りけり　越後　星野紅華
砲壘のおちて長閑けき初日かな　青森　小田駒子
春の日やごろり寢て居る浮世繪師　越後　遠藤ちとし
塔の冬の木立に隱見す　埼玉　渡邊留子
歌留多とり袖の長さをうらみかな　京橋　田中あや子
春風に滿艦飾や朝の海　越後　内藤ゆき子
幽谷や大磐石にすみれ咲く　信濃　安孫子美子
元朝に先づ御眞影拜しけり　相州　内野鈴子
梅に月惜まるゝ夜のはじめ哉　神戸　隼田知節
放しても見たきは鶴よ初御空　駿河　平田俊子
暖や鳥に千里の翼あり　神田　太田照子
二十日月お高祖頭巾や霜の町　京橋　岡田つる子
ダルニーや新開町の松かざり　遠江　大石よし子
ゆあがりの女美し春の宵　越後　内藤ゆき子
老臾の稗史にふける炬燵かな　岩代　菅野和子
滿洲の野を一聲や初鴉　沼津　足立朝子
姉妹の唄むつましき茶摘かな　名古屋　戸田せいう

春若し霽ふる夜を徒歩參り　岩代　服部けさ子
感狀に墨の薰りや朝櫻　武藏　瀧川さよ子
むすぶ年に山かげ動く清水かな　佐賀　武島ひで子
下げ髮のリボン美くし衣更　信濃　佐々木歳子
初東風や緑門にくみし旗の總　伊豆　古見彩子
緞のつの軸の初日を捧げけり　同　人
一隊の紅裙練りぬ櫻狩り　浦和　關　香子
牛の脊の秣に眠る胡蝶かな　伊豆　古見にじ子
御園生の松の繁りや初日の出　上野　安藤夢喜女
蒔繪程盃に載せる菫かな　尾張　岡部ゆく子
寢にもどる鳥さへ遲し春の月　上總　吉原靜江
山にあり野にあり春の人心　同　人
白菊の金短冊や御歌の間　同　人
福壽草机のはじにはや三日　上野　上原重子
若水や春といはれぬ内にくむ　越後　星野紅華
名月や垢多き日を恥かしむ　富山　中田房子
猫の子も繋れて鳴く麥の秋　越中　菫女史
乙女子か力くらべや相撲草　茨城　舟橋惠子
紫に明けゆく空や初鴉　福井　山崎菫子
野の中の一本物に吹雪哉　石川　松原春子
出征の家にも立てし門の松　石川　大屋百枝
元日や曉けぬ先より人通り　石川　石田艶子



寄書歡迎要項社告

每號懸賞募集項目

○論説（半紙又は美濃紙廿四字卅行以內）　日本女子大學校教授文學士鹽井雨江先生選
○舒情文（仝上）
○叙事文（仝上）
○消息文（半紙又は美濃紙廿四字卄行以內）
○ハガキ文（はがき振假名付廿四字四行限）　女子文壇社編輯局選
○短篇小説讀切（總ふりがな付廿四字百行以內）　廣津柳浪先生選
○新體詩（半紙一枚十句以內）　東京女子高等師範學校講師文學士尾上柴舟先生選
○短歌（半紙又は美濃紙一枚三首限）　竹柏園主佐々木信綱先生選
○新舊俳句（官私はがき一枚一句限）　巖谷小波先生選
○圖畫（二寸五分の三寸判風俗景色十枚以內）　山中古洞先生選

▲此外女子文藝又は家庭教育に關する事項其他の通信妨なし

投稿締切は凡て每發行期日の一ヶ月前の事

例號獎學賞品規定

▲小説▲論説▲消息文▲舒情文▲叙事文▲圖畫の賞品左の如し

○天賞：金壹圓五拾錢
○地賞：金　壹　圓
○人賞：金五拾錢
（總て相當價格の物品を贈呈すべし）

▲新體詩▲ハガキ文▲短歌俳句の賞品左の如し

○天賞：本誌三ヶ月分
○地賞：同　二ヶ月分
○人賞：同　一ヶ月分
（總て逐號贈呈す）

賞品は總て揭載披露後一ヶ月を經過の後美麗の證書を添へ贈呈すべし

天地人賞に當撰者は可成次號發行期日の廿日前に「寫眞」送付あれば美術寫眞版にして印刷の上紹介すべし

▲嚴守すべき左記投稿規定必一讀あれ

●投書は各欄とも決して**政治的時事論**に涉るべからざること、●用紙は規定の紙に限る●投書は一行廿四字詰一枚廿一行に認むべし但し句點も一字に數ふべし●投書には題の下には必らず本誌に倣ひ住所姓名を明記し、書體は楷書にて假名は平假名を用ひ明瞭なるを要す●各種の投書は必ず別に認むべし●封筒には『女子文壇原稿』の文字を記すべし●投書の中には他の用事の文句を記すべからず●投書には各自句點を施すべし、圈點は一切施すを禁ず●投書は他人の作物を剽竊するを禁ず之を犯したる當選文は無効たるべし●投書は一切返附せず●此規定に背く原稿は一切沒收す●投書は不足、未納税は一切受取らざるべし●投書丈け取纏郵送するときは開封にして差出せば卅匁迄二錢なり

▲寫眞寄贈＝各地女學校長及敎頭を始め卒業生又は敎育上參考となる寫眞寄贈あれ歡迎して寫眞版に印刷して紹介すべし
▲其他の事項は每號の「編輯だより」欄に就て知らるべし

寄稿締切期＝注意

●第三號（三月一日發行）原稿〆切二月三日迄●第四號（四月一日發行）原稿〆切三月五日迄なり奮て投稿あれ

皆さん此記事は必ず一讀願ますよ

誌友倶樂部

▼私の理想雑誌は今や御社の内より産聲を上げました、ほんとうに嬉う御座ります●私は今まで理想雑誌のなき事を大そう悲んで居りましたが此度女子文壇が出まして私は嬉う御座いますどうぞ皆さんお友達になりて下さい文壇記者様此喜びは私ばかりでなく私のお友達も大へん喜んで居ります雑誌に怪我のない様に健全て發育させて下さい私は祈つて居りますよ御誕生の祝ひに澤山の讀者を送物といたします（京都にて　山田靜子）

▼先日は文壇の御發行を承りて嬉れしさの餘り拙き文を投書いたし又見本一部の御送を願ひ候處誠によき雑誌にてわれ等女子の良誌友とこを存候就ては近々誌代を爲替にて御送りいたす可ければ引續き第二號より御送り被下度先はとりあへず御祝まてかしこ（平川ゆき子）

▼理想の雑誌は今や御社より發行せられたり喜ばしきかなあさましき戰の世は終をつげ又戰爭に明けたる新玉の年のはじめと共に生れ出てたる文のあや玉をいとも芽出度春はまへりてます／＼榮ある名をとゞめ給はんを祝ふになん（西部　野山つた子）

▼記者様はじめ皆様御めでとう御座ります私も誌友の一人で御座いますから以後よろしく願ひます上山千瓩子様御高名は或雑誌で存じて居りますよあなたは御存じないでせうね―記者先生次號から愛讀者の寫眞をかゝげて戴きとう存じますが如何でせう是非御許し下さいましそれから誌友の君たち是非御贊成下すつてどし／＼御寄贈遊ばせ先は御年始旁々御願ひまして（上毛にて　伏島直子）

▼薄黒色の空模様小雨ちら／＼降り出しましていよ／＼冬景色となりました記者様御暇りありませんか私は女子文壇を愛するもので御座います前號のへも女學世界の廣告で知つて拙文送りました萬朝報の廣告で二號の募集が御座りましたでも拙きをもかへり見ずお笑草の様なつまらぬものを御送りしましたが御一覽下されば嬉う御座います（恩田苑子）

▼私木村金と申すものでどうか皆さん妹と思つて……願ひますよ私の土地では今日と明日第三回祝勝會提灯行列があつてよ旅順もとう／＼落ちました皆さん萬歳を唱へませうそれに此女子文壇は何と好い雑誌で御座いませう私貴社のいよ／＼榮んを願ふのよ（名古屋　木村金子）

▼長谷川天渓様に伺ひます第一號の「獨逸哲士の婦人觀」の一節に多妻主義を許してこそ女の幸福はあれ云々の記事ありて新日本婦人たる者は云々とありましたが新日本婦人は操を破つて數多の夫を持たればならぬでせうか（東濃中鹽さわ子）〔記者曰く、貴女は誤解して居ます天渓氏はショーペンハウエルの婦人觀を酷冷だと謂つて日本婦人が此恥辱を雪ぐに心懸けなさいと謂はれたのですもう一遍彼の文を讀みなさい〕

▼歎願!!!師の君内藤あき子様の作にかゝる和歌のあまりに下に出てたるに妾の作のあやまりて天賞に上り師の君に對し何となく心はづかしう御ざいます中村まつ子歎願いたします其賞品を内藤ゆき子様に差上げ下さる様願ひますどうぞ（越後中村まつ子）〔記者曰く、優しのお心かけされど本社の規定は狂ぐべくもあらず候此言染聞きませる師の君は却て喜びまさん〕

▼記者様に一寸御伺ひ申上候投稿規定のうち短歌の部（半紙又は美濃紙に三首と御座候が三首以上に相成候ときは別紙同封にてはいかゞ猶文章と二種同封致して宜敷候也（横濱　さち子）〔記者曰く、宜敷しく候〕

▼俳句及びはがき文は端書に限りますか可成なら和製端書にさして下さる様に願ひます〔記者答御希望通りにて宜敷く候〕倘通信欄を設けては如何です〔記者曰く追て擴張致します〕（越中菫女史）

▼今度の短歌何れも面白く拜見致候が、八丁の東京上田蝶子孃の歌は去月讀賣新聞に記載しありし稻井梨花の「誰が爲めに都に文を學びしぞ母の奥津城秋風寒き」に暗合？せり（伊勢の人）

▼山田姉の一讀を乞ふ文壇の神聖を擁護するは妾等壇友の責任でありませう明治三十八年一月一日曉を告ぐる鷄鳴と共に其産聲を上げた本誌！誌する所の諸姉妹の作趣味津々燦たり爛たり實に是れ妾の好伴侶、然るに悲むべき哉新躰詩欄に及んでは吾れ實に慨せざらんとして得ないのであります、噫剽窃文？人賞を得た、常陸國の土浦町東崎、中山よれ方山田雪子？が投書した「星」なる者は既に々々萬朝報紙ー（たしか）にて讀んだことがあります、ア、吾　愛すべき女子文壇も是がために、一汚點を止め　した文壇のため悲しむべきてはありますまい。、全躰人の作物を吾が者顔に剽窃して投稿す　者は奈何なる心事でするのかしら營利的になす〃てせう賢明なる記者閣下一刀兩斷の處置を以て右山田姉の作を本誌より删除して神聖なる雜誌となされんことこそれかはほしけれ、又山田姉は罪を悔ひ筆を清めて再び出陣なし玉ひば妾等壇友は喜んて未見の君と友になりませう又撰者だとて罪を許すに咨ならずてせう。多罪（神田橋畔原雪渓女史）

▼本誌第一號の新體詩欄にて入賞「星」てふ題は曾て中學世界四卷五號に投じて四等賞を得しものと寸毫の違ひなし定めし盗みしものならん又た小說欄にて天賞を得し「殿上の初日の出」なる作は中學世界八卷一號にて秀逸を得し渡邊霞村君と同人ならん何と慾の深い人てはないか一つの文を二ヶ所に投じて賞（三圓）を貪り取る大慾（千葉縣　小皮白蝶子）

編輯たより



▲榮ある日本國は、門松の飾りもいつしかに除れ、早や清香匂ふ梅花の季節を相迎ひ候、想ふに誌友諸姉の詩想も彌よ新たに、此希望ある新時代の文運に獻ぐる所あらんとするの意氣、更に熾んなることと存候、否、爾かあらんことを祈り候。▲本誌第一號は、非常の同情と賞賛とを以て歡迎せられ、再版、三版、忽ち羽の生へたる如くに、飛び行き申候、本誌發刊の當日は、恰かも旅順陷落の大快報を得たる日にて、期せずして絶好の紀念物を諸姉の前に呈し得たるは、洵に悅びに堪へざる所に御座候。▲而して猶此好紀念物を需むるに急なる諸姉に對し、洽く之を頒ち得ざるを遺憾とし、更に第四版を増刷致し候に、これ又た忽ち出で行きて殘り尠なく相成申候、吾等は諸姉が斯くの如く文藝に熱心に、斯くの如く多くの同情を寄せて、吾等の素志を成さしめんとせらるゝには、衷心深く感謝の念泝くを覺えず候。▲前號に豫告したる名家諸先生の玉稿中、紙数に制限せられて止むなく次號に繰廻し候分有之は、甚だ遺憾とする所に候、宜しく諸姉の諒察を仰ぎ申候。▲本號よりは〔美文〕、〔雜文〕の兩欄を廢し新たに〔論文〕〔舒情文〕、〔叙事文〕の三欄を設くることに致し候、此旨篤と御記憶下され度、以上の三欄に入るべき文の性質は、茲に説明せずとも、賢明なる諸姉には充分御承知のことと存候。▲序でながら〔女流短評〕は、日本全國の女名士に就て試みたくと存候へば、本誌の爲めに地方に於ける女名士の寫眞及傳記等を萃めて、御寄贈あらんことを切望致し候。▲別項投稿規定にも明記せる通り、〔小說〕、〔はがき文〕には必ず振假名、句折を明記し下され度候、又た小說其他の未定稿は斷じて採り申さず候間、之れまた御承知下され度候。▲前號〔消息文〕の天に入選せし「雪見に招ぐ文」は、麴町ゆかり女にあらずして神奈川縣平本きよ子に有之、記者は茲に愼んて粗忽を謝し申候▲本誌本來の旨意として諸姉の文稿は、總て掲載致すべきなれども、本號締切迄に着したる分意外に多く、爲めに次號へ繰廻したるもの尠なからず候、斯の如きゝは本誌の隆盛なるにつれて、或は度々有之べくと豫想致し候へば、諸姉も其お積りにて益す多く投稿せられんことを祈り申候。▲第一號の〔新體詩〕欄中、入選に入りし「星」なる一篇は、剽竊なりとの知らせに接し申候、眞僞は未だ判然せず候へ共、本社は暫らく賞品の發送を見合せ候、本誌發途の第一歩に於て、斯くの如き厭むべきを有之候は甚だ遺憾に堪へざる所に御座候、女性本然の優しき心に背きて、斯ることをなさるゝ人は、行手のことも思ひ遺られてうら悲しき心地の致し候。▲募集致し候〔圖畫〕は集りしもの甚だ少數にて、本號には遺憾ながら掲載し得ず、次號には妙腕を揮つて本誌に光彩を添へられんことを切望致し候、又懸賞當選者は速かに寫眞御送附下され度候。▲尚々申上度候へ共紙數に制限せられ之にて擱筆仕候、匆々不一

定價

女子文壇（毎號美術水彩密畫寫眞銅版口繪挿入）每月一回一日發行

一册（大判百頁以上）前金拾錢	一册定價郵税共金拾壹錢	外國行
六册 前金五拾七錢	六册定價郵税共金六拾三錢	郵税共
十二册 前金壹圓八錢	十二册定價郵税共金壹圓廿錢	拾四錢

注意

●本誌は前金の外一切送本不致候●御申込の前金相切れ候節は無斷送本停止仕候●代金過不足のなき樣注意被下度候●領收書は一切差出さず候着本にて領收と見做被下度候●御注文の號、册數及御住所氏名等は文字明瞭に御認め可被下候●郵便爲替には御自分にて一切記入せずに願上候●郵券代用は必ず定價の壹割增（可成壹錢券）に願上候●御狀の未納税は一切受取不申候御發信の際御注意可被下候●御問合の件は凡て返信料添付願上候

廣告

掲載料

種別	一頁（二十四字六十四行）	半頁（二十四字三十二行）	一行（五號字二十四字）
普通	金九圓六十錢	金四圓八十錢	金拾五錢
特別（表紙二面四面）	金十二圓五十錢	半頁以下は御斷申上候	○

〆切 發行前十五日

◎廣告取扱

神田區千代田町二番地 博報堂
仝區末廣町三十八番地 富士原秀穗
京橋區南佐柄木町 日本廣告株式會社

明治三十八年一月廿九日印刷
明治三十八年二月一日發行

不許轉載

定價金拾錢

編輯兼發行者 東京市京橋區大鋸町十一番地 野口竹次郎
印刷者 東京市京橋區西紺屋町二十六七番地 石川金太郎
印刷所 東京市京橋區西紺屋町二十六七番地 株式會社秀英舍

發兌元 東京市京橋區大鋸町十一番地 女子文壇社

直接特約 大賣捌所

東京市神田區表神保町三番地 東京堂書店
東京市京橋區尾張町二丁目 東海堂
東京市京橋區鎗屋町十三番地 北隆館
東京市神田區表神保町 上田屋書店
東京市京橋區鎗屋町九番地 良明堂
新潟縣長岡町字表一之町 酒井屋書店

明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可

三版

東京　株式會社秀英舍印刷

定價金拾錢　郵税壹錢